三谷国ヶ谷遺跡
三谷9号墳

一般県道河原インター線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008.3

財団法人　鳥取市文化財団

三谷国ヶ谷遺跡
三谷9号墳

一般県道河原インター線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008．3

財団法人　鳥取市文化財団

三谷国ヶ谷遺跡全景（北東から）

序

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えております。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施しました河原町三谷国ヶ谷遺跡・三谷９号墳の調査は、一般県道河原インター線道路改良工事に伴う発掘調査として、平成18年度に調査を行いました。この遺跡は三谷川東岸の八頭町とを介する丘陵および小谷部に展開します。周辺では、平成15年度に旧河原町による試掘調査、16年度に三谷川西岸丘陵で郷原石堂口遺跡・郷原古墳群の発掘調査が行われ、古墳時代中～後期の古墳５基と土坑が明らかとなりました。18年度には、郷原地才工下平遺跡で６世紀代の竪穴住居、土坑、柱穴が、三谷国ヶ谷遺跡では、８～16世紀代の掘立柱建物、土坑、溝などが見つかり、当地域の古代集落の具体相を知る上で貴重な成果を得ることができました。

これらの調査成果は、当地域のみならず古代因幡地方の歴史を探る上で大きく役立っていくものと思います。ささやかな冊子ではありますが、市民の皆さまをはじめ多くの方々の郷土を考える一助になれば幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様、ご指導・ご助言を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成20年３月

財団法人　鳥取市文化財団
理事長　山崎祥次

例　　言

1．本書は、一般県道河原インター線道路改良工事の事前調査として実施した三谷国ヶ谷遺跡、三谷９号墳の発掘調査報告書である。
2．三谷国ヶ谷遺跡、三谷９号墳は、鳥取県の委託を受けて、財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センターが平成18、19年度に実施した。
3．発掘調査を実施した遺跡の所在地は、鳥取市河原町大字三谷字国ヶ谷である。
4．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5．現地実測・写真撮影、遺構図面の浄書は、調査員、補助員を中心に発掘調査参加者の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測・浄書は、神谷伊鈴、濱橋博子を中心として行った。出土遺物観察表は神谷伊鈴が作成した。本書の執筆、編集は谷口恭子が担当した。
6．現地調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からの指導、助言ならびにご協力をいただいた。厚く感謝いたします。

凡　　例

1．本書における方位、座標値は、第１図を除き国土座標第Ｖ系(世界測地系)による。また、高さは海抜標高である。
2．本書で遺構の略号として、掘立柱建物；SB、土坑；SK、溝状遺構；SD、ピット；Ｐを使用した。
3．今回の調査によって出土した遺物は、遺跡名、遺構名、遺物台帳登録番号、取り上げ年月日を基本的に注記し、写真や図面などの記録類も同様である。
(例；三谷　SK01　№62　2006.08.25)

本 文 目 次

序
例言
凡例
第１章　発掘調査の経緯
　第１節　発掘調査にいたる経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 1
　第３節　調査の組織・体制 …… 2
第２章　遺跡の位置と歴史的環境
　第１節　三谷国ヶ谷遺跡、三谷９号墳の位置 …… 3
　第２節　遺跡の歴史的環境 …… 3
第３章　調査の結果
　第１節　三谷国ヶ谷遺跡の調査
　　１．調査地の立地と層序 …… 6
　　２．掘立柱建物 ……13
　　３．土坑 ……14
　　４．溝状遺構 ……21
　　５．その他の遺構と遺物 ……30
　第２節　三谷９号墳の調査 ……38
　第３節　まとめ ……43
写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　三谷国ヶ谷遺跡周辺遺跡分布図……4
第２図　三谷国ヶ谷遺跡調査地位置図……6
第３図　三谷国ヶ谷遺跡調査前地形図 ……7・8
第４図　三谷国ヶ谷遺跡谷部全体図 ……9・10
第５図　谷部調査区土層断面図 ……11・12
第６図　SB-01実測図 ……13
第７図　SB-02実測図 ……14
第８図　SK-01実測図 ……15
第９図　SK-02実測図 ……15
第10図　SK-03実測図 ……15
第11図　SK-04実測図 ……15
第12図　SK-05実測図 ……15
第13図　SK-06実測図 ……15
第14図　SK-07実測図 ……16
第15図　SK-08実測図 ……16
第16図　SK-09実測図 ……16
第17図　SK-10実測図 ……16
第18図　SK-11実測図 ……16
第19図　SK-12実測図 ……18
第20図　SK-13実測図 ……18
第21図　SK-14実測図 ……20
第22図　SK-15実測図 ……20
第23図　SK-16実測図 ……20
第24図　SD-01実測図 ……21
第25図　SD-02実測図 ……21
第26図　SD-03実測図 ……21
第27図　SD-04実測図 ……21
第28図　SD-05実測図 ……22
第29図　SD-06実測図 ……22
第30図　SD-07実測図 ……22
第31図　SD-08実測図 ……22
第32図　SD-09実測図 ……24
第33図　SD-10、11実測図 ……24
第34図　SD-12実測図 ……24

第35図　SD-13、14、15、16実測図……25
第36図　SD-17実測図……25
第37図　SD-18実測図……26
第38図　SD-18出土遺物実測図……26
第39図　SD-19、20実測図……27
第40図　SD-21実測図……27
第41図　SD-22実測図……27
第42図　SD-23実測図……28
第43図　SD-24実測図……28
第44図　SD-24出土遺物実測図……28
第45図　SD-25、26実測図……28
第46図　SD-27実測図……30
第47図　SD-28実測図……30
第48図　SD-29実測図……30
第49図　P-198出土遺物実測図……30
第50図　谷部上段出土遺物実測図……31
第51図　谷部下段出土遺物実測図(1)……32
第52図　谷部下段出土遺物実測図(2)……32
第53図　谷部下段出土遺物実測図(3)……33
第54図　谷部下段出土遺物実測図(4)……34
第55図　谷部下段出土遺物実測図(5)……34
第56図　丘陵部三谷9号墳墳丘遺存図……39·40
第57図　丘陵部三谷9号墳墳丘断面図……39·40
第58図　丘陵部出土遺物実測図……38

挿表目次

第1表　谷部ピット状遺構一覧表……35
第2表　出土遺物観察表……41
第3表　掘立柱建物一覧表……44
第4表　土坑、溝状遺構一覧表……44

図版目次

巻頭図版　三谷国ヶ谷遺跡全景(北東から)
図版1　三谷国ヶ谷遺跡調査前(北東から)
三谷国ヶ谷遺跡谷部調査前(南西から)
図版2　三谷国ヶ谷遺跡谷部全景(南西から)
三谷国ヶ谷遺跡谷部土層ベルト設定状況(北東から)
図版3　谷部土層ベルト設定状況(南西から)
谷部C-C″(北壁)断面(南西から)
SB-01、02遠景(東から)
図版4　SB-01検出状況(西から)
SB-02検出状況(北東から)
SK-01検出状況(北から)
SK-02検出状況(北西から)
図版5　SK-03検出状況(北西から)
SK-04検出状況(南西から)
SK-05検出状況(南から)
SK-06検出状況(南西から)
図版6　SK-07検出状況(北西から)
SK-08検出状況(北西から)
SK-09土層断面(北西から)
SK-09検出状況(北西から)
図版7　SK-10検出状況(北西から)
SK-11検出状況(西から)
SK-12検出状況(北西から)
SK-13検出状況(北西から)
図版8　SK-14検出状況(北から)
SK-15検出状況(南東から)
SK-16土層断面(北西から)
SK-16検出状況(北西から)
図版9　SD-01～05検出状況(南東から)
SD-06検出状況(北西から)
SD-07検出状況(南から)
SD-08検出状況(西から)
図版10　SD-09検出状況(北から)
SD-10、11検出状況(北から)
SD-12～16検出状況(北から)
SD-17検出状況(南西から)
図版11　SD-18～20検出状況(北から)
SD-21～23検出状況(西から)
SD-24検出状況(北東から)
SD-25、26検出状況(北西から)
図版12　SD-28検出状況(西から)
SD-28土層断面(西から)
SD-29検出状況(北東から)
図版13　三谷国ヶ谷遺跡丘陵部調査前(北から)
三谷国ヶ谷遺跡丘陵部全景(北から)
図版14　丘陵部土層ベルト設定状況(北から)
三谷9号墳土層ベルト設定状況(南西から)
三谷9号墳北西断面(北東から)
図版15　三谷9号墳北東周溝土層断面(北西から)
三谷9号墳南西周溝土層断面(北西から)
三谷9号墳全景(南西から)
図版16　SD-18出土遺物
SD-24出土遺物
P-198出土遺物
谷部上段出土遺物
谷部下段出土遺物
図版17　谷部下段出土遺物
図版18　谷部下段出土遺物
丘陵部出土遺物

第１章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査にいたる経緯

三谷国ヶ谷遺跡、三谷９号墳は、鳥取市河原町三谷に所在し、千代川と八東川・私都川が合流する国中平野入口部の南丘陵中に展開する。古来より三谷、郷原周辺には古墳や遺跡が数多く分布することが知られ、昭和30年に町指定文化財である郷原１号墳、昭和58年に中世の集落遺跡である前田遺跡、昭和60年に弥生～奈良・平安時代の住居跡が見つかった郷原遺跡など古くから発掘調査が行われてきた地域である。

今回、三谷国ヶ谷遺跡、三谷９号墳の発掘調査の契機となった一般県道河原インター線道路改良工事事業は、中国横断自動車道姫路鳥取線河原インターチェンジへのアクセス道として国道29号線と53号線を結び高速道路網を補完する幹線道路として鳥取県が整備計画した事業である。工事区域は郷原古墳群の展開する丘陵および谷部を東西に横断することから、またその他の遺跡所在の確認を行うために河原町教育委員会が平成15年に工事区域の試掘調査を行っている。

試掘調査の結果、郷原周辺では古墳２基と遺跡３箇所、三谷周辺では果樹園内に８～９世紀の遺構が新たに確認され、関係機関と協議の結果、記録保存で対応することとなった。なお、平成16年６～10月に河原町教育委員会が郷原11号墳の調査を実施し、報告書が刊行されている。平成16年11月、河原町を含め周辺９市町村が合併して新鳥取市となったことから、鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センターが残りの調査対象となる遺跡について調査を行うこととなり、平成17年に郷原石堂口遺跡、郷原古墳群、平成18年に郷原地才工下平遺跡の調査を実施し、報告書を刊行している。

第２節　発掘調査の経過

三谷国ヶ谷遺跡・三谷９号墳の発掘調査は、鳥取県の委託を受け、財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センターが平成18年度に現地調査を、19年度に報告書の作成を行った。

平成18年度は、６月から発掘資材の調達・整備など調査準備に取りかかった。立ち木の伐開整理の後、業者委託により、丘陵部の稜線を延長した調査地の長軸ライン（Ａ～Ｉ杭ライン）と10m毎に直交する基準点測量を兼ねた方眼杭を設定した後、調査前の現況の地形測量を行った。その後、発掘資材の搬入などを行い、丘陵部南西端から手掘りによる表土除去に取りかかるなど本格的な調査を７月下旬から開始した。

また、調査地東側に当たる谷部は、果樹栽培により段状の平坦地に改変され、特に北側斜面高位では段下に掘り込まれた溝も相まって大きな段差が認められた。耕作土も厚く、河原町が調査した谷部の試掘トレンチ（T1-1～3）をもとに、遺構面近くまで重機による掘り下げを９月中旬に行い合わせてベルトコンベアーを導入して作業の効率化を図った。

調査の結果、調査区東側の谷部では、掘立柱建物２棟、土坑16基、溝状遺構29条、ピット260基と、奈良・平安～江戸時代前期にわたる遺構、遺物が検出された。調査区西側の丘陵部では、古墳後期と推定される円墳１基（三谷９号墳）、西裾部に重複する土坑（肥料穴）群を検出した。谷部の土坑の中には焼土を多く含む土坑SK-09、16があり、溝状遺構は小規模で短く完結するものが比較的多く見られた。またSD-28では溝底に石列が検出された。

調査を通じて、遺構・遺物については適宜写真撮影や実測をして記録をとり、取り上げを行った。また、業務委託による調査区の遺存実測を実施した。こうして撤収作業を行い平成19年１月19日に現地調査を終了した。

出土した遺物、写真や図面などの記録類の整理は一部現地調査と並行して進め、出土遺物については水洗い後注記、接合・復元作業を行った。平成19年４月より整理作業終了後順次報告書作成作業にとりかかり、平成20年１月末に終了した。

第3節　調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成18年度

調査主体　財団法人　鳥取市文化財団

理事長
兼常務理事　山﨑　祥次

副理事長　三田三香子

住田　高市

調査指導　鳥取市教育委員会　事務局文化財課

事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センター

所長　前田　　均

副所長　山田　真宏

調査事務　秋田　澄世

調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センター

調査員　前田　　均

谷口　恭子

神谷　伊鈴

調査補助員　下多みゆき

濱橋　博子

平成19年度

調査主体　財団法人　鳥取市文化財団

理事長
兼常務理事　山﨑　祥次

副理事長　三田三香子

住田　高市

調査指導　鳥取市教育委員会　事務局文化財課

事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センター

所長　前田　　均

所長補佐　山田　真宏

調査事務　秋田　澄世

調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センター

調査員　谷口　恭子

神谷　伊鈴

調査補助員　濱橋　博子

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　三谷国ヶ谷遺跡、三谷９号墳の位置

三谷国ヶ谷遺跡、三谷９号墳は、鳥取市河原町(合併前の旧八頭郡河原町)三谷に所在する。鳥取市は県東部に位置し、面積237.25㎢、人口20.1万人を擁する県庁所在地である。平成16年11月に河原町を含めた周辺九市町村による広域合併を行い、北は日本海を臨み、南は岡山県と県境をはさむ。河原町は県東部のほぼ中央部に位置し、東西17.6㎞、南北9.3㎞と東西に長く総面積83.62㎢である。町の東端を千代川が南北に貫流し、交通の大動脈である国道53号線もそれに沿って岡山県へと続く。千代川の中流域および支流の八東川、曳田川、宇戸川下流域を小平野とし、西方一帯には標高200～1,000mの山地に囲まれた山間部が広がる。河原町の地質は多様で、町の西半は中生代火山岩類が広がり、東半は鳥取総群と総称する新第三紀中新世～鮮新世の地層や岩石に広く覆われており、三谷地域は鳥取層群円通寺礫岩砂岩層の礫・砂・泥互層から成り、ブナ・カエデなどの植物化石が一部で産出する。谷底平野を中心とする平坦地を水稲栽培、居住域に、低丘陵部は梨などの果樹栽培や畑地に利用している。

三谷国ヶ谷遺跡は、河原町の中央部東端に位置し、河原町と八頭町とを介する標高70～100m程度の低丘陵中に展開する遺跡である。この丘陵は、千代川と八東川、八東川と私都川が合流する国中平野入口および国中平野の南西後背丘陵にあたる。この丘陵には、先端に加賀瀬古墳群および加賀瀬遺跡が分布し、さらに500m南西に前方後円墳である７号墳(全長30.5m)を頂とする郷原古墳群、弥生竪穴住居や掘立柱建物を検出した山手森谷上分遺跡などが分布する。調査地はこの郷原古墳群の分布する南北に延びる丘陵の西隣の小尾根とさらに西側に広がる小谷部から成る。現三谷集落から100m北西の周囲は見通しはきかないものの日当たり良好でなだらかな丘陵微高地が広がり、現在果樹栽培や畑地として利用されている。三谷川対岸の郷原丘陵地域には、標高93mで郷原石堂口遺跡、郷原古墳群が所在し、一昨年度調査が行われている。丘陵裾の郷原集落地域にも遺跡が数多く分布することが知られている。圃場整備に伴い、昭和58年に郷原遺跡、昭和60年に前田遺跡の発掘調査が行われている。

今後、中国横断自動車道姫路鳥取線および河原インター線の完成によって遺跡周辺の状況は変化していくとみられ、河原インターチェンジ建設予定付近に平成17年春、河原町清流茶屋道の駅がオープンした。その東側一帯の丘陵、谷部を横断するように河原インター線の工事が一部急ピッチで進んでいる。これら交通網の整備・開発によって今後景観は徐々に変貌していくものと考えられる。

第２節　遺跡の歴史的環境

河原町内には、現在のところ、230箇所余りの遺跡が確認されている。

【縄文時代】　河原町で縄文時代の遺跡としては、前田遺跡や国英駅南西に位置する下中溝遺跡で縄文土器がわずかに出土しており、隣町の用瀬町でも余井遺跡、鷹狩遺跡で縄文土器や石器が出土している程度である。八東川流域の旧郡家町万代寺遺跡では後期～晩期と考えられる落し穴53基が、西御門遺跡では多くの後期磨消縄文土器、石器がいずれも発掘調査で見つかっている。また、中国山地山間部に位置する縄文時代の遺跡として智頭町智頭枕田遺跡が挙げられる。平成14年、早期および中期末から後期初頭の竪穴住居多数が発見され、内６棟に石囲埋甕炉が遺存するなど10万点を越す土器・石器などを含め、西日本最大級の縄文集落遺跡として注目されている。

【弥生時代】　河原町で弥生時代の遺跡は、今在家の上土居遺跡から中期土器数片、下中溝遺跡から後期後葉の土器、前田遺跡で同じく後期後葉期の掘立柱建物と土坑、郷原遺跡で竪穴住居３棟、山手森谷上分遺跡でも竪穴住居が検出されている。現状では千代川と八東川が合流する平野南東の丘陵裾の微高地、河岸段丘上に弥生遺跡の分布の中心があり、同じく曳田川流域や佐貫周辺の段丘上でも同様な状況で弥生集落が推察されている。国中平野周辺では、八頭町丸山遺跡で中期の竪穴住居１棟、万代寺遺跡

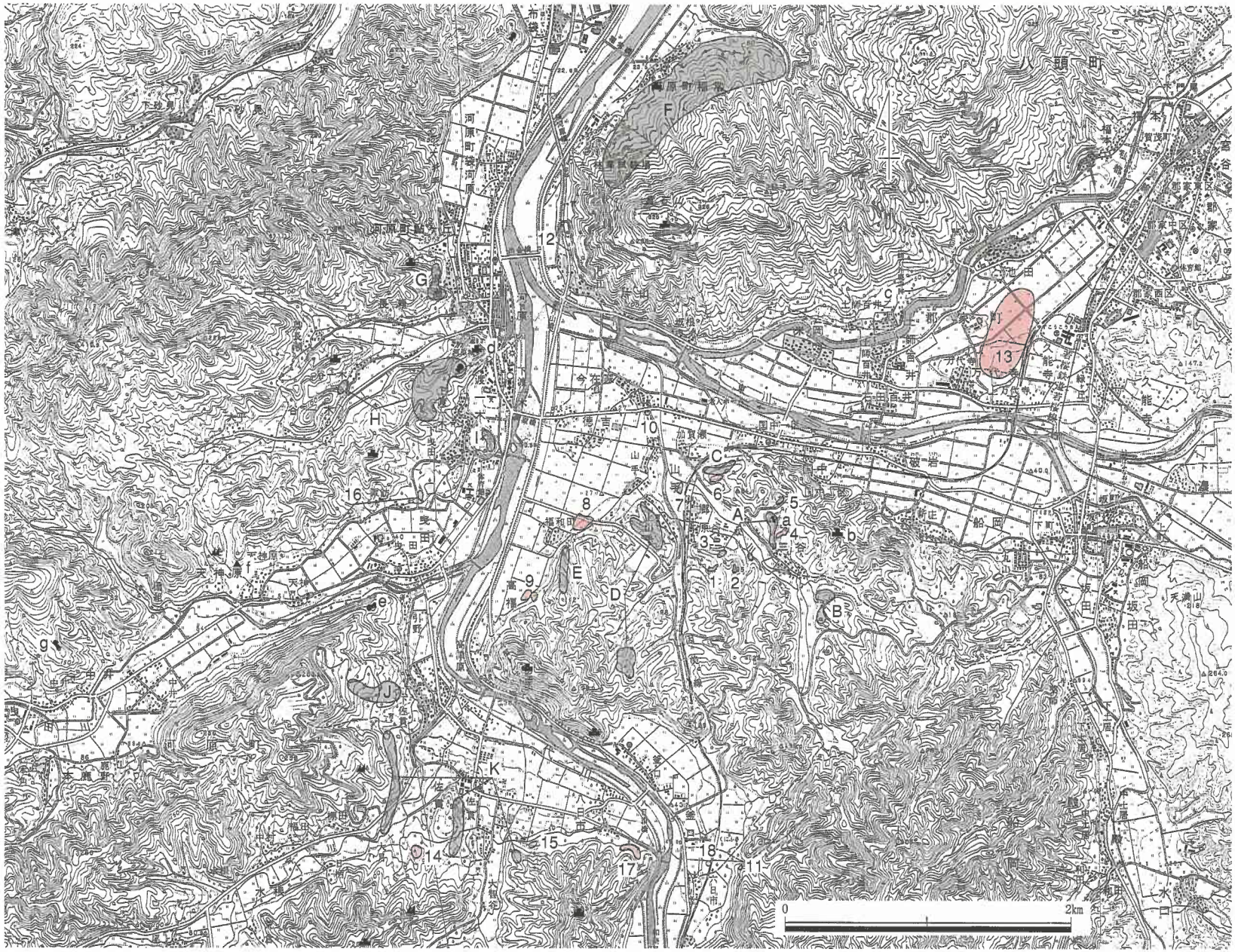
A　郷原古墳群
B　三谷古墳群
C　加賀瀬古墳群
D　山手古墳群
E　高福古墳群
F　稲常古墳群
G　長瀬古墳群
H　谷一木古墳群
I　渡一木古墳群
J　大平古墳群
K　佐貫古墳群

1　郷原地才工下平遺跡
2　郷原石堂口遺跡
3　郷原第１遺跡
4　三谷国ヶ谷遺跡
5　山手森谷上分遺跡
6　加賀瀬遺跡
7　前田遺跡
8　高福所在遺跡
9　高福大将軍遺跡
10　上土居遺跡
11　釜口遺跡
12　片山遺跡
13　万代寺遺跡
14　佐貫遺跡
15　佐貫上台遺跡
16　曳田遺跡
17　八日市経塚
18　下中溝遺跡

a　郷原７号墳
b　三谷城跡
c　土師百井廃寺跡
d　丸山城跡
e　八上１号墳
f　天神原須恵器窯跡
g　中井１号墳

—凡例—

集落遺跡・遺物散布地
墳墓群・古墳群
主要古墳
横穴
城跡



第１図　三谷国ヶ谷遺跡周辺遺跡分布図（Ｓ＝１：40,000）

でも竪穴住居のほかに中期の土壙墓群が、久能寺狐塚遺跡でも後期の竪穴住居が調査されている。

【古墳時代】　古墳時代に入って、平野を望む丘陵上に古墳が築造されるようになる。千代川西岸の簗瀬山(標高283m)の尾根先端に立地する嶽古墳(八上１号墳)は全長30.5mの前方後円墳で、中期後半～後期前半頃の築造と言われている。曳田川２㎞上流部には全長55mを誇る八頭郡最大の前方後円墳中井１号墳が展開する。この間の曳田川左岸丘陵裾には６世紀後半～末葉の天神原窯跡群が分布しており６世紀代にこの地域では須恵器生産が開始されたことが明らかとなっている。千代川東岸では霊石山(標高334m)北裾に展開する稲常古墳群は82基からなる河原町最大の古墳群である。霊石山南側では八頭町米岡古墳群、福本古墳群などが分布し、河原町寄りでは千代川と八東川とが合流する平野南東の山手および郷原集落後背丘陵に古墳が集中する。山手古墳群、加賀瀬古墳群、郷原古墳群である。特に18基が確認されている山手古墳群では１号墳で盤龍鏡、７号墳で変形神獣鏡が出土したとされる。この他加賀瀬古墳群では径26mの円墳２号墳が含まれ、郷原古墳群中には全長30.5mの前方後円墳である郷原７号墳が注目される。発掘調査された小規模円墳である５世紀後半の郷原１号墳は箱式石棺から鉄刀、刀子、高杯転用枕が、６世紀後葉の11号墳は木棺直葬の墓壙内から須恵器蓋杯を主とした供献土器が、昨年度調査された５世紀中葉の方墳14号墳は木棺直葬の墓壙内から鉄剣、高杯転用枕が出土している。この他、弥生時代から続く集落遺跡として、郷原遺跡で弥生終末～古墳時代初頭の６棟の竪穴住居が、八頭町万代寺遺跡、久能寺狐塚遺跡で中期の比較的まとまった数の竪穴住居が調査されている。

【歴史時代】　律令体制下、この地域は因幡国八上郡石田郷に組み込まれており、中世前期には庄園化したとされる。『公卿補任』宝亀３年(772年)に八上郡の記述がみられ、大同３年(808年)八上郡と智頭郡の駅馬に関する記述もあり山陽側に連絡する交通網が開けていたことが窺える。万代寺遺跡が八上郡衙と考えられ、70×40尺の規模をもつ正殿、東西脇殿、後殿、柵列、区画溝などが検出されている。万代寺遺跡の北西に白鳳期(７世紀後半)建立の土師百井廃寺跡が配置する。法起寺式伽藍で軒丸瓦は重圏文単弁８葉蓮華文で土師百井式と言われている。この寺院の瓦を焼いた奥谷窯跡をはじめ八頭町には花原、山田、下坂など須恵器窯が多く分布し、河原町でもこの時期の集落として２㎞弱南西に位置する郷原遺跡で掘立柱建物10棟、土坑、柵列、単弁７葉蓮華文軒丸瓦などが出土しており、山手森谷上分遺跡でも掘立柱建物が多数検出されるなどその関連が注目される。またやや南に離れた下中溝遺跡では土馬と獣形土製品が出土している。

平安から鎌倉時代にかけて、古代の国郡里体制から荘園・公領支配へ体制が移行するなかで、因幡では律令の郷体制があまり変動しないまま中世郷へ発展したとみられ、在地領主が郡司・保司という形で国衙支配にあたった。河原町内には高野山岩田荘がある。『稲葉民談記』によると岩田荘19ヶ村の中に高津原村の名があり、高津原集落東の標高196mの通称高尾山には中世の山城である高津原城が築かれている。この丘陵北裾に展開する高福大将軍遺跡では平成13年、12世紀以降の掘立柱建物や溝状遺構、白磁や青磁が、千代川左岸の佐貫上台遺跡でも12世紀の土坑や溝状遺跡、白磁や青磁などの中世の遺物が出土している。この他周辺には経塚遺跡や戦国時代の小規模な山城跡が分布する。室町時代の集落遺跡である前田遺跡は、昭和58年の調査によって室町時代の屋敷跡と井戸が検出され、備前、瀬戸、青磁、白磁などの陶磁器が、２基の井戸から病気平癒のまじない呪符２枚、舟形木製品、漆椀などが出土している。このように、古代から中世にかけての調査例も徐々に増える傾向にある。

引用・主要参考文献

河原町教育委員会『郷原遺跡発掘調査報告書』1986年
河原町『河原町誌』1986年
平凡社『日本歴史地名大系第32巻　鳥取県の地名』1992年
㈶鳥取市教育文化財団『高福大将軍遺跡』2002年
河原町教育委員会『河原町内遺跡発掘調査報告書』2004年

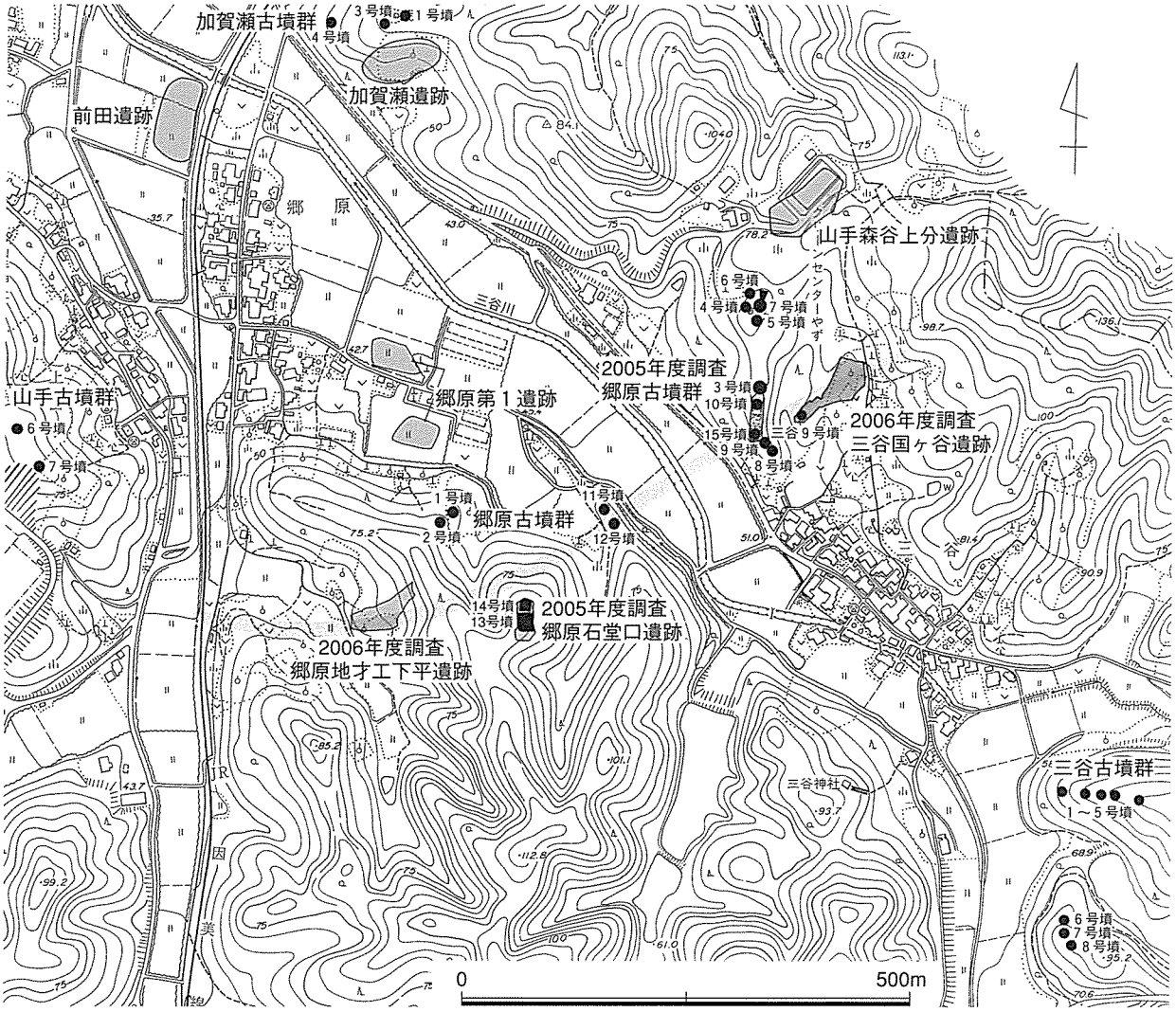
第３章　調査の結果

第１節　三谷国ヶ谷遺跡の調査

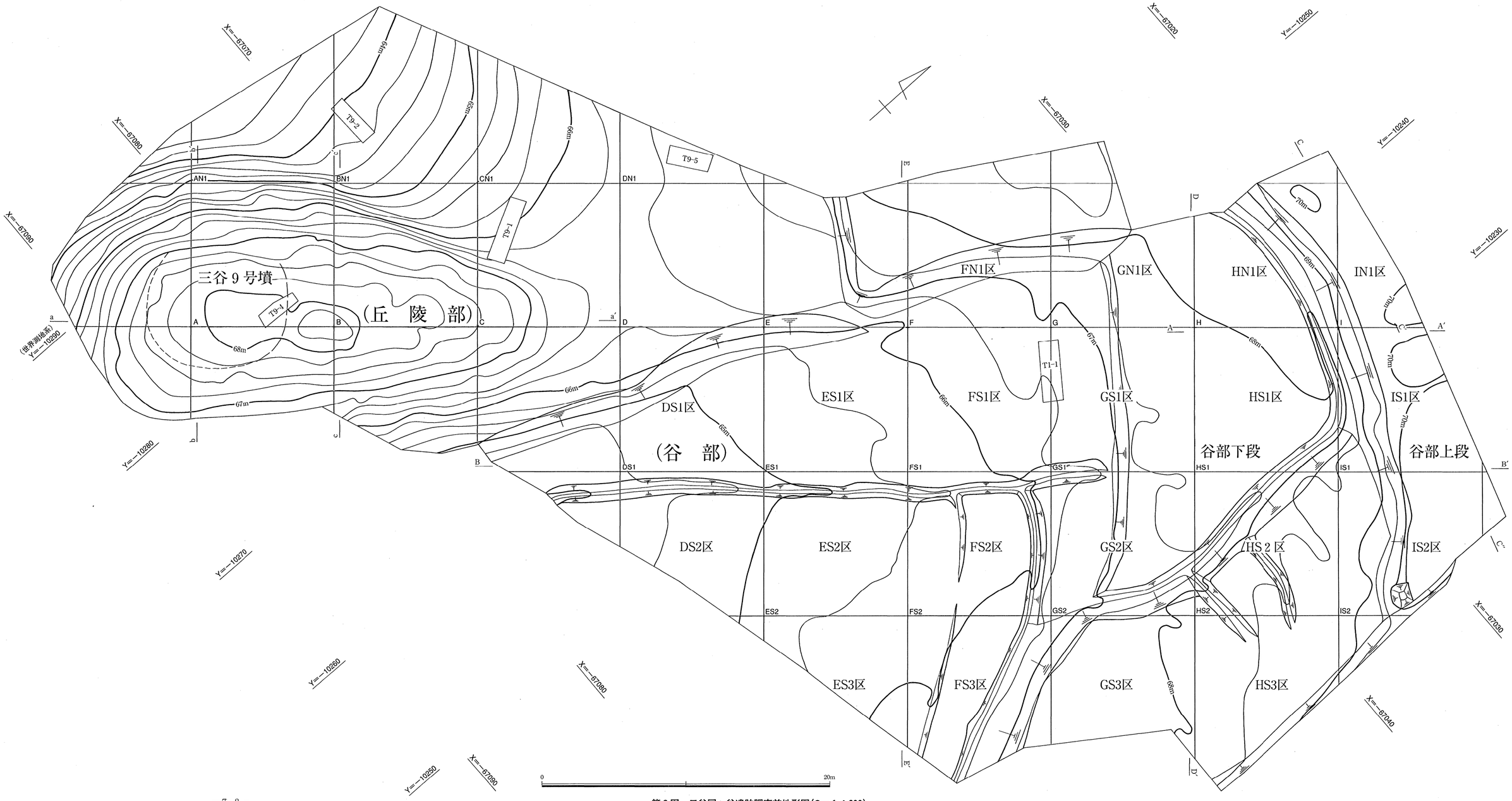
三谷国ヶ谷遺跡は、鳥取市河原町三谷に所在する。中国山地から派生する丘陵のうち、国中平野南の、河原町と八頭町を介する低丘陵から南西へ短く張り出す小尾根に挟まれた幅40m程度の小谷を中心に遺跡は展開する。遺跡は西側の標高68mの小尾根と西側の谷とに展開し、小尾根先端部で三谷９号墳が検出された。遺跡の小尾根を「丘陵部」、谷を「谷部」として記述する。

１．調査地の立地と層序（第２～５図、図版１～３）

今回調査を行った調査区は、この東西に延びる八頭町と河原町の境界丘陵から南へ派生する小尾根間、標高64～69m前後の幅40m程の狭小な谷部に位置する。三谷平野への見通しは効かないものの南面し日当たり良好で、この谷部の東側一帯は比較的なだらかな丘陵微高地が開け、現在果樹園や畑地などに利用されている。この小谷の西側には三谷９号墳が所在する標高68mの小尾根が南方向へ張り出し、更に小谷を挟んで西側に郷原３、10、15、９、８号墳が所在する尾根が展開する。この郷原古墳群の調査においても８世紀の須恵器が出土している。谷の東側裾に尾根頂部へと続く古道が通り、道沿いの南西斜面に墓地が点々と続く。この谷の入口に現在の三谷集落が位置し、この谷は古くから三谷集落の生活圏であったであろうことが容易に窺える。三谷集落が位置する三谷谷は、中央に八東川支流の三谷川が貫流する。

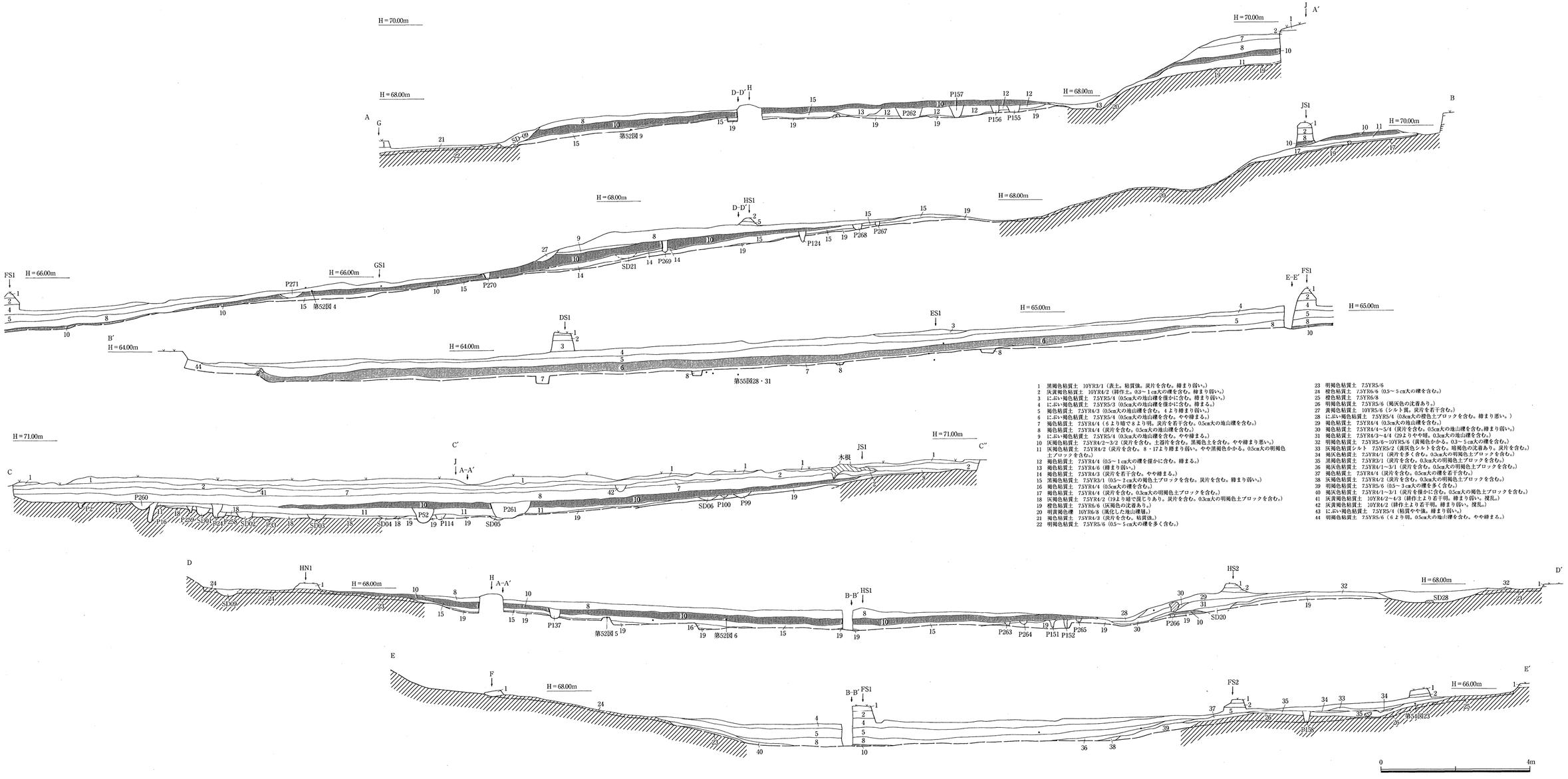


第２図　三谷国ヶ谷遺跡調査地位置図（Ｓ＝１：8,000）



第３図　三谷国ヶ谷遺跡調査前地形図(S＝１：200)

第４図　三谷国ヶ谷遺跡 谷部全体図(S＝１：150)



1　黒褐色粘質土　10YR3/1（表土。粘質強。炭片を含む。締まり弱い。）
2　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（耕作土。0.3～1cm大の礫を含む。締まり弱い。）
3　にぶい褐色粘質土　7.5YR5/4（0.5cm大の地山礫を僅かに含む。締まり弱い。）
4　にぶい褐色粘質土　7.5YR5/3（0.5cm大の地山礫を僅かに含む。締まる。）
5　褐色粘質土　7.5YR4/3（0.5cm大の地山礫を含む。4より締まり弱い。）
6　にぶい褐色粘質土　7.5YR5/4（0.5cm大の地山礫を含む。やや締まる。）
7　褐色粘質土　7.5YR4/4（6より暗でまより明。炭片を若干含む。0.5cm大の地山礫を含む。）
8　褐色粘質土　7.5YR4/4（炭片を含む。0.5cm大の地山礫を含む。）
9　にぶい褐色粘質土　7.5YR5/4（0.3cm大の地山礫を含む。やや締まる。）
10　灰褐色粘質土　7.5YR4/2～3/2（炭片を含む。土器片を含む。黒褐色土を含む。やや締まり悪い。）
11　灰褐色粘質土　7.5YR4/2（炭片を含む。8・17より締まり弱い。やや黒褐色かかる。0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。）
12　褐色粘質土　7.5YR4/4（0.5～1cm大の礫を僅かに含む。締まる。）
13　褐色粘質土　7.5YR4/6（締まり弱い。）
14　褐色粘質土　7.5YR4/3（炭片を若干含む。やや締まる。）
15　黒褐色粘質土　7.5YR3/1（0.5～2cm大の褐色土ブロックを含む。炭片を含む。締まり弱い。）
16　褐色粘質土　7.5YR4/4（0.5cm大の礫を含む。）
17　褐色粘質土　7.5YR4/4（炭片を含む。0.3cm大の明褐色土ブロックを含む。）
18　灰褐色粘質土　7.5YR4/2（19より暗で混じりあり。炭片を含む。0.3cm大の明褐色土ブロックを含む。）
19　橙色粘質土　7.5YR6/6（灰褐色の沈着あり。）
20　明黄褐色礫　10YR6/8（風化した地山礫層。）
21　褐色粘質土　7.5YR4/3（炭片を含む。粘質強。）
22　明褐色粘質土　7.5YR5/6（0.5～5cm大の礫を多く含む。）
23　明褐色粘質土　7.5YR5/6
24　橙色粘質土　7.5YR6/6（0.5～3cm大の礫を含む。）
25　橙色粘質土　7.5YR6/8
26　明褐色粘質土　7.5YR5/6（褐灰色の沈着あり。）
27　黄褐色粘質土　10YR5/6（シルト質。炭片を若干含む。）
28　にぶい褐色粘質土　7.5YR5/4（0.3cm大の橙色土ブロックを含む。締まり悪い。）
29　褐色粘質土　7.5YR4/4（0.3cm大の地山礫を含む。）
30　褐色粘質土　7.5YR4/4～5/4（炭片を含む。0.5cm大の地山礫を含む。締まり弱い。）
31　褐色粘質土　7.5YR4/3～4/4（29より やや明。0.3cm大の地山礫を含む。）
32　明褐色粘質土　7.5YR5/6～10YR5/6（黄褐色かかる。0.3～5cm大の礫を含む。）
33　灰褐色粘質シルト　7.5YR5/2（黄灰色シルトを含む。暗褐色の沈着あり。炭片を含む。）
34　褐灰色粘質土　7.5YR4/1（炭片を多く含む。0.3cm大の明褐色土ブロックを含む。）
35　黒褐色粘質土　7.5YR3/1（炭片を含む。0.3cm大の明褐色土ブロックを含む。）
36　褐灰色粘質土　7.5YR4/1～3/1（炭片を含む。0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。）
37　褐色粘質土　7.5YR4/4（炭片を含む。0.5cm大の礫を若干含む。）
38　灰褐色粘質土　7.5YR4/2（炭片を含む。0.3cm大の明褐色土ブロックを含む。）
39　明褐色粘質土　7.5YR5/6（0.5～3cm大の礫を多く含む。）
40　褐灰色粘質土　7.5YR4/1～3/1（炭片を僅かに含む。0.5cm大の褐色土ブロックを含む。）
41　灰黄褐色粘質土　10YR4/2～4/3（耕作土より若干明。締まり弱い。撹乱。）
42　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（耕作土より若干明。締まり弱い。撹乱。）
43　にぶい褐色粘質土　7.5YR5/4（粘質やや強。締まり弱い。）
44　明褐色粘質土　7.5YR5/6（6より明。0.5cm大の地山礫を含む。やや締まる。）

0　4m

第５図　谷部調査区土層断面図(S＝１：80)

調査区の調査前の地目は果樹園で、調査前の標高は64～70mである。地形的には、西側の「丘陵部」と東側の「谷部」とに分かれる。丘陵部の尾根線を通る調査地全体の長軸を調査の基準ラインとし、10m毎に方眼を組んで調査用測量杭を設定した。層序の観察は、このA～H杭ラインと谷部のほぼ谷底部にあたるGS1～IS1杭ライン、谷の横断面としてF～FS2杭ラインとH～HS2杭ライン上に土層観察用の土手、加えて調査区北壁面により土層の観察を行った。また、調査の便宜上、調査区の北側高位にあたる部分を「上段」、そこから下位を「下段」と呼称した。谷部は、ちょうど幅20m程の小谷部の終結部尾根裾を削り出して盛り平坦面を作り出している。谷部は調査前の土層の堆積状況は一様ではなく、地形によって耕作土下に地山面が露出する箇所が部分的に見られた。上段の遺構面上には70cm以上の層の堆積がある。中段とでも呼ぶべきやや高台の下段東部のIS2・3区～HS2・3区一帯(SD-19、20東側)については、表土および耕作土を除去すると明らかに削平された赤茶けた地山面が露出し、谷部の中では一番激しく削平を受けた場所と見られる。また、FS3区～GS3区南のSD-25・26南についても耕作土下は地山面でありSK-11やSD-27など遺構埋土上層に耕作土が混在していた。さらに谷部北西側のFN1区～HN1区についても耕作土下は地山面であった。

調査区断面を見ていくと、谷部の北部や南東部、谷底部などでは様相が若干異なるが、現耕作土である厚さ15cm程度の第1層表土を除去すると、旧耕作土である第2、3層が広がり、第4層以下は締まった層となる。第8層中は瓦質鍋を含む層であり、この層が広く堆積するDS1杭東一帯の谷底部では遺構は検出されず、14世紀代の瓦質鍋釜片が出土している。第10層の黒褐色かかった灰褐色粘質土層上面とその下の第11、12、15層上面、更に下層の第18層上面が遺構面となる。第10層中には11世紀代の遺物を含む。谷部からの出土遺物は複数期が認められ、遺構面としても最低3面は確認されるが、各期を面的に捉えることは困難で、遺構からの出土遺物は極めて少ない。なお、調査区南東部のES2杭～FS2杭間については、表土を除去するとほぼ地山直上で、出土する遺物から上部の遺構面は削平されている可能性も考えられる。

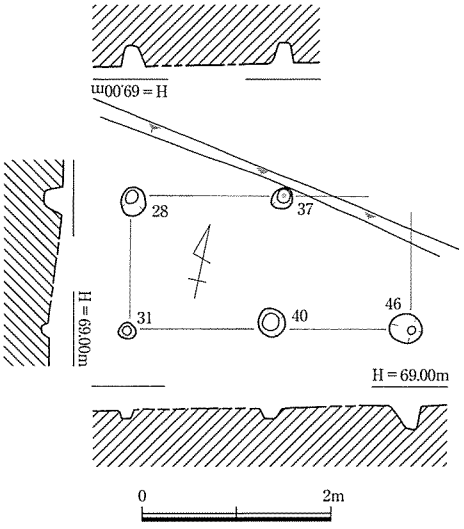
また、旧河原町の試掘トレンチT1-1の断面から、地山のように見える第④層褐色土(本調査での第19層か)の下層にさらに黒褐色土層がありその傾斜などから、谷は元々さほど広くはなく、谷部の堆積作用によって地盤があがり、本来の谷底部分は極めて限られた丘陵部沿いのCS2区～ES2区西側であると考えられる。谷部の上段は、谷が終息する南東尾根斜面部分を削り出して平坦としている。

2．掘立柱建物

谷部全域でピット計271基を検出した。ピットが集中する上段西側は、調査区幅13～15m程しかなく、一部柱痕跡の観察される柱穴やピットの集中度などから何らかの建物が想定されるものの、北側が調査区外となるため、明瞭に建物と想定され完結する柱列は見られない。上段IN1区で1棟、下段GS1区の試掘トレンチ際で1棟の計2棟の掘立柱建物を検出した。

SB-01(第6図、図版3・4)

谷部上段のIN1区南西端、I杭北東の標高68.89mで検出した。現状では北東隅を調査区外へ置く桁行2間、梁行1間の東西建物であるが、北側へ平坦面が続くことから北側へ広がる南北建物の可能性も考えられる。主軸はN-79°-Eへ振る。建物の平面形は長方形を呈し、桁行2間が2.96m、梁行1間が1.40mを測る。建物面積は

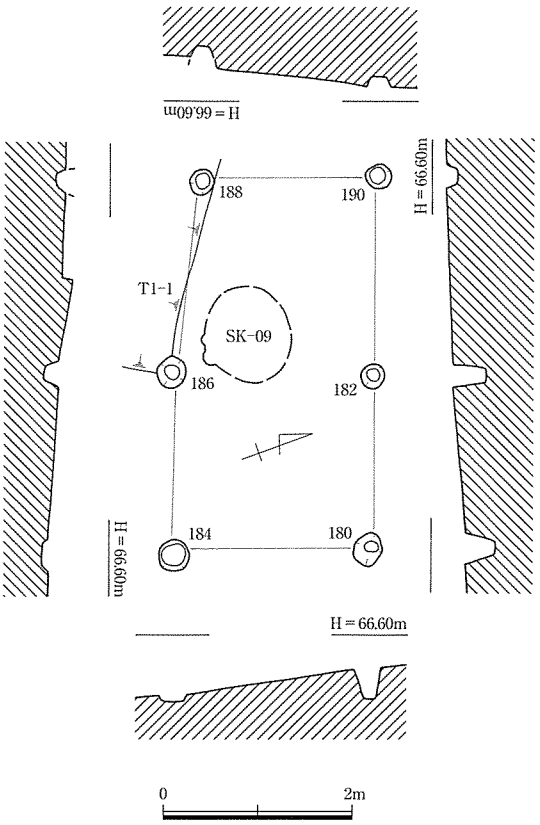


第6図　SB-01実測図

4.14㎡である。柱間寸法は桁行1.46～1.60m、平均すると桁行1.52mである。柱穴の平面形はすべて円形および楕円形で、現況で径19～38㎝、柱穴の底部標高は68.65～68.69mを測る。土層断面観察によりP37に柱痕跡状の層が確認された。遺物はいずれの柱穴からも出土していない。

SB-02（第７図、図版３・４）

谷部下段のGS1区南端、G杭東の標高66.46mで検出した。南西隅P-188周辺は旧河原町試掘トレンチT1-1が重なり上部を削平される。桁行２間、梁行１間の東西建物である。建物の平面形は長方形を呈し、主軸はN-69°-Wを振る。桁行２間が3.90m、梁行１間が2.13mを測る。建物面積は8.30㎡である。柱間寸法は桁行が1.82～2.08m、平均すると桁行1.95m、梁行2.03mである。桁行は東側で、梁行は西側で狭くなる。柱穴の平面形はすべて円形および楕円形で、現況で径27～34㎝、柱穴の底部標高は65.91～66.34㎝を測る。遺物はいずれの柱穴からも出土していない。建物中央西寄り、P186の20㎝北側に焼土土坑であるSK-09が位置することから、SK-09の覆屋的な建物であった可能性も考えられる。



第７図　SB-02実測図

３．土　　坑

SK-01（第８図、図版４）

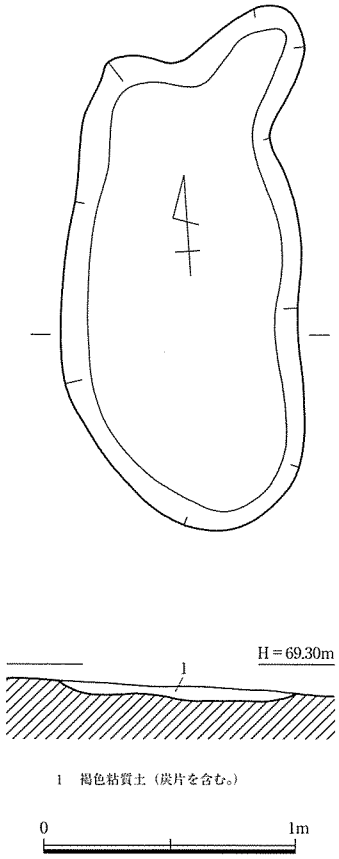
谷部上段のHN1区北端の標高69.30mで検出した。南側は下段への斜面、北～西側は調査区外となる。規模は長径185㎝、短径94㎝を測り、平面は北東隅が突起状に張り出す不整長楕円形を呈する。主軸は現状でN-１°-Wを振る。断面は不整な皿状で、底面は平坦であるが若干の凹凸も認められる。検出面から深さ14㎝、底面は標高69.16mを測る。埋土は炭片を含む褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SK-02（第９図、図版４）

谷部上段のIS1区中央部、標高69.11mで検出した。周辺には南西側を除き小規模なピットが検出されている。規模は長径101㎝、短径85㎝を測り、平面は東壁が張り出す不整楕円形を呈する。主軸は現状でN-13°-Eを振る。断面は皿状で、底面は平坦である。検出面から深さ8㎝、底面は標高69.03mを測る。埋土は炭片や褐色土ブロックを含む灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

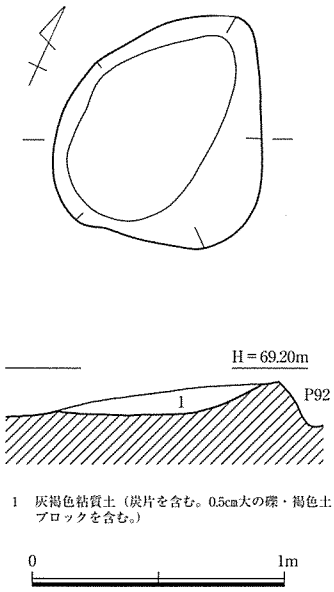
SK-03（第10図、図版５）

谷部上段のIS1区西端、標高69.38mで検出した。西隣にはP32が、東隣にはSD-08が配置する。SD-08についてはSK-03と幅と軸をほぼ同様とするが、底面の深さの相違やSD-08西端面の立ち上がり状況から別遺構扱いとした。規模は長径103㎝、短径39㎝を測り、平面は長楕円形を呈する。主軸はN-61°-Wを振る。断面は椀状である。検出面から深さ19㎝、底面は標高69.19mを測る。埋土は灰褐色粘質土二層に分かれ、上層は明褐色土ブロックを含み下層は炭片を含む。遺物の出土はみられなかった。



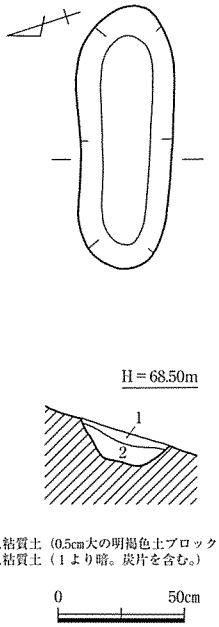
1　褐色粘質土（炭片を含む。）

第８図　SK−01実測図



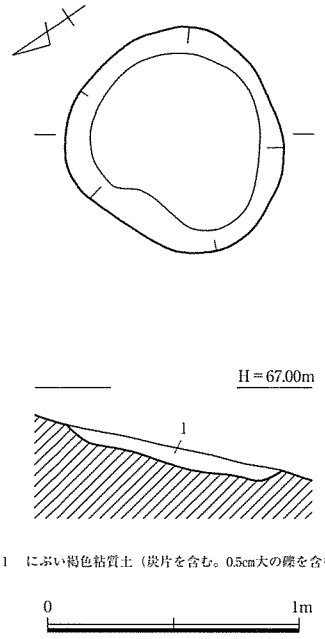
1　灰褐色粘質土（炭片を含む。0.5cm大の礫・褐色土ブロックを含む。）

第９図　SK−02実測図



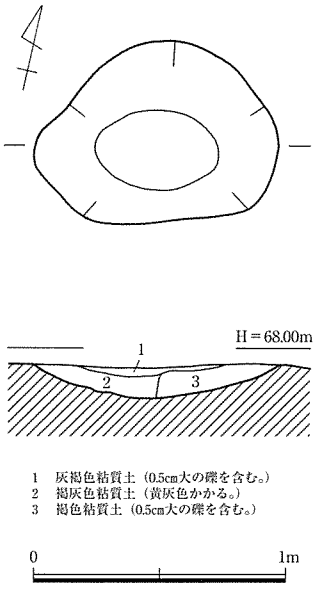
1　灰褐色粘質土（0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。）
2　灰褐色粘質土（１より暗。炭片を含む。）

第10図　SK−03実測図



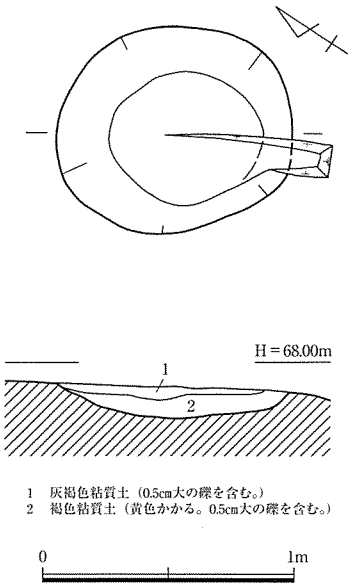
1　にぶい褐色粘質土（炭片を含む。0.5cm大の礫を含む。）

第11図　SK−04実測図



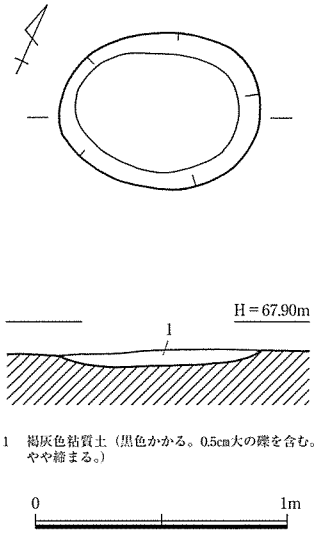
1　灰褐色粘質土（0.5cm大の礫を含む。）
2　褐灰色粘質土（黄灰色かかる。）
3　褐色粘質土（0.5cm大の礫を含む。）

第12図　SK−05実測図



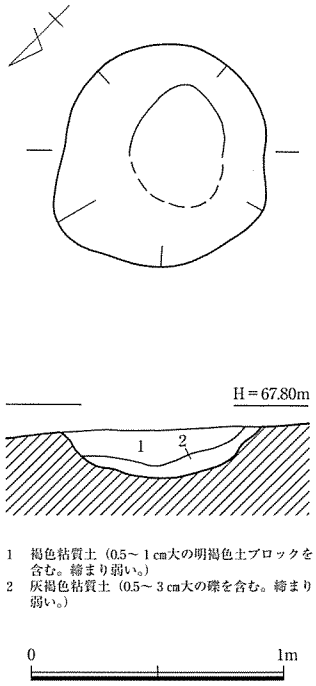
1　灰褐色粘質土（0.5cm大の礫を含む。）
2　褐色粘質土（黄色かかる。0.5cm大の礫を含む。）

第13図　SK−06実測図



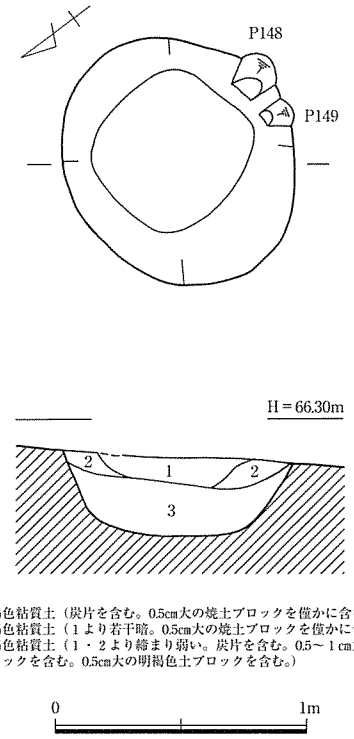
1　褐灰色粘質土（黒色かかる。0.5cm大の礫を含む。やや締まる。）

第14図　SK−07実測図



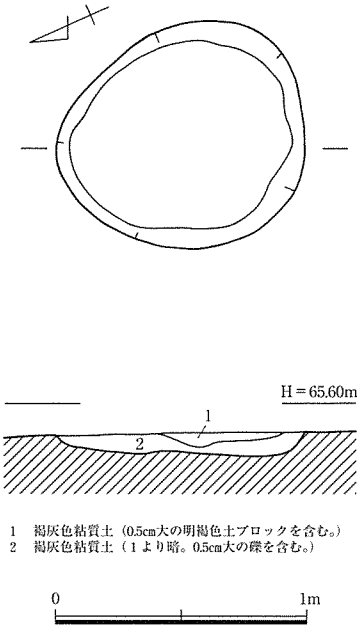
1　褐色粘質土（0.5～1cm大の明褐色土ブロックを含む。締まり弱い。）
2　灰褐色粘質土（0.5～3cm大の礫を含む。締まり弱い。）

第15図　SK−08実測図



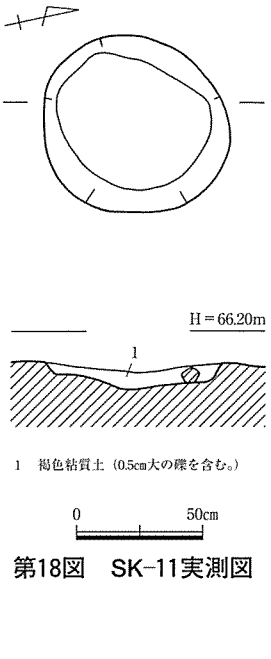
1　灰褐色粘質土（炭片を含む。0.5cm大の焼土ブロックを僅かに含む。）
2　灰褐色粘質土（1より若干暗。0.5cm大の焼土ブロックを僅かに含む。）
3　灰褐色粘質土（1・2より締まり弱い。炭片を含む。0.5～1cm大の焼土ブロックを含む。0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。）

第16図　SK−09実測図



1　褐灰色粘質土（0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。）
2　褐灰色粘質土（1より暗。0.5cm大の礫を含む。）

第17図　SK−10実測図



1　褐色粘質土（0.5cm大の礫を含む。）

第18図　SK−11実測図

SK-04(第11図、図版５)

谷部下段のGS1区北西寄り、標高66.85mで検出した。3.7m南には同様な規模の土坑SK-09が配置する。規模は長径89cm、短径83cmを測り、平面は歪な楕円形を呈する。主軸はN-86°-Eを振る。断面は皿状で、底面はほぼ平坦であるが南側へ傾斜する。検出面から深さ7cm、底面は標高66.63mを測る。埋土は炭片を含むにぶい褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SK-05(第12図、図版５)

谷部下段のHN1区南端、標高67.94mで検出した。南西20cmに同様な規模の土坑SK-06が配置する。規模は長径96cm、短径71cmを測り、平面はやや不整な楕円形を呈する。主軸はN-78°-Eを振る。断面は皿状である。検出面から14cm、底面は標高67.80mを測る。埋土は三層に分かれ、上層に灰褐色粘質土、下層に褐灰色粘質土で下層は若干の色調の違いと小礫の含みで二層に分かれる。遺物の出土はみられなかった。

SK-06(第13図、図版５)

谷部下段のHN1区南端、標高67.92mで検出した。北東20cmに同様な規模の土坑SK-05が配置する。規模は長径94cm、短径81cmを測り、平面はやや不整な楕円形を呈する。主軸はN-54°-Wを振る。断面は皿状である。検出面から深さ14cm、底面は標高67.78mを測る。埋土は二層に分かれ、上層から灰褐色粘質土、褐色粘質土である。遺物の出土はみられなかった。

SK-07(第14図、図版６)

谷部下段のHN1区東端、標高67.78mで検出した。周囲には小規模なピットと西側1.3mにはSD-11が配置する。規模は長径79cm、短径61cmを測り、平面は楕円形を呈する。主軸はN-68°-Eを振る。断面は皿状である。検出面から深さ５cm、底面は標高67.73mを測る。埋土は褐灰色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SK-08(第15図、図版６)

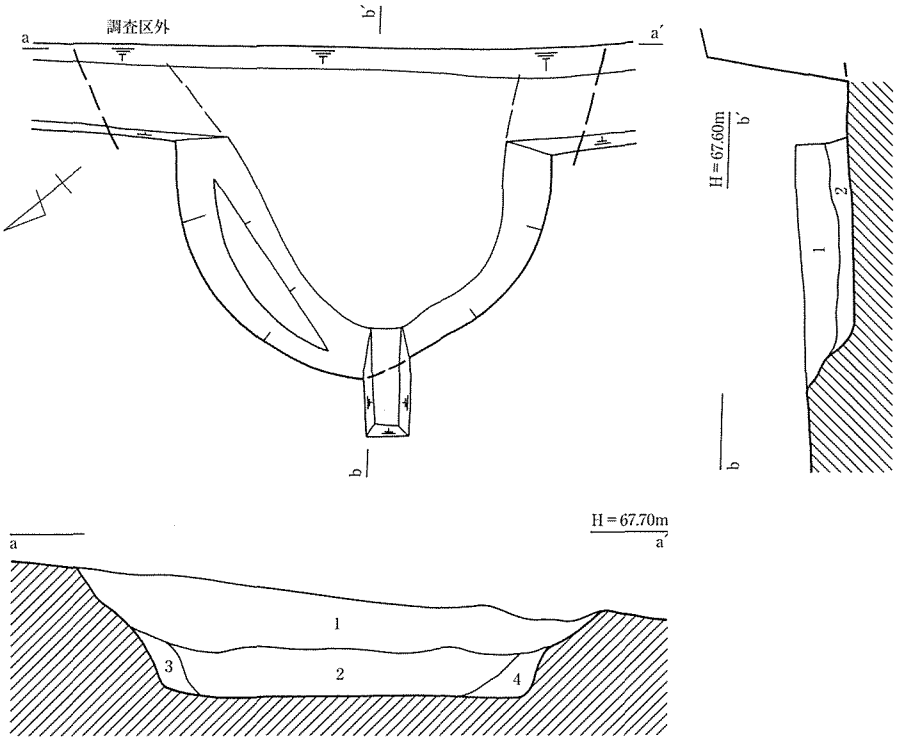
谷部下段のHS1区北東端、標高67.72mで検出した。上段への斜面際に位置し、南側に小規模なピットが点在する。規模は長径87cm、短径82cmを測り、平面は不整な楕円形を呈する。主軸はN-33°-Wを振る。断面は椀状である。検出面から深さ21cm、底面は標高67.51mを測る。埋土は締まりの弱い上下二層に分かれ、上層から褐色粘質土、灰褐色粘質土である。遺物の出土はみられなかった。

SK-09(第16図、図版６)

谷部下段のGS1区南西端、標高66.18mで検出した。SB-02内の南西部分にあたり、南西40cmに旧河原町試掘トレンチT1-1が位置する。遺構の南側で小規模なP-148、149を切る。規模は長径102cm、短径91cmを測り、上場平面は楕円形を、底面で隅丸方形を呈する。主軸はN-83°-Eを振る。断面は椀状である。検出面から深さ34cm、底面は標高65.84mを測る。埋土は三層に分かれるがすべて焼土ブロックを疎らに含む灰褐色粘質土で、下層は炭片および焼土・明褐色土ブロックを含む。壁面下位は被熱して四隅部分を中心に赤橙色に変色している。底面および下層に焼土塊や炭化物などは遺存せず、遺物の出土もみられなかった。

SK-10(第17図、図版７)

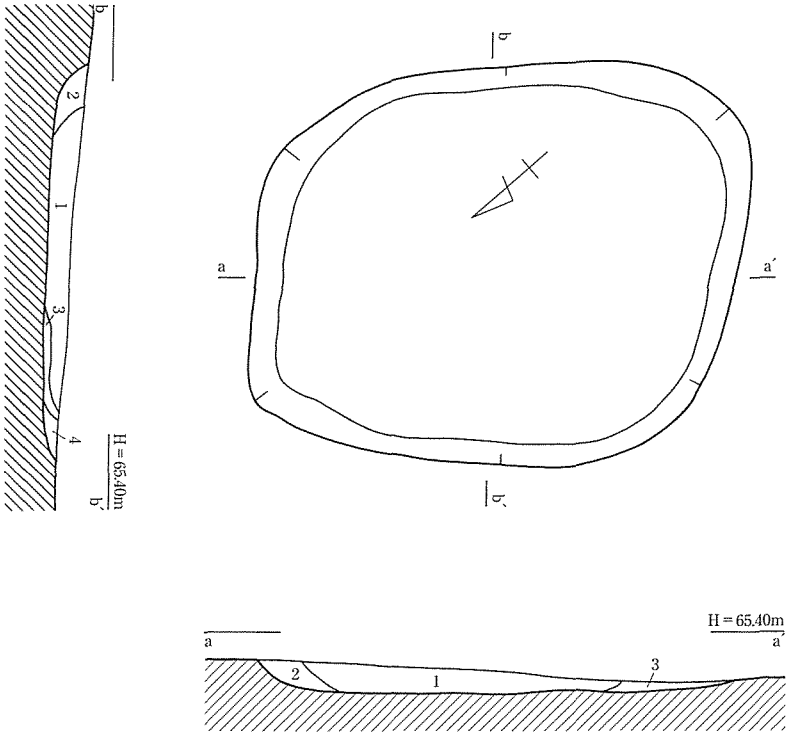
谷部下段のFS3区西端、標高65.49mで検出した。谷底への緩やかな斜面に立地する。南東4.4mにSK-11が、南５mにSK-13が配置する。規模は長径98cm、短径88cmを測り、平面はやや不整な楕円形を呈する。主軸はN-12°-Eを振る。断面は皿状である。底面はやや凹凸がみられ、検出面から深さ10cm、標高65.39mを測る。埋土は明褐色土ブロックを含む褐灰色粘質土の上下二層に分かれ、下層がやや暗い色調となる。遺物の出土はみられなかった。



1　褐灰色粘質土（炭片を含む。0.5cm大の礫を含む。）
2　褐色粘質土（礫の含みなし。0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。）
3　褐灰色粘質土（1よりやや明。炭片を含む。締まり弱い。）
4　褐灰色粘質土（4より明。炭片を含む。褐色土を含む。締まり弱い。）

0　1m

第19図　SK−12実測図



1　褐灰色粘質土（炭片を含む。0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。）
2　褐灰色粘質土（1よりやや明。明褐色土ブロックの含み1より少。）
3　灰褐色粘質土（締まり弱い。）
4　褐灰色粘質土（0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。）

0　1m

第20図　SK−13実測図

SK-11（第18図、図版７）

谷部下段のFS3区中央南東寄り、標高66.10mで検出した。北西4.4mにSK-10が、南西7.3mにSK-13、16が配置する。規模は長径76cm、短径70cmを測り、平面はやや不整な楕円形を呈する。主軸はN-43°-Eを振る。断面は不整な皿状である。底面は凹凸がみられ、検出面から深さ13cm、標高65.97mを測る。埋土は小礫を含む褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SK-12（第19図、図版７）

谷部下段のGS3区南東の調査区東境界部、標高67.58mで検出した。北４mにSD-28が、西４mにSD-25が配置する。南東側が調査区外であり、北西壁が半円状に遺存する。土層断面の観察は調査区壁面で行った。平面形や規模は不明であるが、現況で長径208cm、短径123cmを測る。断面は不整な逆台形状で、壁面中位から段をとって緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、検出面から深さ48cm、標高67.10mを測る。埋土は４層に分かれ、上層で炭片を含む褐灰色粘質土、下層は明褐色土ブロックを含む褐色粘質土と壁面際で締まりの弱い褐灰色粘質土などに細分される。北壁に三日月状のテラスがみられるが、掘り過ぎの可能性がある。遺物の出土はみられなかった。

SK-13（第20図、図版７）

谷部下段のES3区北西寄り、標高65.30mで検出した。調査地東側の丘陵微高地から谷底への緩やかな西斜面に立地する。西1.9mにSK-14が、南東0.9mにSK-16が配置する。規模は長径191cm、短径160cmを測り、平面は不整な隅丸方形状を呈する。主軸はN-40°-Eを振る。断面は皿状である。底面はほぼ平坦で、検出面から深さ16cm、標高65.14mを測る。埋土は褐灰色粘質土が中心であるが壁面際で細分され計４層に分かれる。遺物の出土はみられなかった。

SK-14（第21図、図版８）

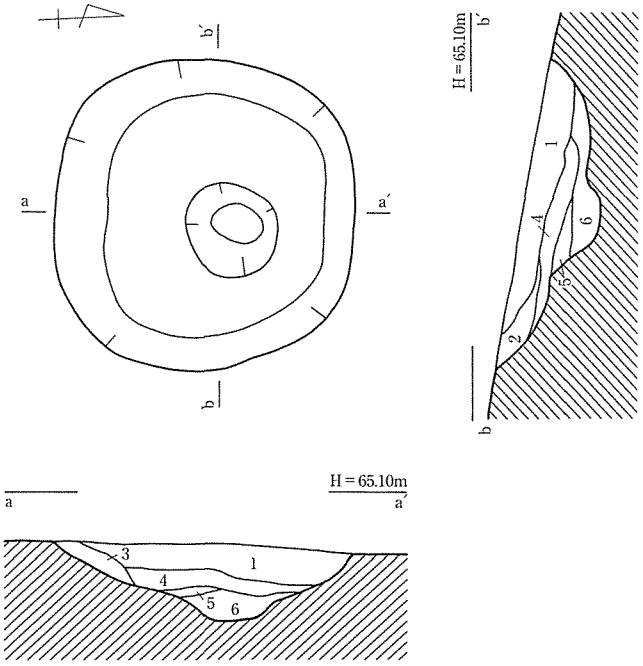
谷部下段のES2区とES3区の境界部、標高65.01mで検出した。調査地東側の丘陵微高地から谷底への緩やかな西斜面に立地する。東1.9mにSK-13が、南にSD-27が近接する。規模は長径122cm、短径119cmを測り、平面は丸味の強い隅丸方形状を呈する。主軸はN-86°-Wを振る。中央北東寄りに径39cm、深さ10cmの円形深掘部が検出され別遺構かと思われたが土層断面の観察から同一の遺構として扱った。断面は中央部が一段凹む椀状である。底面はすり鉢状で、検出面から深さ42cm、標高64.59mを測る。埋土は斜面南東側から流れ込んだ様相を示し、下層で細分され計６層に分かれる。上下の灰褐色粘質土層間に褐色および明褐色粘質土が堆積する。遺物の出土はみられなかった。

SK-15（第22図、図版８）

谷部下段のDS1区中央南東寄り、標高64.11mで検出した。谷底部への南東斜面に立地する。同じく南東斜面の北東側一帯に径37、38cm前後のピットが集中する。規模は長径68cm、短径65cmを測り、平面は円形を呈する。断面は椀状である。検出面から深さ30cm、底面標高63.81mを測る。埋土は上層から褐色粘質土、灰褐色粘質土、にぶい褐色粘質土の三層に分かれ、斜面高位から流入した堆積状況である。遺物の出土はみられなかった。

SK-16（第23図、図版８）

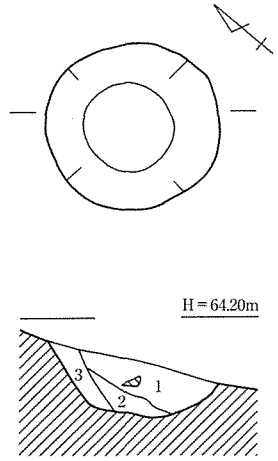
谷部下段のES3区中央の調査区南東境界部、標高65.40mで検出した。調査地東側の丘陵微高地から谷底への緩やかな西斜面に立地し、北西0.9mにSK-13が配置する。遺構南側が調査区外であり、北壁が半楕円状に遺存する。土層断面の観察は調査区壁面で行った。平面形や規模は不明であるが、現況で東西96cm、南北76cmを測る。断面はやや不整な逆台形状である。底面はやや凹凸がみられ、検出面から深さ40cm、標高65.00mを測る。埋土は複雑に13層に分かれる。厚さ３cm、高さ20cm程度の垂直に立ち上がる第８、９層は明赤褐色に被熱した焼土壁状を呈し、最下層である第７層黒褐色粘質土は焼土と炭を多く含む炭化層である。焼土壁は遺存する北側でも部分的に検出されており、土層断面観察部分と繋ぎ合わせると平面隅丸長方形であったと考えられる。遺物の出土はみられなかった。



1　灰褐色粘質土（炭片を含む。明褐色土ブロックを含む。0.5cm大の焼土ブロックを含む。）
2　褐色粘質土（3cm大の明褐色土ブロックを含む。）
3　明褐色粘質土（炭片を含む。黄褐色土を含む。）
4　褐色粘質土（2より暗でやや締まる。3cm大の明褐色土ブロックを含む。）
5　褐色粘質土（4より暗で明褐色土ブロックの含み多い。）
6　灰褐色粘質土（1より暗。炭片を含む。0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。締まり弱い。）

0　1m

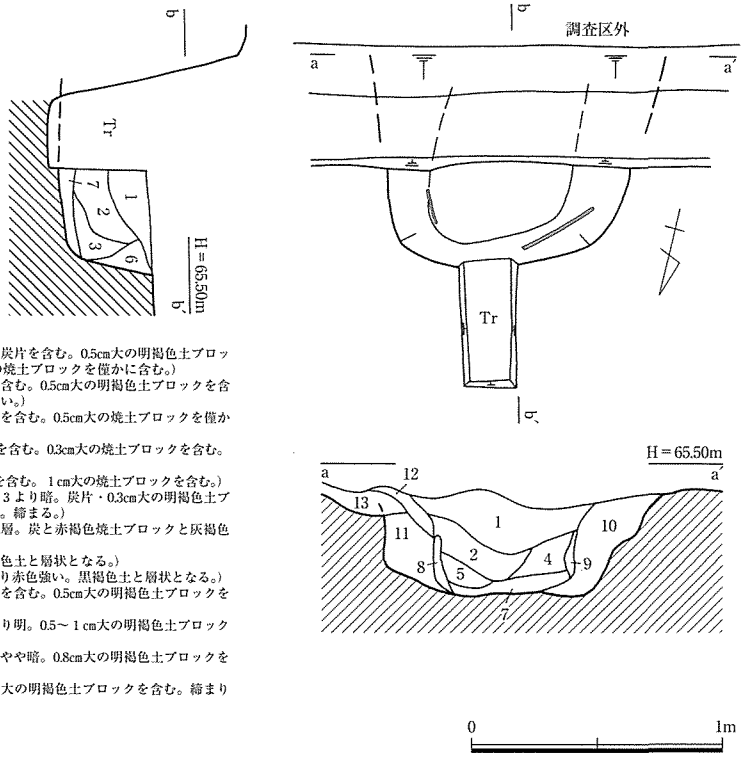
第21図　SK−14実測図



1　褐色粘質土（やや赤褐色かかる。炭片を含む。締まり弱い。）
2　灰褐色粘質土（締まり弱い。）
3　にぶい褐色粘質土（0.5cm大の礫を含む。）

0　50cm

第22図　SK−15実測図



1　にぶい褐色粘質土（炭片を含む。0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。0.2cm大の焼土ブロックを僅かに含む。）
2　褐色粘質土（炭片を含む。0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。1より締まり弱い。）
3　灰褐色粘質土（炭片を含む。0.5cm大の焼土ブロックを僅かに含む。）
4　灰褐色粘質土（炭片を含む。0.3cm大の焼土ブロックを含む。締まり弱い。）
5　灰褐色粘質土（炭片を含む。1cm大の焼土ブロックを含む。）
6　灰褐色粘質土（2・3より暗。炭片・0.3cm大の明褐色土ブロックを僅かに含む。締まる。）
7　黒褐色粘質土（炭化層。炭と赤褐色焼土ブロックと灰褐色土が混じったもの。）
8　明赤褐色焼土（黒褐色土と層状となる。）
9　明赤褐色焼土（8より赤色強い。黒褐色土と層状となる。）
10　褐灰色粘質土（炭片を含む。0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。）
11　褐灰色粘質土（10より明。0.5〜1cm大の明褐色土ブロックを含む。）
12　褐色粘質土（1よりやや暗。0.8cm大の明褐色土ブロックを含む。）
13　褐灰色粘質土（1cm大の明褐色土ブロックを含む。締まりやや弱い。）

0　1m

第23図　SK−16実測図

4．溝状遺構

SD-01（第24図、図版９）

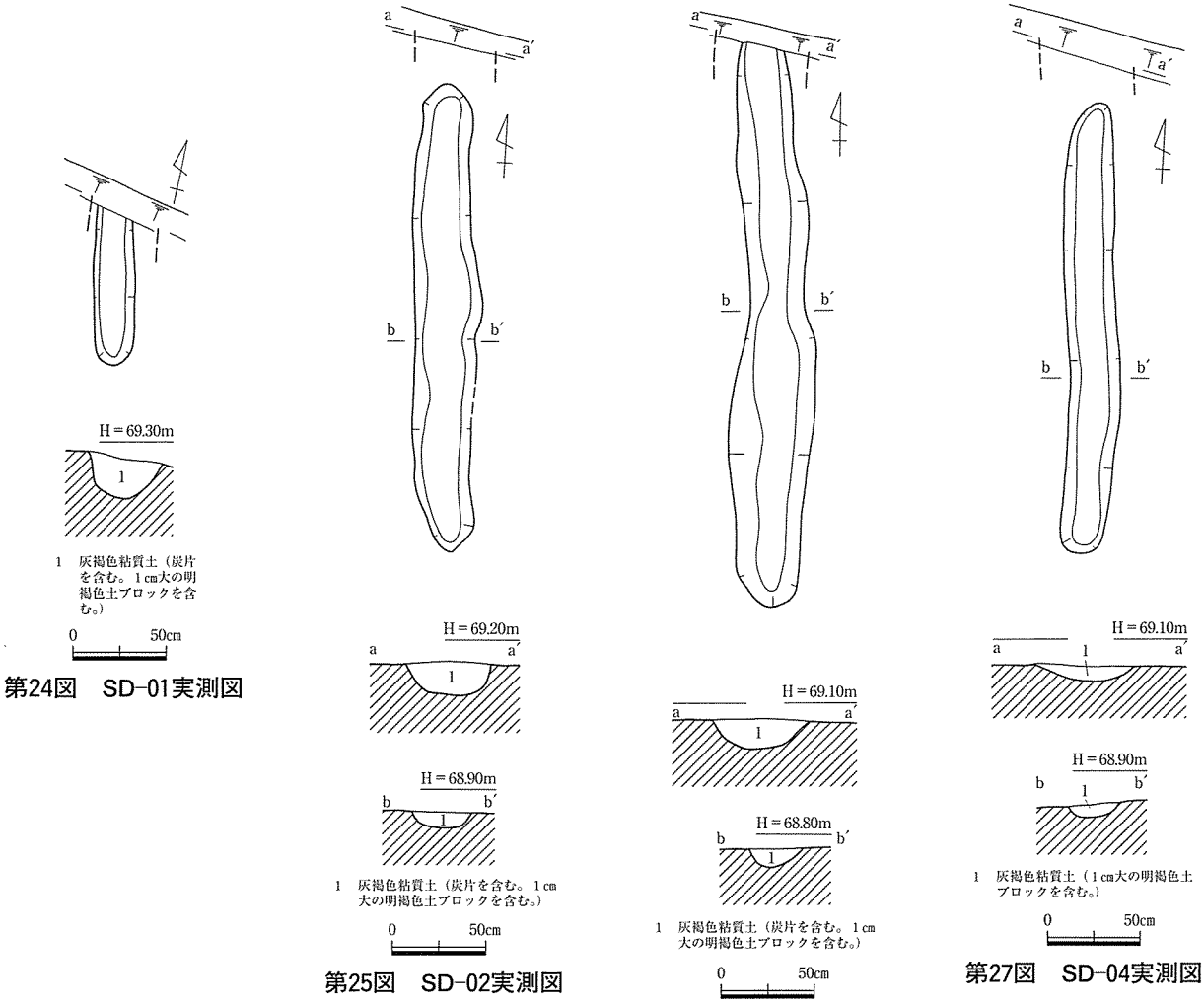
谷部上段のIN1区、HN1区との境界北側の標高69.26mで検出した。北側は調査区外へ延びる。調査区北壁で土層断面の観察を行った。東側一帯には同様な規模および軸をとるSD-02～04が配置する。規模は遺存長0.83m、幅37cmを測る。主軸はN-12°-Wを振る。横断面はやや不整な椀状となる。北壁断面で深さ26cm、底面は標高68.87～69.00mを測り南側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SD-02（第25図、図版９）

谷部上段のIN1区とHN1区との境界部、標高69.09mで検出した。北側は調査区外へ延びる。調査区北壁で土層断面の観察を行った。SD-01が西側80cmに、同様な規模および軸をとるSD-03、04が東側に配置する。規模は遺存長2.74m、幅は北壁部で43cmを測る。主軸はN-５°-Wを振る。横断面はやや不整な椀状となる。北壁断面で深さ19cm、底面は標高68.51～68.90mを測り南側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SD-03（第26図、図版９）

谷部上段のIN1区南端、標高69.02mで検出した。北側は調査区外へ延びる。調査区北壁で土層断面の観察を行った。同様な規模および軸をとるSD-01、02が西側に、東側にSD-04が配置する。規模は遺存長3.03m、幅は北壁部で50cmを測る。主軸はN-２°-Wを振る。横断面はやや不整な椀状となる。北壁断面で深さ16cm、底面は標高68.40～68.86mを測り南側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。



第24図　SD-01実測図

第25図　SD-02実測図

第26図　SD-03実測図

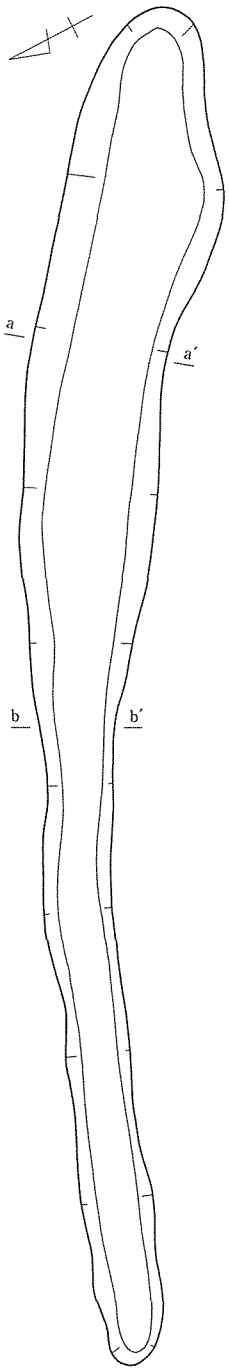
第27図　SD-04実測図

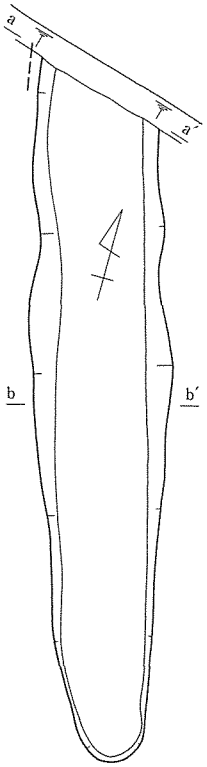
SD-04（第27図、図版９）

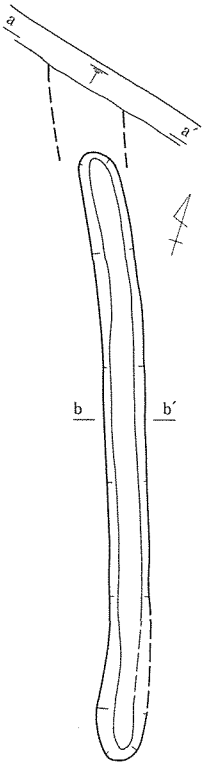
谷部上段のIN1区とIS1区境界部、標高68.96mで検出した。北側は調査区外へ延びる。調査区北壁で土層断面の観察を行った。西側に同様な規模および軸をとるSD-01～03が配置する。規模は遺存長2.66m、幅は北壁部で50cmを測る。主軸はN－３°－Wを振る。横断面は皿状となる。北壁断面で深さ８cm、底面は標高68.53～68.88mを測り南側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

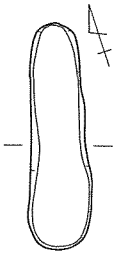
SD-05（第28図、図版９）

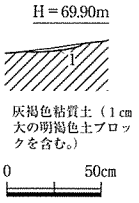
谷部上段のIS1区、標高68.95mで検出した。北側は調査区外へ延びる。調査区北壁で土層断面の観察を行い、上層にP261が重なる。西側に幅がやや小規模ながら同様な軸をとるSD-01～04が配置する。規模は遺存長3.55m、幅は中央部で74cmを測る。主軸はN－16°－Wを振る。横断面は皿状となる。中央部で深さ14cm、底面は標高68.76～68.84mを測り南側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土で明暗から二層に分かれる。遺物の出土はみられなかった。



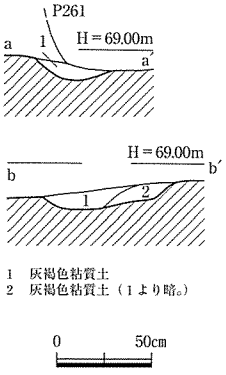




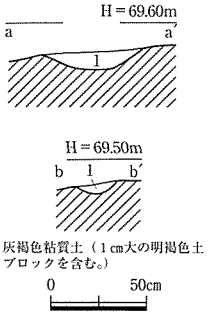




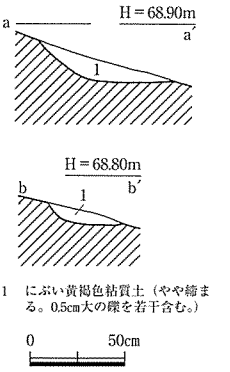
第30図　SD-07実測図



第28図　SD-05実測図



第29図　SD-06実測図



第31図　SD-08実測図

SD-06（第29図、図版９）

谷部上段のIS1区東端、標高69.47mで検出した。北側は調査区外へ延びる。調査区北壁で土層断面の観察を行った。西側に幅にやや相違がみられながらも同様な軸をとるSD-01～05が配置する。規模は遺存長3.26m、幅は北壁部で37cm前後を測る。主軸はN-22°-Wを振る。横断面は皿状となる。北壁断面で深さ12cm、底面は標高69.26～69.35mを測り南側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SD-07（第30図、図版９）

谷部上段のIS2区、標高69.81mで検出した。北延長上の調査区北壁では耕作土下は地山面であることから削平されている可能性があるもののSD-07は現況では北壁断面までは延びない。西側にSD-07より軸をやや西向きに振るSD-01～06が配置する。規模は遺存長1.18m、幅は南側で34cmを測る。主軸はN-15°-Eを振る。横断面は皿状となる。深さ４cm、底面は標高69.73～69.81mを測り南側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SD-08（第31図、図版９）

谷部上段のIS1区南、標高68.85mで検出した。上段の南際を東西方向に延びる。北側に幅などにやや相違がみられながらも同様な形状のSD-01～06が配置する。西側にSK-03が近接するが、埋土や底面高などに相違が認められることから別遺構の扱いを行った。規模は遺存長7.18m、幅は東側が広く85cmを測る。主軸は全体的に南にやや湾曲し、N-56～71°-Wを振る。横断面は皿状となる。中央部東寄りで深さ20cm、底面は標高68.46～68.61mを測り西側へ傾斜する。埋土はにぶい黄褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SD-09（第32図、図版10）

谷部下段のGN1区およびHN1区、標高67.93mで検出した。北側は調査区外へ延びる。北側は耕作土下の地山面で検出したことから上部は削平されている可能性がある。南北軸から東方向へ屈曲するＬ字形の溝で、規模は遺存長11.90m、幅は南側が広く80cmを測る。主軸は北辺でN-15°-E、南でN-43°-Wへ振る。横断面は皿状となる。屈曲部で深さ９cm、底面は標高67.45～67.90mを測り南側へ傾斜する。埋土はにぶい褐色粘質土一層である。南側屈曲部東寄りで備前すり鉢体部片と陶器底部片が埋土より出土している。

SD-10（第33図、図版10）

谷部下段のHN1区南東、標高67.90mで検出した。東隣にSD-11が配置する。規模は遺存長6.24m、幅は南側で41cmを測る。主軸は北端で屈曲が認められるが概ねN-18°-Eを振る。横断面は皿状となる。深さ９cm、底面は標高67.71～67.81mを測り僅かに南側へ傾斜する。埋土はにぶい褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SD-11（第33図、図版10）

谷部下段のHN1区南東、標高67.84mで検出した。西隣にSD-10が配置する。北端が東方向へ屈曲するＬ字形の溝である。規模は遺存長5.30m、幅は屈曲部で27cmを測る。主軸はN-25°-Eから北端で屈曲してN-71°-Wへ振る。横断面は皿状となる。北側で深さ６cm、底面は標高67.64～67.81mと全体的に凹凸がみられ、僅かに北側が低くなる傾向である。埋土は褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SD-12（第34図、図版10）

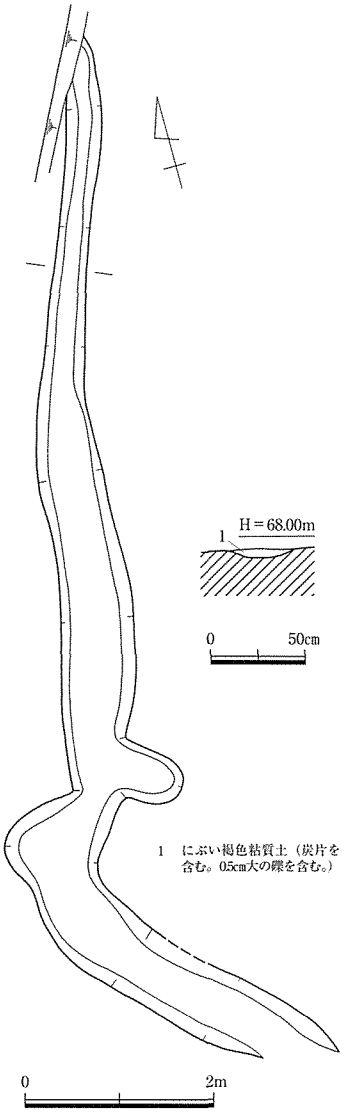
谷部下段のGS1区とHS1区境界部、標高67.45mで検出した。北側にSD-10、11が、東側にSD-13～16が配置する。規模は遺存長2.30m、幅は中央南寄りで24cmを測る。主軸はN-17°-Eを振る。横断面は椀状となる。中央部で深さ７cm、底面は標高67.21～67.41mを測り南側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SD-13(第35図、図版10)

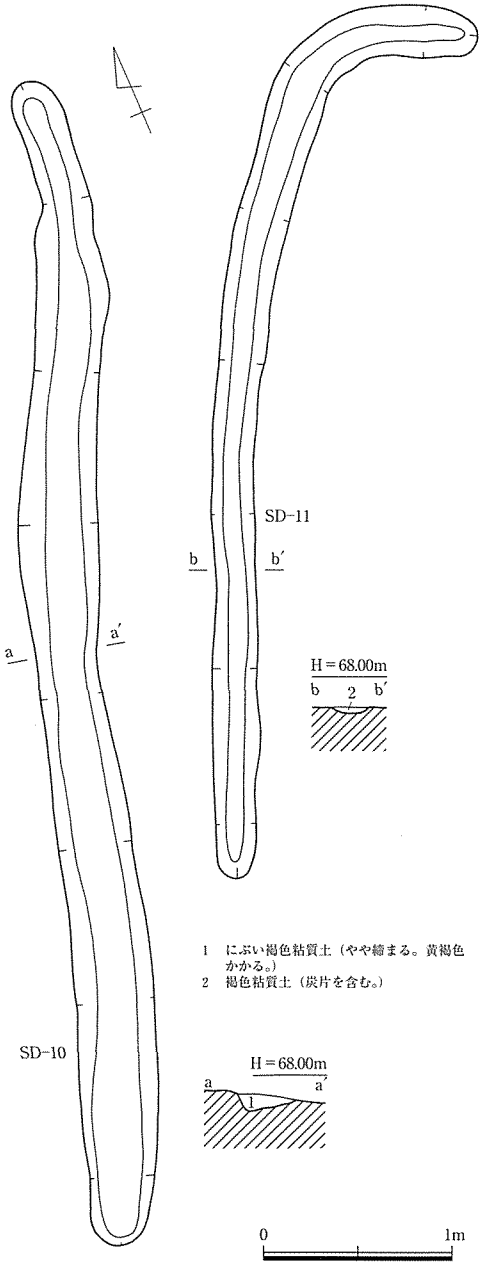
谷部下段のHS1区南寄り、標高67.73mで検出した。東側に同様な軸をとるSD-14、15が配置し、直交する軸をもつSD-16の西側を切る。規模は遺存長6.54m、幅は中央南寄りで32cmを測る。主軸は東へ湾曲傾向にあるものの概ねN-2°-Eを振る。横断面は椀状となる。中央部で深さ7cm、底面は標高67.13～67.70mを測り南側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。埋土内から遺物の出土はみられなかったが、検出面の17～20cm上位で土師器底部(第52図3)、須恵器杯底部(第52図7)が出土している。

SD-14(第35図、図版10)

谷部下段のHS1区南寄り、標高67.52mで検出した。東西側に同様な軸をとるSD-13、15がそれぞれ配置し、直交する軸をもつSD-16の中央部付近を切る。規模は遺存長4.57m、幅は南側で30cmを測る。主軸はN-5°-Eを振る。横断面は椀状となる。中央部で深さ6cm、底面は標高67.05～67.49mを測り南側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。



第32図　SD-09実測図



第33図　SD-10、11実測図

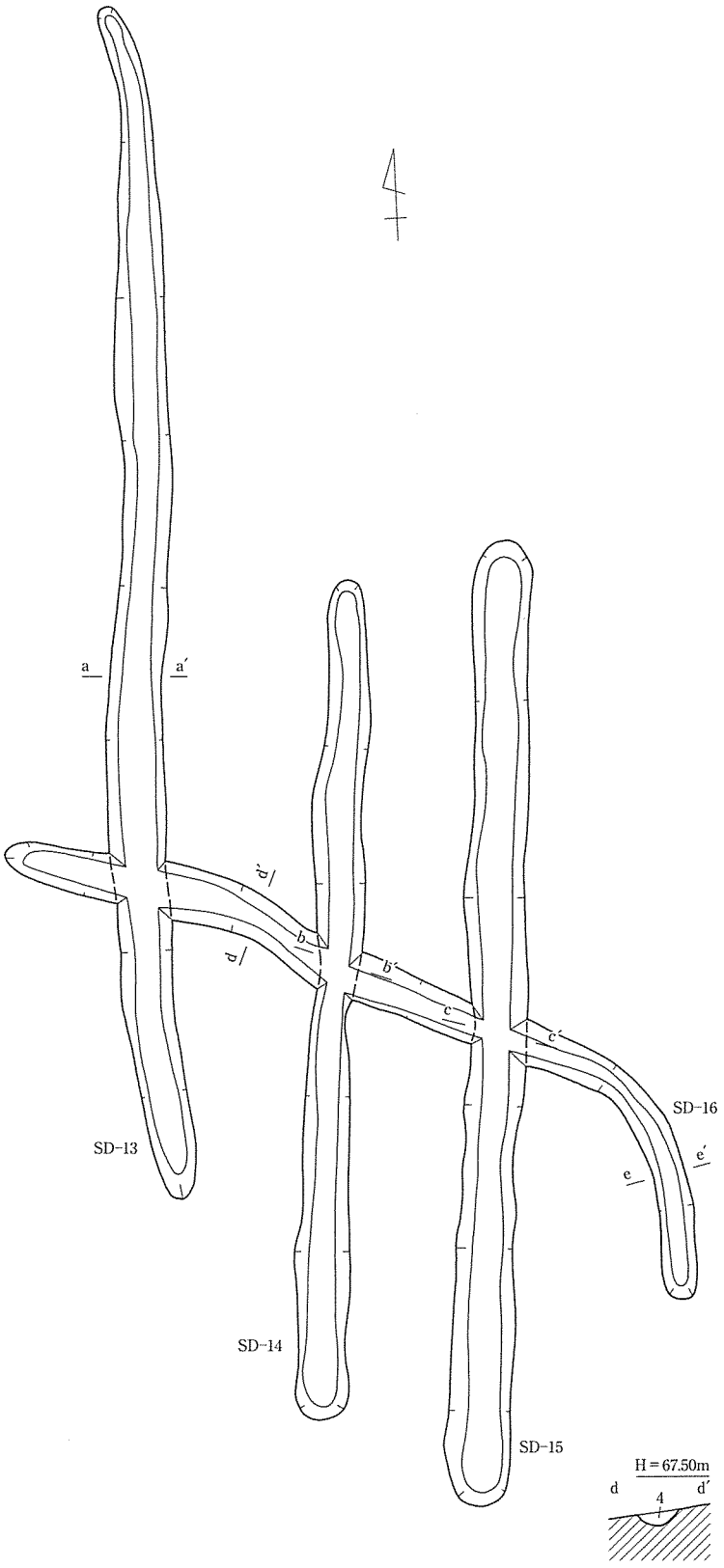
第34図　SD-12実測図

SD-15（第35図、図版10）

谷部下段のHS1区南寄り、標高67.58mで検出した。西側に同様な軸をとるSD-13、14がそれぞれ配置し、直交する軸をもつSD-16の東側を切る。規模は遺存長5.26m、幅は南側で37cmを測る。主軸はN-4°-Eを振る。横断面は椀状となる。中央部で深さ10cm、底面は標高67.55～66.99mを測り南側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。南側より土師器くの字甕の頸部細片が出土している。

SD-16（第35図、図版10）

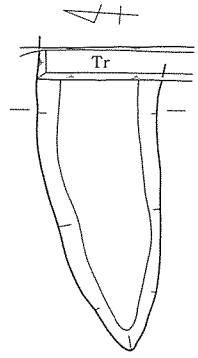
谷部下段のHS1区南寄り、標高67.35mで検出した。東西方向から南へ屈曲するL字形の溝である。東西辺を並行するSD13～15が直交して切る。規模は遺存長4.95m、幅は西側で29cmを測る。主軸はN-97°-Wから東端で屈曲してN-5°-Wへ振る。横断面は椀状となる。西側で深さ9cm、底面は標高67.15～67.26mを測り東側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

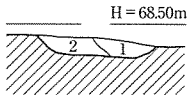


1　灰褐色粘質土（0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。）
2　灰褐色粘質土（炭片を含む。0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。）
3　灰褐色粘質土（0.5cm大の明褐色土ブロックを含む。やや締まる。）
4　灰褐色粘質土（SD-13～15よりやや明。0.5cm大の明褐色土ブロックを若干含む。）

0　1m

第35図　SD-13、14、15、16実測図





1　にぶい赤褐色粘質土（0.5cm大の礫を含む。）
2　赤褐色粘質土（1より明。0.5cm大の礫を含む。）

0　50cm

第36図　SD-17実測図

SD-17(第36図、図版10)

谷部下段のHS3区調査区境界部、標高68.44mで検出した。東側は調査区外へ延びる。南1.6mにSD-28が配置する。耕作土下の地山面で検出したことから上部は削平されている可能性がある。規模は遺存長1.59m、幅63cmを測る。主軸はN-80°-Eを振る。横断面は皿状となる。深さ12cm、底面は標高68.29～68.33mを測り西側へ傾斜する。埋土は二層に分かれ、上層からにぶい赤褐色粘質土、赤褐色粘質土である。遺物の出土はみられなかった。

SD-18(第37・38図、図版11・16)

谷部下段のHS2区とHS3区境界部、標高68.06mで検出した。南端は層序確認のトレンチによって掘削される。西側1.2mにSD-19・20が配置する。規模は現況で3.38m、幅は南側ほど広くなり1.12mを測る。主軸は西側へやや湾曲し、主軸はN-20°-WからN-8°-Eへ振る。横断面は椀状となる。深さ16cm、底面は標高67.84～67.91mを測り僅かに南側へ傾斜する。埋土は褐色粘質土一層である。遺物は遺構南端で磨製石斧(1)が底面より5cm程度上位で出土している。長軸11.65cm、蛤刃で、砥石に転用されたとみられる。

SD-19(第39図、図版11)

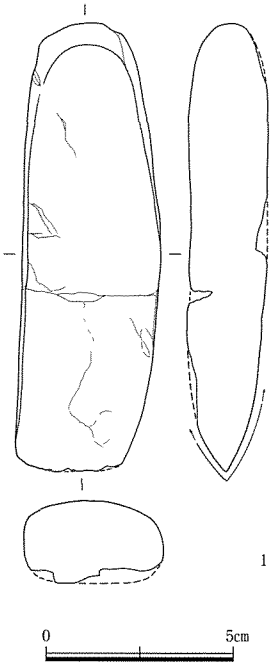
谷部下段のGS2区とHS3区境界部、標高67.52mで検出した。南側でSD-20と繋がり、SD-19と20の中位で東側へ大きく膨らんで形状を変えるが、埋土の相違から別遺構として扱った。SD-20との前後関係などは明確にできなかった。規模は現況で3.48m、幅は北端が若干広く46cmを測る。主軸はN-16°-Wを振る。横断面は椀状となる。深さ14cm、底面は標高67.38～67.40mを測り傾斜はみられない。埋土は褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SD-20(第39図、図版11)

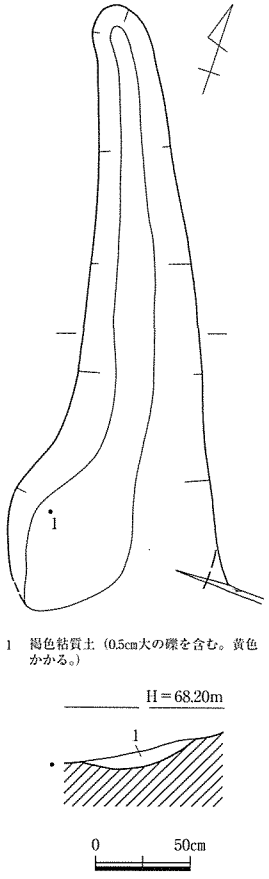
谷部下段のGS2区とHS3区境界部、標高67.68mで検出した。東側1.2mにSD-18が配置する。北側でSD-19と繋がり、SD-19と20の中位で東側へ大きく膨らんで形状を変えるが、埋土の相違から別遺構として扱った。SD-19との前後関係などは明確にできなかった。規模は現況で5.60m、幅は北側が広く1.39mを測る。主軸は西側へやや湾曲し、主軸はN-16°-WからN-32°-Eへ振る。横断面は椀状となる。深さ27cm、底面は標高67.12～67.38mを測り南西側へ傾斜する。埋土はにぶい褐色粘質土で締まり具合や炭片・礫の含みから二層に分けられる。遺物の出土はみられなかった。

SD-21(第40図、図版11)

谷部下段のGS2区、標高66.92mで検出した。調査区B-B′断面では第14層が基盤層となる。南側には同様な形状および軸をとるSD-22、23が配置する。規模は遺存長5.07m、幅39cmを測る。主軸はN-73°-Wを振る。横断面は椀状となる。深さ10cm、底面は標高66.46～66.81mを測り西側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。



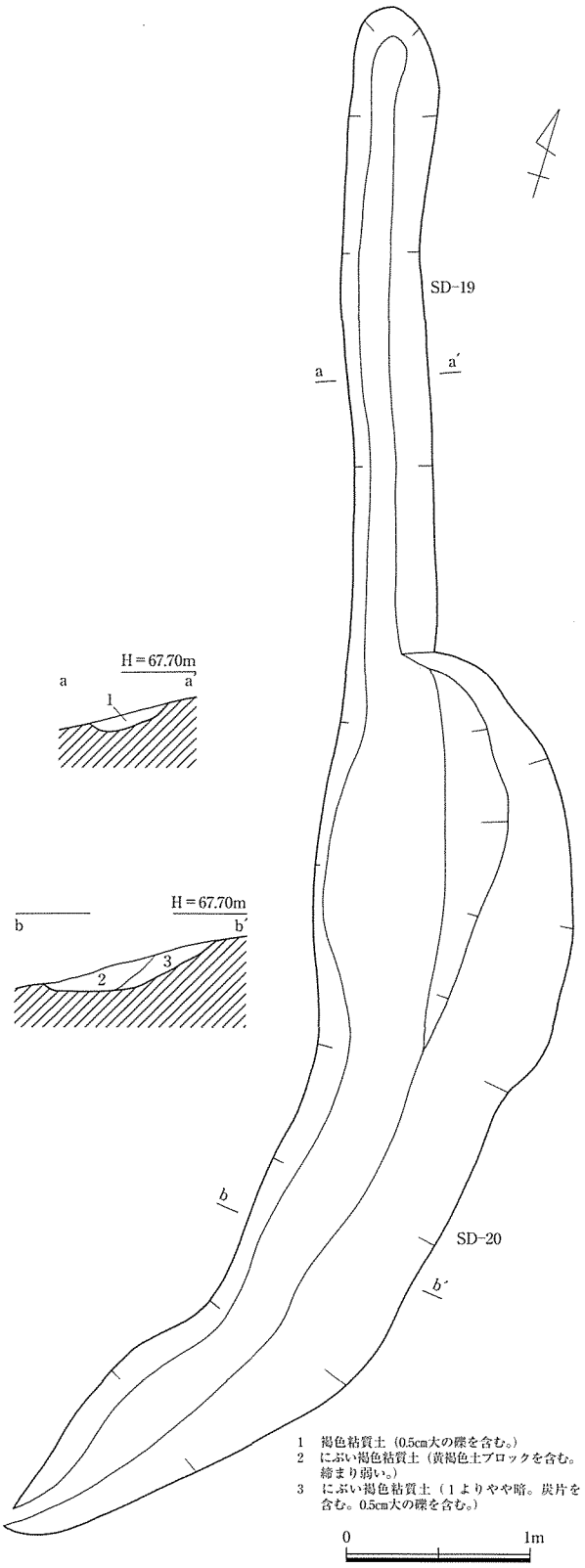
第38図　SD-18出土遺物実測図



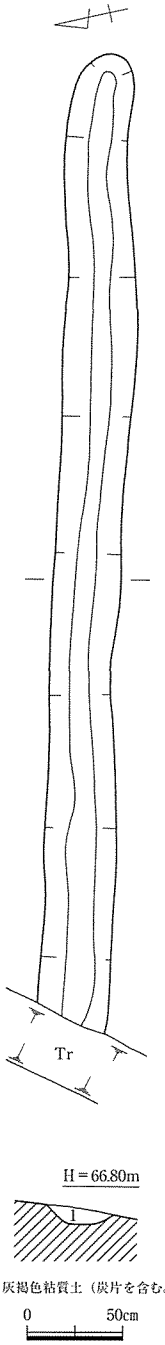
第37図　SD-18実測図

SD-22(第41図、図版11)

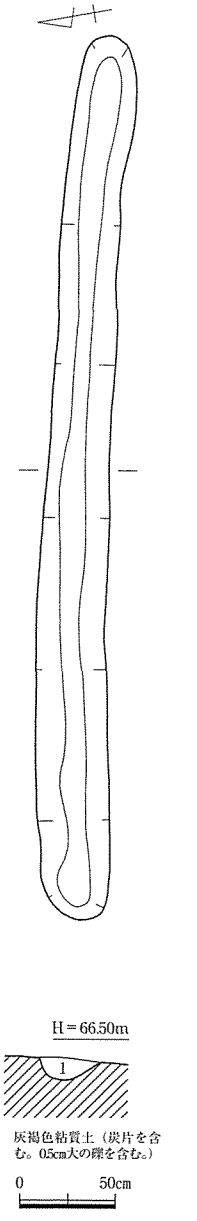
谷部下段のGS2区、標高66.62mで検出した。南北に同様な形状および軸をとるSD-21、23がそれぞれ配置する。規模は遺存長4.66m、幅38cmを測る。主軸はN-75°-Wを振る。横断面は椀状となる。深さ12cm、底面は標高66.12～66.56mを測り西側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。



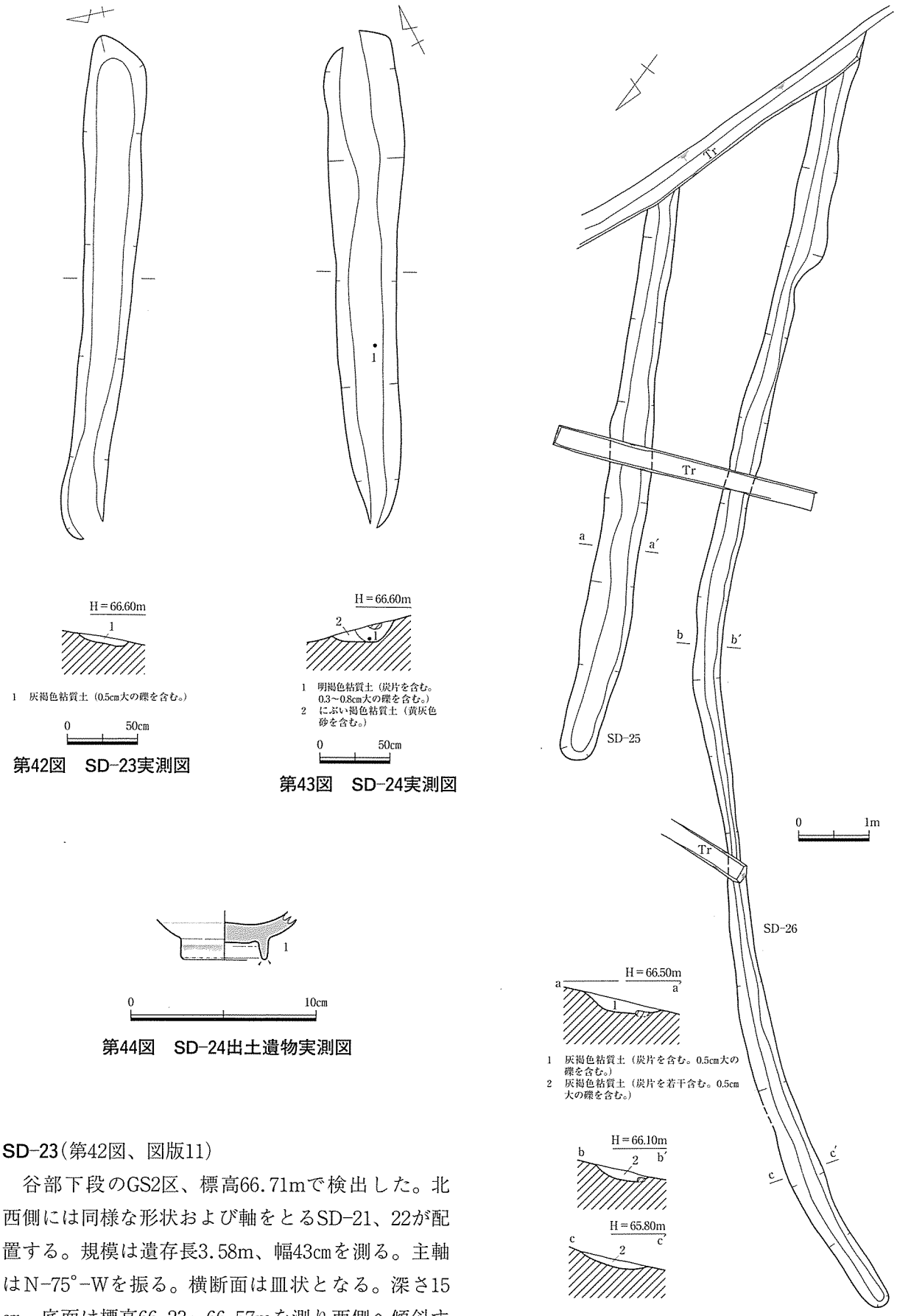
第39図　SD-19、20実測図



第40図　SD-21実測図



第41図　SD-22実測図



第42図　SD-23実測図

第43図　SD-24実測図

第44図　SD-24出土遺物実測図

第45図　SD-25、26実測図

SD-23（第42図、図版11）

谷部下段のGS2区、標高66.71mで検出した。北西側には同様な形状および軸をとるSD-21、22が配置する。規模は遺存長3.58m、幅43cmを測る。主軸はN-75°-Wを振る。横断面は皿状となる。深さ15cm、底面は標高66.23～66.57mを測り西側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SD-24(第43・44図、図版11・16)

谷部下段のGS2区南東端、標高66.59mで検出した。北1mにほぼ軸を直交するSD-23が、南50cmにSD-25が配置する。規模は遺存長3.56m、幅は北側で54cmを測る。主軸はN-24°-Eを振る。横断面は椀状となる。深さ15cm、底面は標高66.23～66.40mを測り僅かに南西側へ傾斜する。埋土は二層に分かれ、上層は炭片・小礫を含む明褐色粘質土、下層は黄灰色砂を含むにぶい褐色粘質土である。第1層中から磁器底部(1)が出土している。削り出し高台で畳付は無釉。18世紀肥前系とみられる。

SD-25(第45図、図版11)

谷部下段のFS3区とGS3区境界部、標高66.50mで検出した。南東側は調査区外へ延びる。北50cmにSD-24が、西側1mにSD-26が配置する。規模は現況で8.25m、幅は北西で70cmを測る。主軸はN-28°-Wを振る。横断面は椀状となる。深さ15cm、底面は標高66.17～66.52mを測り北西側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。中央部周辺で埋土から須恵器甕類体部片、杯底部片、端部細片が出土している。

SD-26(第45図、図版11)

谷部下段のFS2区とFS3区北部、標高66.30mで検出した。南東側は調査区外へ延びる。東側1mにSD-25が配置する。規模は現況で18.58m、幅は西端で50cmを測る。緩やかに西へ湾曲し、主軸はN-25～66°-Wを振る。横断面は椀状となる。深さ13cm、底面は標高65.50～66.24mを測り北西側へ傾斜する。埋土は灰褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

SD-27(第46図)

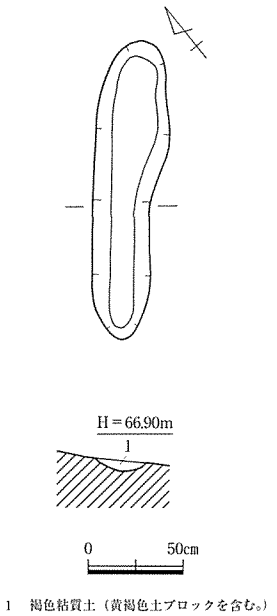
谷部下段のES2区とES3区境界部、標高65.11mで検出した。東側は調査区外へ延びる。北西壁の一部をP-246に切られる。遺存長2.82m、最大幅は1.35mを測る。主軸はN-47°-Wを振る。横断面は不整な椀状である。溝中央部に中州状の幅50cm程度の高まりがあり土層断面から西側が後出で東側とは別遺構の可能性もあるがともに埋土は締まりが弱く、同一の遺構として扱った。深さは西側で10cm、東側で21cmを測る。底面は西側で標高64.73～64.80m、東側で標高64.79～64.81mを測り、ともに北西側へ傾斜する。埋土は西側でにぶい褐色粘質土、東側は二層で上層からにぶい褐色粘質土、灰褐色粘質土である。遺物の出土はみられなかった。

SD-28(第47図、図版12)

谷部下段のGS3区とHS3区境界部、標高68.31mで検出した。東側は調査区外へ延びる。北側1.6mにSD-17が配置する。遺存長10.25m、調査区境界部付近で最大幅2.45mを測る。主軸はほぼ東西方向のN-87°-Eを振る。横断面は不整な皿状である。深さは調査区境界部付近で43cmを測る。底面は標高67.21～67.88mを測り西側へ傾斜する。溝底面北沿いに石列を検出した。僅かに蛇行が認められるもののほぼ一線に並ぶ。石は15～20cm程度の角礫を横位に並べ、上面に平坦面を使用することなく南側面を意識し揃えている。上積みの痕跡は認められなかった。埋土は4層に分かれ、上層の第1層は流入とみられるややシルト質のにぶい褐色粘質土、石列北側の第2層は裏込め土とも考えられる。南側下層は褐色粘質土および灰褐色粘質土である。石列北側にあたる遺構検出面上位で須恵器片4点と陶器底部片が出土している。

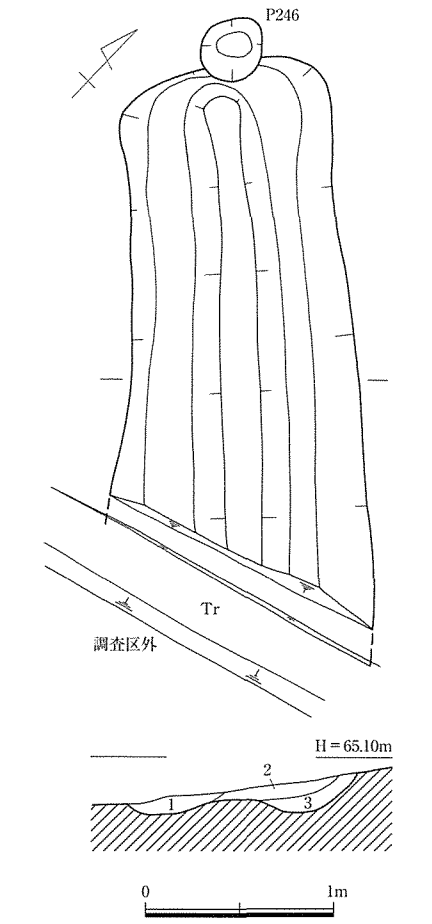
SD-29(第48図、図版12)

谷部下段のFN1区とGN1区境界部、標高66.78mで検出した。北3mにSD-09が配置する。耕作土下の地山面で検出したことから上部は削平されている可能性がある。遺存長1.57m、最大幅39cmを測る。主軸はN-42°-Eを振る。横断面は椀状である。深さは6cmを測る。底面は標高66.66～66.77mを測り僅かに南西側へ傾斜する。埋土は褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。



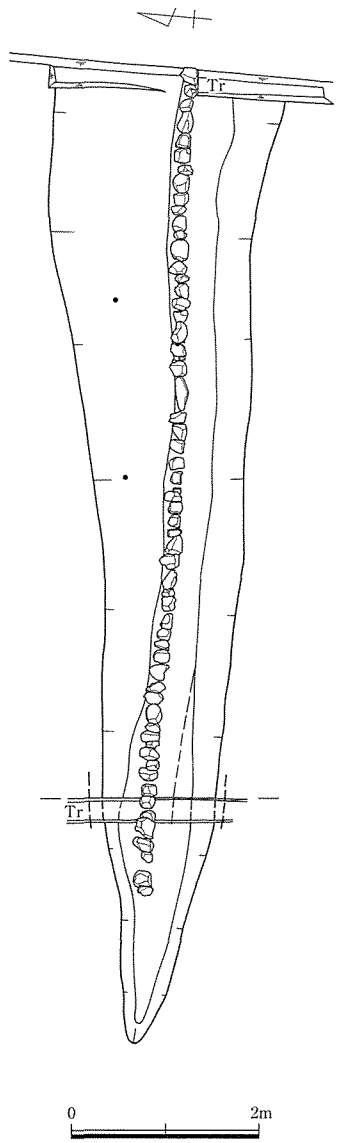
1　褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む。）

第48図　SD-29実測図



1　にぶい褐色粘質土（ややシルト質。締まり弱い。）
2　にぶい褐色粘質土（1よりやや暗。炭片を含む。）
3　灰褐色粘質土（2より暗。0.5cm大の礫を僅かに含む。締まり弱い。）

第46図　SD-27実測図



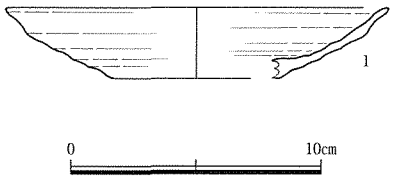
1　にぶい褐色粘質土（ややシルト質。0.3cm大の礫を含む。）
2　褐色粘質土（やや締まる。0.3cm大の礫を含む。）
3　褐色粘質土（2より暗。炭片を含む。締まり弱い。）
4　灰褐色粘質土(炭片を含む。締まる。)

第47図　SD-28実測図

5．その他の遺構と遺物

ピット状遺構(第4・5・49図、図版16)

谷部で計271基のピット状遺構を検出した。このうち11基は掘立柱建物を構成する柱穴であることから、それ以外のピットは計260基となる。分布の中心は標高69m前後の上段の西側にあり、深めでしっかりした掘り込みのものや土層断面に柱痕跡が観察されるピットが目立つ。上段の東側では深さ数cmの小ピットが多く、耕作土下の地山面で検出したことから上位は削平を受けている可能性がある。いずれも上段平坦面は面的に北側の調査区外へ続き、中心部分も北側へ広がっていく可能性が考えられる。この他ピットは、谷部下段の標高の高位周辺に散在する傾向がある中で、谷部下段のFS1区およびGS1区一帯の標高66m前後の試掘トレンチ東周辺部、谷部下段のES3区の標高65m弱のSK-13を中心とした付近に比較的集中する傾向が見受けられる。土層断面から谷部下段にも柱痕跡およびそれに準じる層序が観察されるピットも僅かに認められるものの建物の特定には至らなかった。なお、各ピットについては法量や検出および底部標高、出土遺物などの



第49図　P-198出土遺物実測図

一覧を第１表にまとめた。

ピット埋土から遺物が出土したのは、わずかにP-17、173、175、198、243、245、246であり、いずれも土師器あるいは須恵器細片１点あるいは数点である。このうちP-198では土師器杯(第49図１)が出土している。(１)は口縁部12分の１の残存で推定口径14.8cmを測る。底部から大きく外方へ開く体部は内外面ヨコナデの稜が顕著である。

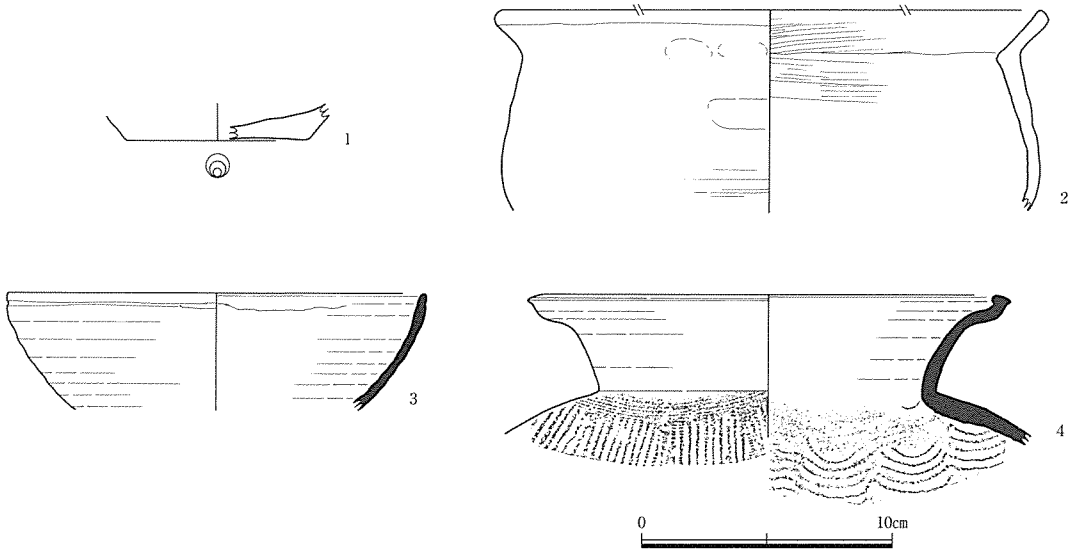
遺構外出土遺物(第４・５・50～55図、図版11・16～18)

遺構以外から出土した遺物として、コンテナ(容量54×34×20cm)７箱分弱に相当する量が出土している。これに対し遺構内から出土した遺物は量的に少なく約コンテナ１箱分である。遺構外遺物の多くは、第10層黒褐色かかる灰褐色粘質土中およびその上層や遺構検出面で出土した遺物である。また、遺構が集中する箇所での遺物の出土というよりは、地形傾斜が変換する削平されて掘削土が掻き出された一帯に遺物が帯状に集中する傾向が見受けられる。例えば谷部下段FS3区SD-25、26南西側の弥生土器(第51図１・２)や須恵器横瓶など(第53図12・16・19)が出土した一帯、谷部下段のSD-13～16南側の土師器、須恵器、備前焼(第52図３・５～10)などが出土した一帯である。その他、谷底部にあたるDS2区とES2区西側には瓦質土器を中心とした遺物(第55図24～33)が出土している。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、土錘、砥石、鉄片などがある。これらのほとんどは土師器体部細片や須恵器壺甕類の体部片で、このうち端部片や比較的遺存状態の良好な遺物(第50図谷部上段遺物)(第51～55図谷部下段遺物)について図化した。

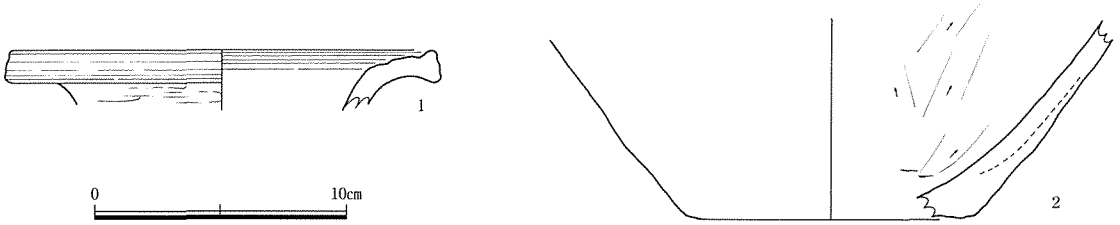
上段で出土した遺物はコンテナ約２分の１程度とそう多くはなく、土師器と須恵器片ではやや土師器片が多い。須恵器片はほとんどが体部片である。このうち(第50図１～４)を図化した。土師器底部(１)は糸切り。上段ではこの他に径10cm程度と比較的大きめの糸切り底部が数点出土している。土師器甕(２)はく字甕で肩部は張らず底部近くで膨らむ形態である。椀(３)は重焼きの痕跡が観察されしっかりした焼きである。甕(４)口縁部は屈曲して上外方へ短く立ち上がり端部で肥厚して面をもつ形態である。

下段で出土した遺物は上段遺物に比べ遺物の時期幅があり、弥生土器から18世紀代の陶器までが出土している。完形の遺物はなく、ほとんど径が復元し難い遺存状態である。弥生土器は弥生中～後期の４点が出土しており、出土位置はFS2区およびFS3区である。(第51図１・２)の端部内外面に凹線を施す広口壺(１)、内面ヘラ削りの底部(２)以外に、無紋の端面をもつ壺口縁部、外面叩き目を有する体部片が出土している。(第52図３～11)は試掘トレンチT1-１東側のFS1区・GS1区・HS1区で出土した遺物である。この一帯ではSD-09南東側を中心に備前焼が点々と出土している。底部(３)(５)は糸切り、高

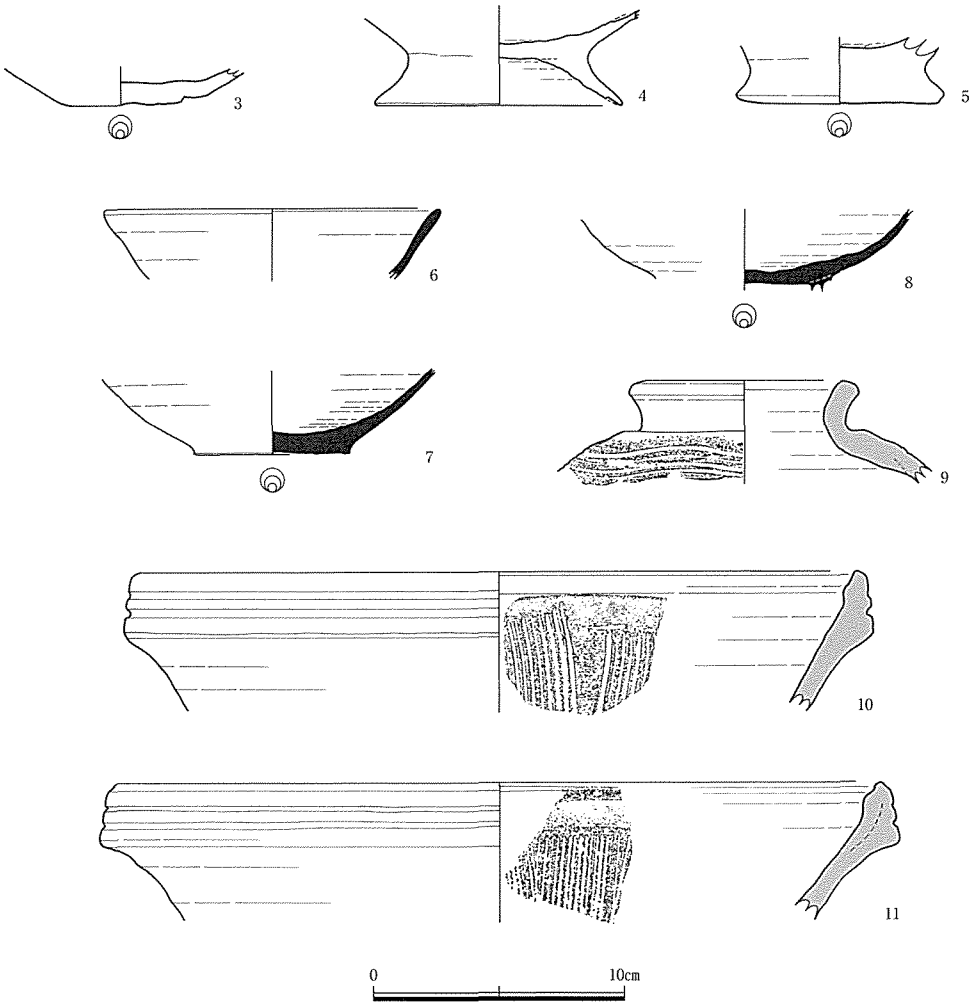


第50図　谷部上段出土遺物実測図

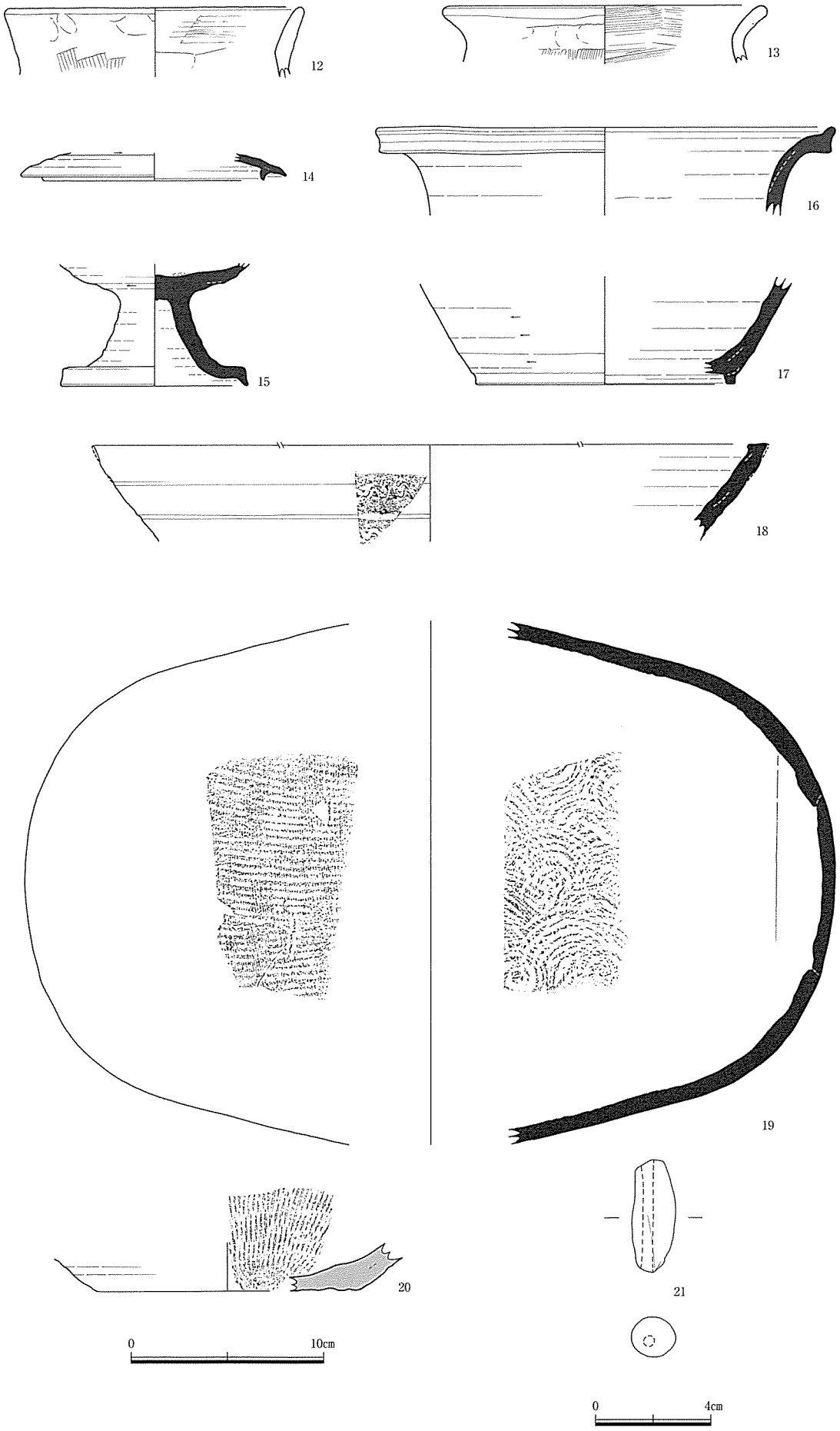
台部(4)は先細りに開く。須恵器(6)～(8)は硬質の焼成で、杯(6)は重焼き痕、椀(7)は円盤状の高台、椀(8)は高台部剥落する。備前壺(9)は口縁部僅かに玉縁状となり、肩部に4～5条の櫛描沈線を施す。備前すり鉢(10・11)は口縁部上下に肥厚して外面に2条の凹線。(10)に比べ(11)は口縁部の肥厚大きく内面擂目が細かく密に施される。(第53図12～21)はFS3区のSD-25、26南西側で出土した遺物である。この一帯では前述の弥生土器(第51図1・2)以外に、土師器、須恵器、僅かに瓦質土器片が出土している。口縁部(18)と備前底部(20)はSD-24近辺で出土した遺物である。壺もしくは甕口縁部(12)(13)は煤が付着し比較的ハケ目が細かく小じんまりとした作りである。杯蓋(14)は口縁端部より僅かに突出するかえりをもつ。高杯(15)は裾部で屈曲して大きく広がる形態で端面をもつ。壺(16)は口縁端部が上外方へ突出し短い端面をもつ。底部(17)は底部外縁に短い高台が付く。口縁部(18)は内湾気味に開き端部は内側に肥厚する。外面に粗い波状文・沈線2段が観察される。横瓶(19)は体部円盤充填部分を中心とした残存で、体部内外面叩き目および当て工具痕。後に外面はカキ目を施す。備前すり鉢底部(20)は重複する擂目が使用により表面滑らかとなる。土錘(21)はGS1杭東側で瓦質鉢と出土しており、



第51図　谷部下段出土遺物実測図(1)

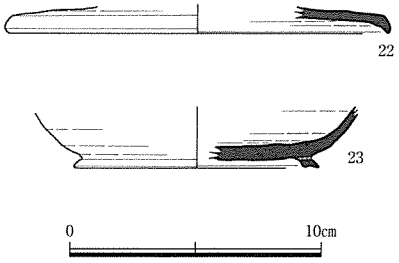


第52図　谷部下段出土遺物実測図(2)

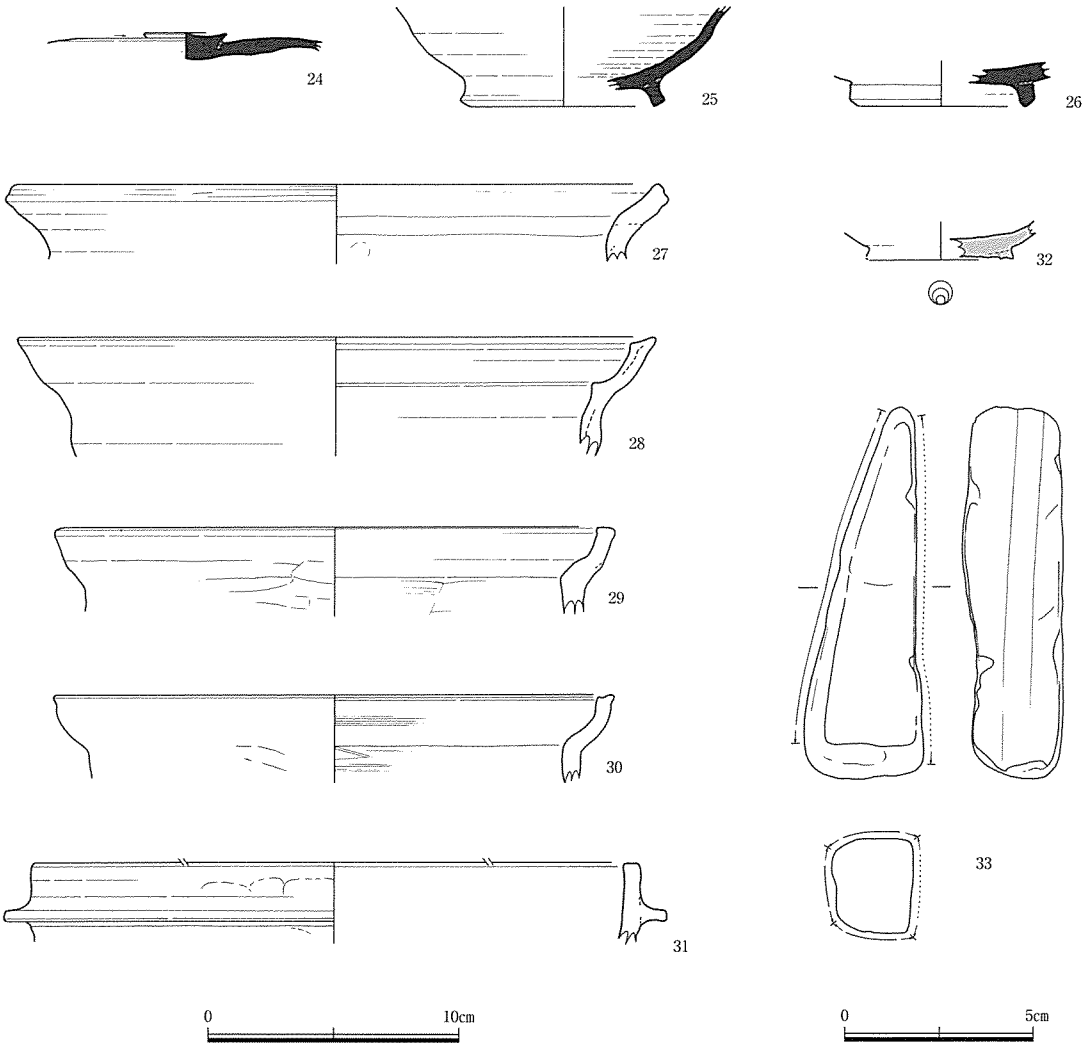


第53図　谷部下段出土遺物実測図（３）

長さ3.81cm、幅1.48cmを測るやや歪な中央が膨らむ管状土錘である。(第54図22・23)はES3区SK-16の北東で出土した遺物である。この周辺ではこの他に比較的大きめな壺あるいは甕の体部片がまとまって出土している。杯蓋(22)は口径14.9cm、扁平な天井部から端部は僅かに下外方へ屈曲して丸く納める。杯高台部(23)は底部外縁よりやや内側に短く開く高台を貼り付ける。底部外面はヘラ切りとみられる。(第55図24～33)はDS2区およびES1区西側の谷底部で出土した遺物である。この周辺では土師器・須恵器片の他、格子目叩きのみられる須恵器片や瓦質土器片が比較的多く出土している。杯蓋(24)は今回唯一摘みのある個体で、径3.1cmの扁平な摘みである。椀底部(25)は短く開く高台が付き、内面は細かな単位のヨコナデの稜で凹凸がみられる。高台部(26)は精良な胎土で高台貼付け時は高台内縁のみ調整される。陶器高台の可能性がある。口縁部(27)は端部でやや開き外傾する端面をもつ。胎土や色調からあるいは弥生土器の可能性がある。瓦質鍋(28～30)は受け口状の口縁部で端面をもつが全体的に受け部の屈曲が甘くなる。瓦質羽釜(31)は鍔部は細く水平に突出し、上部付け根部分は丁寧に調整される。緑釉底部(32)は糸切りで内側に圏線を入れる削り出し高台。全面施釉。砥石(33)は長さ9.75cm、自然石の割れ面あるいは切断面を砥石として使用する。



第54図　谷部下段出土遺物実測図(4)



第55図　谷部下段出土遺物実測図(5)

第1表　谷部ピット状遺構一覧表

	径(cm)	検出高(cm)	底部高(cm)	遺物など	グリット		径(cm)	検出高(cm)	底部高(cm)	遺物など	グリット
P-01	14×12	69.30	69.25		HN1	P-51	29×25	68.84	68.75		IN1
P-02	18×(9)	69.36	69.20		HN1	P-52	31×(12)	69.18	68.78		IN1
P-03	29×27	69.28	68.92	柱痕跡有	HN1	P-53	18×16	68.85	68.72		IN1
P-04	24×20	69.26	68.91	柱痕跡有	HN1	P-54	15×13	68.83	68.74		IS1
P-05	14×11	69.22	69.18		HN1	P-55	37×33	68.78	68.71		IS1
P-06	19×17	69.18	68.93		HN1	P-56	32×29	68.97	68.91		IS1
P-07	18×16	69.17	69.09		HN1	P-57	28×23	68.98	68.85		IS1
P-08	24×22	69.13	69.08		HN1	P-58	19×15	68.96	68.91		IS1
P-09	21×20	69.05	68.94		HN1	P-59	22×20	68.91	68.85		IS1
P-10	21×19	69.11	68.93		HN1	P-60	21×20	68.95	68.83		IS1
P-11	27×17	69.07	68.99		HN1	P-61	34×31	69.12	69.01		IS1
P-12	29×29	69.07	68.97		HN1	P-62	22×20	69.15	69.11		IS1
P-13	21×20	69.07	68.97		HN1	P-63	15×14	69.11	69.05		IS1
P-14	18×16	69.06	68.99		HN1	P-64	20×18	69.10	68.95		IS1
P-15	14×14	69.03	68.93		HN1	P-65	33×30	69.11	69.06		IS1
P-16	38×(10)	69.35	68.78		IN1	P-66	20×16	69.21	69.15		IS1
P-17	29×27	69.10	68.75	土師器片	HN1	P-67	16×23	69.21	69.14		IS1
P-18	30×23	69.03	68.66	柱痕跡有	HN1	P-68	24×24	69.01	68.78		IS1
P-19	21×19	68.96	68.80		HN1	P-69	43×44	69.27	69.23		IS1
P-20	27×25	68.80	68.49		HN1	P-70	39×27	69.21	69.14		IS1
P-21	19×18	68.92	68.73	柱痕跡？	HN1	P-71	15×13	69.16	69.08		IS1
P-22	19×18	68.91	68.72		HN1	P-72	17×14	69.16	69.09		IS1
P-23	25×25	68.85	68.74		HN1	P-73	21×17	69.11	69.04		IS1
P-24	18×(14)	69.31	68.92		IN1	P-74	36×36	69.57	69.49		IS1
P-25	37×32	68.91	68.89		IN1	P-75	13×11	69.41	69.36		IS2
P-26	25×22	68.85	68.60		HN1	P-76	15×14	69.32	69.28		IS2
P-27	17×17	68.66	68.50		HN1	P-77	41×39	69.89	69.73		IS2
P-28	30×26	68.89	68.69	SB-01	IN1	P-78	21×19	69.74	69.69		IS2
P-29	26×25	68.85	68.62		IN1	P-79	15×15	69.61	69.52		IS2
P-30	20×19	68.80	68.73		IN1	P-80	15×14	69.52	69.47		IS2
P-31	19×16	68.74	68.67	SB-01	HN1	P-81	20×18	69.57	69.49		IS2
P-32	23×22	68.31	68.16		IS1	P-82	18×17	69.47	69.41		IS2
P-33	(17)×(5)	68.94	68.86		IN1	P-83	28×22	69.38	69.32		IS2
P-34	13×13	68.85	68.71		IN1	P-84	25×20	69.63	69.58		IS2
P-35	17×15	68.83	68.74		IN1	P-85	21×17	69.60	69.57		IS2
P-36	25×(20)	68.75	68.57		IN1	P-86	18×17	69.57	69.56		IS2
P-37	24×21	68.85	68.66	SB-01・柱痕跡？	IN1	P-87	28×22	70.01	69.93		IS2
P-38	29×28	68.83	68.75	根石？	IN1	P-88	26×(9)	69.97	69.60	柱痕跡有	IS2
P-39	28×32	68.82	68.57		IN1	P-89	25×23	69.77	69.72		IS2
P-40	29×28	68.77	68.66	SB-01	IN1	P-90	35×(29)	69.74	69.70		IS2
P-41	38×37	68.75	68.65	SB-01	IN1	P-91	(48)×42	69.73	69.67		IS2
P-42	40×35	68.70	68.60		IN1	P-92	47×40	69.19	69.00		IS1
P-43	24×20	68.54	68.20		HN1	P-93	24×20	69.56	69.50		IS1
P-44	18×15	68.37	68.26		HN1	P-94	31×28	69.57	69.35		IS1
P-45	25×21	68.64	68.53		IN1	P-95	10×10	69.25	69.23		IN1
P-46	33×29	68.81	68.57		IN1	P-96	18×16	68.82	68.73		IS1
P-47	23×18	68.76	68.63		IN1	P-97	18×16	69.82	69.72		IS1・2
P-48	21×18	68.66	68.44		IN1	P-98	50×(28)	69.39	69.31		IS1
P-49	21×20	68.62	68.33		IN1	P-99	(50)×(—)	69.58	69.42		IS1
P-50	65×58	68.63	68.56		IN1	P-100	(19)×(—)	69.49	69.42		IS1

（　）遺存値

	径(cm)	検出高(cm)	底部高(cm)	遺物など	グリット		径(cm)	検出高(cm)	底部高(cm)	遺物など	グリット
P-101	30×28	68.02	67.96		HN1	P-151	18×(6)	67.09	66.89		GS2
P-102	36×35	68.02	67.92		HN1	P-152	10×(6)	67.11	66.88		GS2
P-103	36×34	68.03	67.89		HN1	P-153	30×27	67.54	67.48		HN・S1
P-104	28×26	67.95	67.85		HN1	P-154	24×22	67.28	67.20		GS1
P-105	33×32	67.92	67.80		HN1	P-155	31×(17)	67.77	67.58		HS1
P-106	55×47	67.84	67.75		HN1	P-156	32×(26)	67.78	67.57		HS1
P-107	25×23	67.79	67.75		HN1	P-157	31×(19)	67.77	67.45		HS1
P-108	42×41	67.76	67.69		HN1	P-158	20×(13)	65.32	65.06		ES3
P-109	50×48	67.69	67.62		HN1	P-159	28×25	65.11	64.98		ES2・3
P-110	43×38	67.78	67.70		HN1	P-160	17×(15)	67.22	67.18		HS2
P-111	17×14	67.66	67.62		HN1	P-161	17×(14)	67.22	67.12		HS2
P-112	26×24	67.65	67.35		HS3	P-162	20×18	67.17	67.05		HS2
P-113	29×29	67.76	67.72		HS1	P-163	26×23	67.14	67.12		HS2
P-114	(19)×(—)	69.02	69.81		IN1	P-164	22×20	67.81	67.57	柱痕跡？	HS2
P-115	29×29	67.73	67.66		HS1	P-165	21×20	68.07	67.87		HS2
P-116	28×27	67.73	67.66		HS1	P-166	17×16	68.15	68.04		HS2
P-117	22×21	67.73	67.63		HS1	P-167	23×21	68.29	68.12		HS2
P-118	55×44	67.71	67.68		HS1	P-168	35×33	68.42	68.37		HS2
P-119	18×16	67.69	67.64		HS1	P-169	25×24	68.44	68.37		HS2
P-120	35×35	67.68	67.62		HS1	P-170	19×16	68.41	68.39		HS2
P-121	25×23	67.55	67.46		HS1	P-171	20×19	68.53	68.47		HS2
P-122	18×18	67.51	67.46		HS1	P-172	34×30	68.85	68.82		IS2
P-123	19×18	67.49	67.47		HS1	P-173	30×25	68.48	68.19	柱痕跡有 土師器杯底片	HS2
P-124	19×18	67.31	66.79	柱痕跡？	HS1	P-174	28×26	68.27	68.24		HS3
P-125	33×27	67.11	67.02		HS1	P-175	27×26	68.34	68.28	須恵器胴片	HS3
P-126	61×56	67.36	67.24		HS1	P-176	17×15	68.36	68.23		HS3
P-127	29×25	67.41	67.35		HS1	P-177	19×18	68.54	68.38		HS3
P-128	28×27	67.47	67.38		HS1	P-178	48×(25)	67.37	67.28		GN1
P-129	35×31	67.44	67.23		HS1	P-179	40×34	66.16	66.03		GS1
P-130	24×23	67.48	67.36		HS1	P-180	34×28	66.24	65.92	SB-02	GS1
P-131	20×18	67.42	67.30		HS1	P-181	26×24	66.37	66.26		GS1
P-132	29×23	67.45	67.61		GN1	P-182	27×24	66.38	66.02	SB-02	GS1
P-133	21×20	67.74	67.67		GN1	P-183	36×35	66.04	65.97		GS1
P-134	24×21	67.58	67.52		GN1	P-184	33×32	65.97	65.91	SB-02	GS1
P-135	33×34	67.46	67.38		GN1	P-185	34×34	66.00	65.83		GS1
P-136	42×36	67.46	67.33		GN1	P-186	32×27	66.07	65.92	SB-02	GS1
P-137	29×(20)	67.46	67.18		GS1	P-187	29×29	65.91	65.79	試掘Tr内	GS1
P-138	29×29	67.11	67.03		GS1	P-188	27×25	66.26	66.04	SB-02 試掘Tr内	GS1
P-139	20×18	67.09	66.97		GS1	P-189	19×17	66.19	66.10	試掘Tr内	GS1
P-140	15×13	67.05	66.97		GS1	P-190	27×25	66.46	66.34	SB-02	GS1
P-141	23×20	67.05	67.01		GS1	P-191	61×56	65.83	65.63		GS1
P-142	38×36	67.92	66.84		GS1	P-192	32×30	65.77	66.62		FS1
P-143	33×30	66.10	65.97		GN・S1	P-193	43×41	65.80	65.71		FS1
P-144	(33)×(29)	66.90	66.82		GS1	P-194	53×48	65.76	65.67		FS1
P-145	33×(25)	66.82	66.72		GS1	P-195	36×34	65.70	65.54		FS1
P-146	40×37	69.53	69.26		GS1	P-196	33×24	65.73	65.63		FS1
P-147	17×16	66.08	65.94		GS1	P-197	29×26	65.76	65.65		FS1
P-148	(17)×(16)	66.10	65.94	SK-09が切る	GS1	P-198	31×27	65.82	65.61	柱痕跡？ 土師器杯	FS1
P-149	(12)×(10)	66.11	65.97	SK-09が切る	GS1	P-199	28×27	65.92	65.83		FS1
P-150	33×31	65.41	65.25		FS2	P-200	26×25	65.93	65.79		FS1

( )遺存値

	径(cm)	検出高(cm)	底部高(cm)	遺物など	グリット		径(cm)	検出高(cm)	底部高(cm)	遺物など	グリット
P-201	25×24	65.96	65.89		FS1	P-251	37×32	64.40	64.32		DS1
P-202	44×39	65.80	65.67		FS1	P-252	36×33	64.33	64.21		DS1
P-203	47×40	65.54	65.33	柱痕跡有	FS1	P-253	38×37	64.18	64.03		DS1
P-204	21×20	65.51	65.40		FS1	P-254	46×40	63.79	63.60		DS1
P-205	34×32	65.59	65.44		FS1	P-255	40×39	64.06	63.92		DS1
P-206	33×31	65.49	65.42		FS1	P-256	27×24	63.70	63.63		DS1
P-207	41×40	65.38	65.23	柱痕跡？	FS1	P-257	50×(26)	65.33	65.27		ES3
P-208	35×32	65.48	65.33		FS1	P-258	(27)×(—)	69.08	68.92		IN1
P-209	28×26	66.32	66.24		FS1	P-259	(16)×(—)	69.26	69.08		IN1
P-210	39×35	66.31	66.26		FS1	P-260	(66)×(—)	69.37	69.16		IN1
P-211	32×30	66.69	66.65		FN1	P-261	(99)×(—)	69.34	68.89		IS1
P-212	14×13	68.40	68.33		HS3	P-262	(72)×(—)	67.72	67.22		HS1
P-213	17×17	68.40	68.32		HS3	P-263	(14)×(—)	66.97	66.85		GS2
P-214	20×17	67.62	67.55		GS3	P-264	(19)×(—)	66.99	66.88		GS2
P-215	25×23	67.39	67.12		GS3	P-265	(15)×(—)	67.03	66.94		GS2
P-216	21×18	67.06	66.99		GS2	P-266	(12)×(—)	67.12	67.04		GS2
P-217	23×20	67.01	66.91		GS2	P-267	(14)×(—)	67.46	67.34		HS1
P-218	28×28	66.85	66.78		GS2	P-268	(26)×(—)	67.40	67.24		HS1
P-219	33×30	66.80	66.63		GS2	P-269	(14)×(—)	66.97	66.64		GS1
P-220	32×29	66.94	66.71		GS2	P-270	(16)×(—)	66.12	65.94		GS1
P-221	28×25	66.87	66.77		GS2	P-271	(65)×(—)	65.60	95.43		FS1
P-222	28×26	66.52	66.45		GS2						
P-223	35×36	66.48	66.38		GS2						
P-224	24×23	66.20	65.99		GS2						
P-225	20×18	66.15	66.05		FS3						
P-226	56×52	64.81	64.47		ES2						
P-227	21×20	65.44	65.26		FS3						
P-228	21×19	65.46	65.27		FS3						
P-229	42×39	65.71	65.58		FS3						
P-230	25×24	65.72	65.48		ES3						
P-231	25×24	65.71	65.56		ES3						
P-232	18×16	65.72	65.65		ES3						
P-233	33×31	65.26	65.17		ES3						
P-234	23×22	65.23	65.13		ES3						
P-235	33×30	65.28	65.11		ES3						
P-236	28×26	65.22	65.17		ES3						
P-237	21×21	65.21	65.15		ES3						
P-238	25×24	65.12	65.02		ES3						
P-239	29×28	65.19	65.08		ES3						
P-240	22×19	65.23	65.15		ES3						
P-241	48×44	65.07	65.00		ES2						
P-242	55×50	64.97	64.90		ES2						
P-243	50×47	64.93	64.77	須恵器細片	ES2						
P-244	35×35	64.75	64.64		ES2						
P-245	59×52	64.65	64.34	土師甕口縁片	ES2						
P-246	33×32	64.75	64.42	土師器細片	ES2						
P-247	48×44	64.34	64.15		ES2						
P-248	38×36	64.60	64.45		ES1						
P-249	43×41	64.40	64.31		ES1						
P-250	37×37	64.31	64.24		ES1						

第２節　三谷９号墳の調査（第３・56～58図、図版13～15・18）

三谷９号墳は、三谷国ヶ谷遺跡西側丘陵部の南西に細く張り出す小尾根頂部に立地する。西隣尾根に展開する郷原古墳群（３・10・15・９・８号墳など）の支群と考えられるが、今回古墳の名称は現在の行政区分から三谷古墳群としての扱いを行った。

〔位置と現状〕

三谷９号墳は、北西へ延びる主稜線から南南西へ細く張り出す小尾根先端の頂部、標高66.57～67.93mに立地する。尾根上位の北側は果樹園造成時に数段の平坦面状に削平され、現在では杉が植林されており、尾根先端周辺部が独立丘陵状に遺存する。小谷を挟んだ西隣には連綿と郷原古墳群が配置する尾根が近接し、三谷９号墳の50m南西面の標高64mには郷原９、８号墳が立地する。このように西隣に同様な軸でやや標高の高い尾根が近接することから三谷平野への見通しは利かず、尾根先端の空間で三谷平野奥部への視界が僅かに広がる。調査前の観察では、調査区内の尾根稜線上には径80cm以上もある木根が３、４本あり、木根の根元周辺が高まりを保ちつつもそれ以外では流失がすすんでいるように見受けられた。尾根西側は急傾斜で小谷へと続き、東側は比較的緩やかに谷部へ続く。谷部との比高差は３m弱である。積極的には古墳と想定し難い状況ながら、西隣尾根の古墳の存在を考慮し、尾根先端頂部に僅かに高まりが認められ尾根線に直交する溝状の窪みが確認できることから古墳の存在が予想された。また、それに続く尾根上位部分についても視野に入れておく必要があるものと思われた。

〔墳丘〕

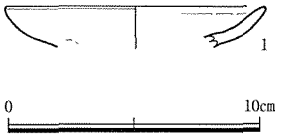
腐植土および表土下10～18cm程度で墳丘面を検出した。墳頂部の一部を除いて腐植土および表土下は地山面である。墳頂部の標高67.93mを測る。墳丘北西側は一部プラスチック等が出土した果樹園関連の土坑（SX）群によって掘削される。尾根線方向に僅かに長軸をもつ円墳とみられ、墳丘規模は現況で南北10.4m、東西10.1mとほぼ10mを測る。墳丘の高さは北西裾から1.36mを測る。墳丘は、尾根高位側で幅1.6m、深さ0.45m余りを測る断面緩やかな椀形の溝を尾根頂部を中心として円形に掘り込み、地山成形と掘削した土砂を北西低位側へ厚く盛土することで築造したと推測される。旧地表面は検出されなかった。盛土の多くは既に流失しており、墳頂部および北西墳丘斜面で13cmが遺存するに留まる。墳丘検出時の北西側の均一なシルトの土量を勘案すると本来は墳頂部にもかなりの盛土がなされていたと考えられる。

〔埋葬施設〕

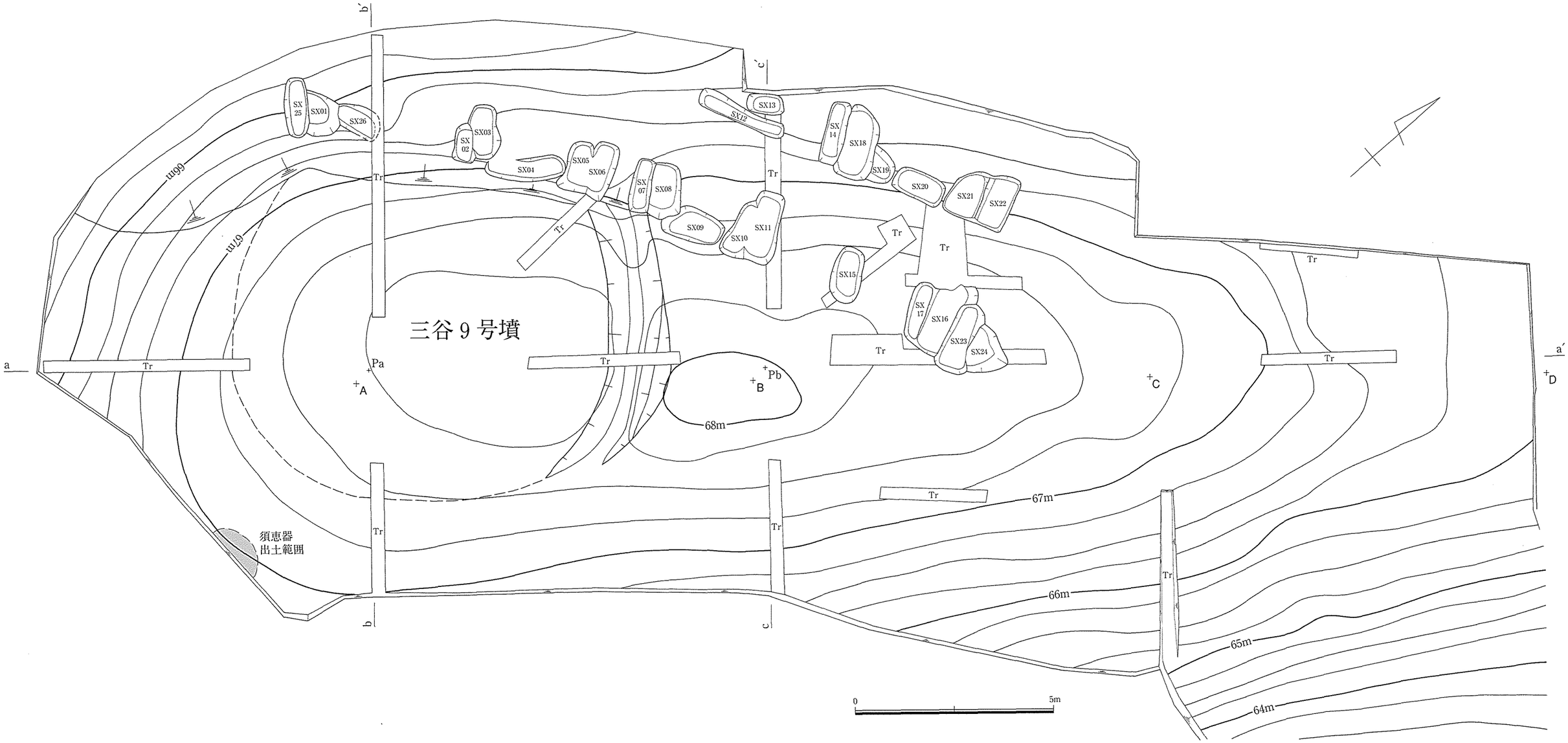
墳頂部表土下を繰り返し精査し、土層観察用ベルト沿いにトレンチを掘削、最終的に中央部をＴ字状に断ち割ったが埋葬施設はみられなかった。流失したとみられる。

〔出土遺物〕

墳丘検出時に古墳北裾から２m離れた地点で須恵器壺甕類の体部片４点、土層ベルトb-b′を挟んで同じく須恵器壺甕類の体部片１点と土師器細片１点が出土している。この他、古墳とは直接関連しないが、南西墳丘上より土師器皿（第58図１）が出土している。（１）は風化剥落著しく復元口径10.1cmを測る。この他、尾根北西側に掘り込まれた土坑（SX）群から磁器、鉄、ゴム、プラスチック片など約３袋、果樹園造成および栽培期のものとみられる陶磁器・瓦・ガラス片などがCS1区やAN1区およびBN1区のSX土坑の上層部分にあたる表土下で５袋程度出土している。

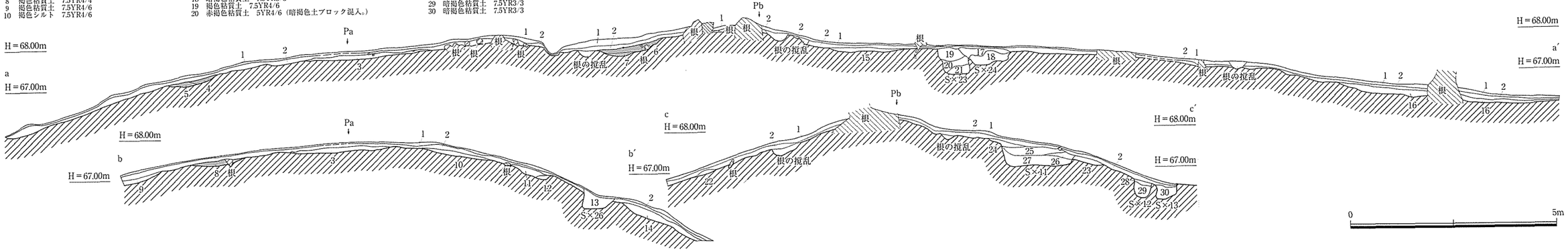


第58図　丘陵部出土遺物実測図



第56図　丘陵部三谷９号墳墳丘遺存図(S＝１：100)

1　腐葉土
2　褐色シルト　7.5YR4/3（表土。）
3　褐色粘質土　7.5YR4/4
4　褐色粘質土　7.5YR4/6
5　褐色粘質土　7.5YR4/6（橙色地山ブロックを含む。）
6　褐色シルト　7.5YR4/4
7　暗褐色粘質土　7.5YR3/4（0.5～１cm大の円礫点在。）
8　褐色粘質土　7.5YR4/4
9　褐色粘質土　7.5YR4/6
10　褐色シルト　7.5YR4/6
11　褐色粘質土　7.5YR4/6（明黄褐色地山ブロックを含む。）
12　褐色粘質土　7.5YR4/4
13　暗褐色粘質土　7.5YR3/3（褐色シルト地山ブロックを僅かに含む。）
14　暗褐色粘質土　7.5YR4/3
15　褐色シルト　7.5YR4/4（地山ブロック点在。）
16　褐色粘質土　7.5YR4/6
17　赤褐色粘質土　5YR4/6
18　暗褐色粘質土　7.5YR3/3
19　褐色粘質土　7.5YR4/6
20　赤褐色粘質土　5YR4/6（暗褐色土ブロック混入。）
21　暗褐色粘質土　7.5YR3/2
22　褐色粘質土　7.5YR4/4
23　褐色粘質土　7.5YR4/6
24　褐色シルト　7.5YR4/4（地山ブロック混入。）
25　暗褐色粘質土　7.5YR3/4（地山ブロック混入。）
26　褐色粘質土　7.5YR4/4（地山ブロック混入。）
27　暗褐色粘質土　7.5YR3/3
28　褐色シルト　7.5YR4/4（地山ブロック混入。）
29　暗褐色粘質土　7.5YR3/3
30　暗褐色粘質土　7.5YR3/3



第57図　丘陵部三谷９号墳墳丘断面図(S＝１：100)

第２表　出土遺物観察表

（　）復元値　〈　〉推定値

SD-18

挿図番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	遺物登録番号
第38図1	磨製石斧	L11.65	W3.7	T2.05	基部から僅かに増幅、中央で最大幅となり、刃縁は弧状を成す。断面縦位で蛤刃、横断面楕円状。砥石に転用か？			淡黄灰色	一部欠	重量　152g	60 165

SD-24

第44図1	磁器(底部)	—	4.3	—	高台際、高台に圏線。 高台削り出し、畳付無釉。	緻密	硬質	(断)　白色 (釉)　明緑灰色 (露)　にぶい橙色	(底)　1 (高台)　1/2	貫入有 肥前	171

P-198

第49図1	杯	〈14.8〉	—	—		3㎜大の砂粒有	良	淡黄褐色	(口)　1/12	黒斑有	176

谷部上段

第50図1	皿	—	(7.0)	—	糸切り底。	1㎜大の砂粒有	良好	淡橙色	(底)　1/4		57
第50図2	鍋	—	—	—	くの字状口縁。 内面口頸部ハケ目調整。	1～2㎜の砂粒多	良	橙褐色	(口頸)一部	煤付着	57
第50図3	須恵器椀	(16.0)	—	—	体部は内湾して開き、口縁端部は丸い。	1㎜以下の砂粒多	良好	灰色	(口)　1/6	重ね焼き痕	57
第50図4	須恵器甕	17.6	—	—	頸部外傾、口縁部は外上方へ短く屈曲、端部で肥厚して面を持つ。	0.5㎜前後の砂粒有	良	灰色	(口)　1/2 (肩)　1/5	自然釉	119

谷部下段

第51図1	弥生土器(口縁部)	〈16.3〉	—	—	口縁部は外反、端部は拡張する。端面と上面、それぞれ２条の凹線を施す。	1㎜以下の砂粒多	やや不良	にぶい黄橙色	(口)　1/9		96
第51図2	弥生土器(底部)	—	〈10.2〉	—	平底。 内面ヘラ削り。	1㎜前後の砂粒多	やや不良	淡黄褐色	(底)　1/10		30
第52図3	(底部)	—	4.7	—	糸切り底。	精緻な胎土	やや不良	にぶい橙色	(底)　1	煤付着	138
第52図4	(高台部)	—	〈9.8〉	—	高台内面　ヨコナデにより糸切り不明瞭。	0.5㎜前後の砂粒多	やや不良	褐色 一部　橙褐色	(底)　1	黒斑有	182
第52図5	(底部)	—	7.8	—	柱状高台。 底部内面ナデ。	1㎜以下の砂粒多	やや不良	(外)　橙色 暗灰色 (内)　橙色	(底)　1	黒斑有	133
第52図6	須恵器(口縁部)	〈13.0〉	—	—		1㎜以下の砂粒多	良好	灰色	(口)　1/10	重ね焼き痕	145
第52図7	須恵器杯	—	6.0	—	体部は内湾しながら大きく開く。 底部糸切り未調整。 内面底部ナデ。	1㎜前後の砂粒多 3㎜の砂粒有	良好	灰色	(底)　1		137
第52図8	須恵器(底部)	—	—	—	底部糸切り　後　高台貼付。	0.5㎜以下の砂粒多	良好	灰色	(底)　1		132
第52図9	陶器壺	〈7.7〉	—	—	肩部４～５条の櫛描による沈線。	1㎜以下の砂粒多 8㎜大の砂礫有	良好	灰色	(口)　1/8 (肩)　2/5	備前	131
第52図10	陶器擂鉢	〈28.0〉	—	—	口縁２条の条線。内面９条以上の擂目。	1～2㎜の砂粒含	やや軟質	(断)　暗赤褐色 灰色 (素)　にぶい赤褐色	(口)　1/12	備前	141
第52図11	陶器擂鉢	〈30.1〉	—	—	口縁２条の条線。内面15条以上の擂目。	0.5㎜以下の砂粒多	硬質	(断)　濃橙色 (素)　灰褐色	(口)　1/25	備前	25
第53図12	(口縁部)	〈14.9〉	—	—	外傾する口縁部は端部で丸く納める。	1～2㎜の砂粒多 3㎜の砂粒有	良	灰黄褐色	(口)　1/7	煤付着	92
第53図13	甕	〈15.9〉	—	—	外反する口縁部は端部で丸い。内外面ハケ目調整。	1㎜前後の砂粒多 2～3㎜大の砂粒有	やや不良	暗褐色	(口)　1/13	煤付着	27
第53図14	須恵器蓋	〈13.4〉	—	—	かえりは口縁端部より僅かに突出する。 天井部ヘラ削り。	1㎜以下の砂粒多	良好	淡灰色	(口)　1/12		27
第53図15	須恵器高杯	—	(9.4)	—	脚基部は太く、ラッパ状に外反し、端部を下方へ屈曲、段を成す。	1㎜前後の砂粒多	良好	灰色	(杯底)　3/4 (脚)　1/6	自然釉	7
第53図16	須恵器壺	(23.0)	—	—	外反する口縁部は端部で上位に肥厚する。	1㎜前後の砂粒多 2㎜大の砂粒有	良	灰色	(口)　1/5		88
第53図17	須恵器(底部)	—	〈13.1〉	—	脚台部付底部。	0.5㎜以下の砂粒多 2㎜大の砂粒有	良好	灰色	(底)　1/8		68

（ ） 復元値　〈 〉 推定値

挿図番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	遺物登録番号
第53図 18	須恵器（口縁部）	—	—	—	2条の沈線下位　粗な波状文を施す。	1㎜前後の砂粒多 4㎜大の砂礫有	良	灰色	一部		61
第53図 19	須恵器 横瓶				外面　タタキ目。 　　カキ目。 内面　当て工具痕。 　　円盤充填痕。	1～2㎜の砂粒多 4㎜大の砂礫有	良好	灰色	（体）　1/4	自然釉	27 30 82～86
第53図 20	陶器 擂鉢	—	〈13.3〉	—	擂鉢底部。 使用頻度著しい。	1㎜前後の砂粒多	硬質	にぶい赤褐色	（底）　1/9	備前	61
第53図 21	土錘	L3.81	W1.48	孔径 3.7	同化剥落著しい。俵型。指成形後ナデ。	0.5㎜以下の砂粒多 1.5～4.5㎜の砂礫有	良	淡黄褐色	1		22
第54図 22	須恵器 蓋	〈14.9〉	—	—	平坦な天井部から口縁端部で屈曲、外方へ短く納める。	1㎜以下の砂粒多	良	灰色	（口）　1/12		37
第54図 23	須恵器（高台部）	—	(9.5)	—	底部回転ヘラ切り後　高台部貼付、横ナデ。高台の接地面はほぼ平らで凹面をもつ。	2㎜以下の砂粒多	良好	灰色	（底）　2/5		106
第55図 24	須恵器 蓋	つまみ径 3.1	—	—	天井部平ら。扁平な中央凸形を成すつまみが付される。	1㎜以下の砂粒多	良好	灰色	つまみ　1		38
第55図 25	須恵器（底部）	—	(8.0)	—	八の字状の高台は、内端面で接地する。	0.5㎜以下の砂粒多	やや不良	灰色	（底）　1/4		152
第55図 26	須恵器（高台部）	—	(6.6)	—	高台貼付後横ナデ。	1㎜以下の砂粒有 良好	淡灰色	（高台）	1/4		187
第55図 27	（口縁部）	〈25.1〉	—	—	外傾する口縁部は端部で面を持つ。	2㎜前後の砂粒多 4㎜大の砂礫有	やや不良	橙色	（口）　1/12		45
第55図 28	瓦質 鍋	〈24.8〉	—	—	受け口状の口縁部。 口縁部は屈曲して立ち上がる。	1㎜前後の砂粒多	良	灰黄色	（口）　1/11	煤付着	156
第55図 29	瓦質 鍋	〈21.3〉	—	—		1㎜以下の砂粒多 2～4㎜の砂粒有	良	灰色	（口）　1/16		165
第55図 30	瓦質 鍋	〈21.8〉	—	—		2㎜大の砂粒有	やや不良	乳灰色、暗灰色	（口）　1/14	煤付着	148
第55図 31	瓦質 羽釜	〈23.6〉	—	—	頸部ほぼ直立。 鍔貼付後下位横位のナデ。	0.5㎜以下の砂粒多 2㎜の砂粒有	良	暗灰色	（口）　1/14	煤付着	156
第55図 32	緑釉陶器（底部）	—	(5.5)	—	内面見込みに一重圏線、目跡1。 底部糸切り。削り出し高台。 高台内側に圏線。全面施釉。	精緻	硬質	（断）　灰色 （釉）　明緑色 （露）　灰色	（底）　1/5	緑釉貫入有	45
第55図 33	砥石	L9.75	W2.65	T2.86	長軸方向一面使用。			にぶい黄橙色	完存	76g	41

丘陵部

第58図 1	皿	〈10.1〉	—	—	剥落不明瞭。	0.5㎜以下の砂粒多	良	にぶい橙色	（口）　1/7		1

第3節　まとめ

今回の三谷国ヶ谷遺跡の調査で、掘立柱建物２棟、土坑16基、溝状遺構29条、ピット状遺構260基を検出した。出土した遺物には、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、弥生土器、土錘、石斧、砥石、鉄製品がある。調査した面積に対しそう多くはなく、総量はコンテナ(容量54×34×20cm)約９箱分に相当する。また、三谷国ヶ谷遺跡の丘陵部で検出した三谷９号墳の調査では、残念ながら主体部は既に流失してしまっていたが、径10mの円墳であることが明らかとなった。

今回調査対象となった遺跡の所在する小谷は、三谷集落の背後北西に広がる幅20mほどの谷終息部北西側にあたり、谷の東裾を古道が通る。古道はさらに山地を上り、山を越えると八頭町国中集落である。谷の周囲は墓や果樹園、畑地に広く利用されており里山として古くからの生活圏であったことが窺える。谷の西側は三谷９号墳の立地する小尾根でさらに西側には連綿と郷原古墳群[1]が築かれた尾根があり、三谷谷を北西谷口から入ると三谷集落の北西前面に古墳群が控える景観となる。

検出した遺構は、土坑と溝状遺構が中心であり、集落の中枢部には該当しない。掘立柱建物が２棟検出されているが、上段に位置するSB-01は北側平坦面へ広がる住居の一角を構成する可能性をもち、SB-02については家屋よりやや離れて立地する焼成土坑SK-09の覆屋とみられる。SB-02は柱穴底部に40cm余り比高差が認められるものの、場合によっては10世紀後半～11世紀の土師器皿を出土したP198とP192、P200まで延びる２×２間の建物であったと考えられる。特徴的なのは溝状遺構の存在である。総数29条もの遺構を検出したが、その中で上段の南から北へ延びる小規模な幅30～50cm程度の溝状遺構については、いずれも第18層が基盤となっており、その上層の第11層ではピットが形成されている。SD-02～04についてはほぼ同様な軸方向で約２m間隔に配置しており、畑地の畝状の遺構かとも思われるが根拠に乏しく、地形に制約される形で排水などの機能を果たしていたと思われる。下段でも上段と同様な形状で軸をとるSD-13～15、形状は同様であるが軸を直交するSD-21～23、同様な形状ではあるが一端が屈曲するＬ字状のSD-11、16もある。遺跡の性格を考えていく上で今後も検討を必要とする。

時期が不明瞭な遺構が多いことから出土遺物から概観すると、谷部で出土した遺物量はコンテナ約７箱、時期的には弥生時代中期後葉、７世紀後半～14世紀、16世紀前半～18世紀の遺物である。果樹園造成で部分的に上部が削平されている箇所はあるにせよ遺物の出土量を考慮に入れても、ゴミ捨て場的な遺構もなく、調査地内で継続的に集落が営まれたような状況は見出せなかった。居住域を想定するのであれば、谷終息部を掘削して平坦部としている上段北側や敷地の区画とみられる石列が検出されたSD-28の東側およびSK-16南東側の谷縁辺部の山裾微高地に求められる。SK-16北側FS3区の掻き出されたような遺物の出方やこれらは地形的にも堅い地山基盤であることから、十分に可能性はあると考えられる。加えて、７世紀から断続的に出土する遺物を考慮すると、あくまで谷部は作業あるいは耕作地など集落に付随した空間であったと言えよう。土層断面と瓦質土器や土師器鍋類の出土具合から谷部の堆積作用は13～14世紀に強まり、その後安定した状況で17、18世紀代を迎えたとみられる。

千代川、八東川、私都川が合流するこの地域は、河川の氾濫を避けるため内陸部へ居住域、生産域を求めていった結果、山手、郷原、三谷の小平野および周辺低丘陵に各種遺跡が展開した地域である。谷口に位置する前田遺跡では縄文土器片が、当遺跡でも弥生時代中期の土器が出土している。時代がすすむにつれ河川による沖積もあり平野部へと立地範囲を広げていく。この地域において1.7km北東に位置する八上郡衙である万代寺遺跡の存在は大きく、古墳時代後期古墳に続いて奈良・平安期、中世期の遺跡は周辺地域に点々と分布する。当遺跡から西へ400m弱の郷原遺跡[2]では、奈良～平安期の掘立柱建物10棟、柵列、土坑が、同じく北西へ750mの前田遺跡[3]では15～16世紀の屋敷跡とまじない札などを出土した井戸が発掘調査によって検出されている。その中で三谷谷は千代川沿岸の釜口や、国中平野、大江谷へも抜ける交通の要所でもあり、万代寺遺跡を盛り立てた集落の一つとして役割を果たしていたとみられる。

今後、国中平野および平野縁辺の丘陵部などに立地する小集落、生産遺跡など時期別に遺跡の細かな検討がすすめば、千代川水系の中流域としてこの地域のもつ独自性、重要性が明らかとなっていくであろう。地道な調査成果、検討の積み重ねが期待される。

註

(1) 鳥取市文化財団『郷原石堂口遺跡・郷原古墳群』2006年
鳥取市文化財団『郷原地才工下平遺跡』2007年

(2) 河原町教育委員会『郷原遺跡発掘調査報告書』1986年

(3) 河原町教育委員会『前田遺跡発掘調査報告書』1983年
須恵器、中世土器、陶磁器の年代については以下の文献を参考とした。
大阪府立近つ飛鳥博物館『年代のものさし—陶邑の須恵器』平成17年度冬季企画展図録　2006年
郡家町教育委員会『下坂窯跡群』1988年
中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』1995年　真陽社

第3表　掘立柱建物一覧表

遺構名	桁×梁(間)	桁行(m)	梁行(m)	平均柱間 桁行(m)	平均柱間 梁行(m)	面積(m²)	主軸方向	出土遺物等	時期
SB-01	1×2	2.96	1.4	1.52	1.40	4.14	N-79°-E	—	〈10～11世紀〉
SB-02	1×2	3.90	2.13	1.95	2.03	8.30	N-69°-W	—	〈10～11世紀〉

(　)遺存値　〈　〉推定

第4表　土坑、溝状遺構一覧表

遺構名	法量(m) 長軸	法量(m) 短軸	法量(m) 深さ	底部標高(m)	平面形	断面形	主軸方向	出土遺物等	時期
SK-01	1.85	0.94	0.14	69.16	不整長楕円形	不整皿状	N-1°-W	—	
SK-02	1.01	0.85	0.08	69.03	不整楕円形	皿状	N-13°-E	—	
SK-03	1.03	0.39	0.19	69.19	長楕円形	椀状	N-61°-W	—	
SK-04	0.89	0.83	0.07	66.63	不整楕円形	皿状	N-86°-E	—	
SK-05	0.96	0.71	0.14	67.80	不整楕円形	皿状	N-78°-E	—	
SK-06	0.94	0.81	0.14	67.78	不整楕円形	皿状	N-54°-W	—	
SK-07	0.79	0.61	0.05	67.73	楕円形	皿状	N-68°-E	—	
SK-08	0.87	0.82	0.21	67.51	不整楕円形	椀状	N-33°-W	—	
SK-09	1.02	0.91	0.34	65.84	楕円形	椀状	N-83°-E	—	〈10世紀後半〉
SK-10	0.98	0.88	0.10	65.39	不整楕円形	皿状	N-12°-E	—	
SK-11	0.76	0.70	0.13	65.97	不整楕円形	不整皿状	N-43°-E	—	
SK-12	(2.08)	(1.23)	0.48	67.10	—	不整逆台形状	—	—	
SK-13	1.91	1.60	0.16	65.14	不整隅丸方形状	皿状	N-40°-E	—	
SK-14	1.22	1.19	0.42	64.59	隅丸方形状	不整椀状	N-86°-W	—	
SK-15	0.68	0.65	0.30	63.81	円形	椀状	—	—	
SK-16	(0.96)	(0.76)	0.40	65.00	—	不整逆台形状	—	—	〈8世紀後半〉
SD-01	(0.83)	0.37	0.26	68.87～(69.00)	溝状	不整椀状	N-12°-W	—	〈10～11世紀〉
SD-02	(2.74)	0.43	0.19	68.51～(68.90)	溝状	不整椀状	N-5°-W	—	〈10～11世紀〉
SD-03	(3.03)	0.50	0.16	68.40～(68.86)	溝状	不整椀状	N-2°-W	—	〈10～11世紀〉
SD-04	(2.66)	0.50	0.08	68.53～(68.88)	溝状	皿状	N-3°-W	—	〈10～11世紀〉
SD-05	(3.55)	0.74	0.14	68.76～(68.84)	溝状	皿状	N-16°-W	—	〈10～11世紀〉
SD-06	(3.26)	0.37	0.12	69.26～(69.35)	溝状	皿状	N-22°-W	—	〈10～11世紀〉
SD-07	1.18	0.34	0.04	69.73～69.81	溝状	皿状	N-15°-E	—	
SD-08	7.18	0.85	0.20	68.46～68.61	ノ字状	皿状	N-56～71°-W	—	
SD-09	(11.90)	0.80	0.09	67.45～(67.90)	L字状	皿状	N-15°-E、N-43°-W	備前焼、陶器底部	17世紀後半
SD-10	6.24	0.41	0.09	67.71～67.81	溝状	皿状	N-18°-E	—	
SD-11	5.30	0.27	0.06	67.64～67.81	L字状	皿状	N-25°-E、N-71°-W	—	
SD-12	2.30	0.24	0.07	67.21～67.41	溝状	椀状	N-17°-E	—	
SD-13	6.54	0.32	0.07	67.13～67.70	溝状	椀状	N-2°-E	—	〈11世紀〉
SD-14	4.57	0.30	0.06	67.05～67.49	溝状	椀状	N-5°-E	—	〈11世紀〉
SD-15	5.26	0.37	0.10	67.55～66.99	溝状	椀状	N-4°-E	土師器甕頸部	〈11世紀〉
SD-16	4.95	0.29	0.09	67.15～67.26	L字状	椀状	N-97°-W、N-5°-W	—	
SD-17	(1.59)	(0.63)	0.12	(68.29)～68.33	溝状	皿状	N-80°-E	—	
SD-18	(3.38)	(1.12)	0.16	67.84～(67.91)	ノ字状	椀状	N-20°-W～N-8°-E	磨製石斧	
SD-19	(3.48)	0.46	0.14	(67.38)～67.40	(溝状)	椀状	N-16°-W	—	
SD-20	(5.60)	1.39	0.27	67.12～(67.38)	ノ字状	椀状	N-16°-W～N-32°-E	—	
SD-21	(5.07)	0.39	0.10	66.46～(66.81)	溝状	椀状	N-73°-W	—	
SD-22	4.66	0.38	0.12	66.12～66.56	溝状	椀状	N-75°-W	—	
SD-23	3.58	0.43	0.15	66.23～66.57	溝状	皿状	N-75°-W	—	
SD-24	3.56	0.54	0.15	66.23～66.40	溝状	椀状	N-24°-E	磁器底部	18世紀
SD-25	(8.25)	0.70	0.15	66.17～(66.52)	溝状	椀状	N-28°-W	須恵器甕体部、杯底部片	〈17世紀後半〉
SD-26	(18.58)	0.50	0.13	65.50～(66.24)	ノ字状	椀状	N-25～66°-W	—	〈17世紀後半〉
SD-27	(2.82)	1.35	0.21	64.73～(64.81)	溝状	不整椀状	N-47°-W	—	
SD-28	(10.25)	(2.45)	0.43	67.21～(67.88)	溝状	不整皿状	N-87°-E	須恵器片、陶器片	〈17世紀以降〉
SD-29	1.57	0.39	0.06	66.66～66.77	溝状	椀状	N-42°-E	—	

(　)遺存値　〈　〉推定

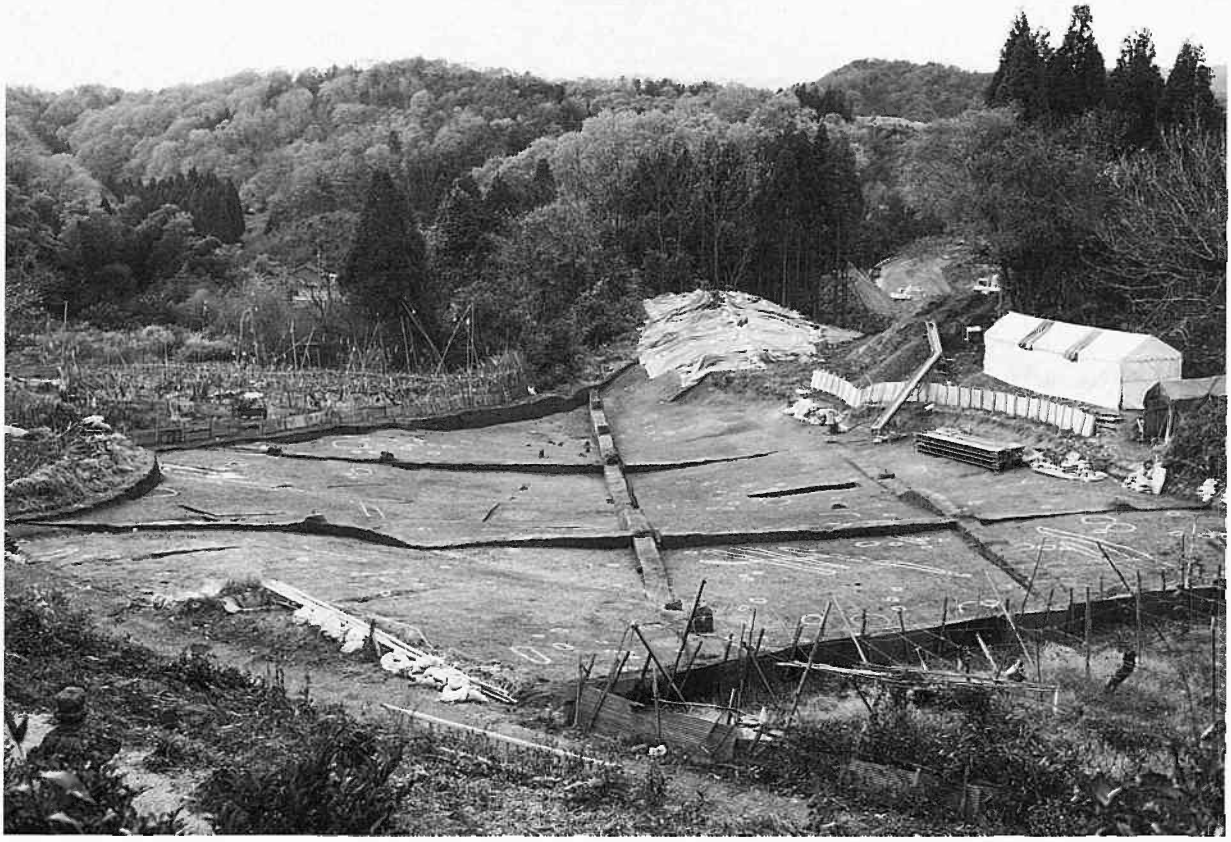
図　　版

三谷国ヶ谷遺跡　調査前(北東から)

三谷国ヶ谷遺跡　谷部調査前(南西から)

図版 2

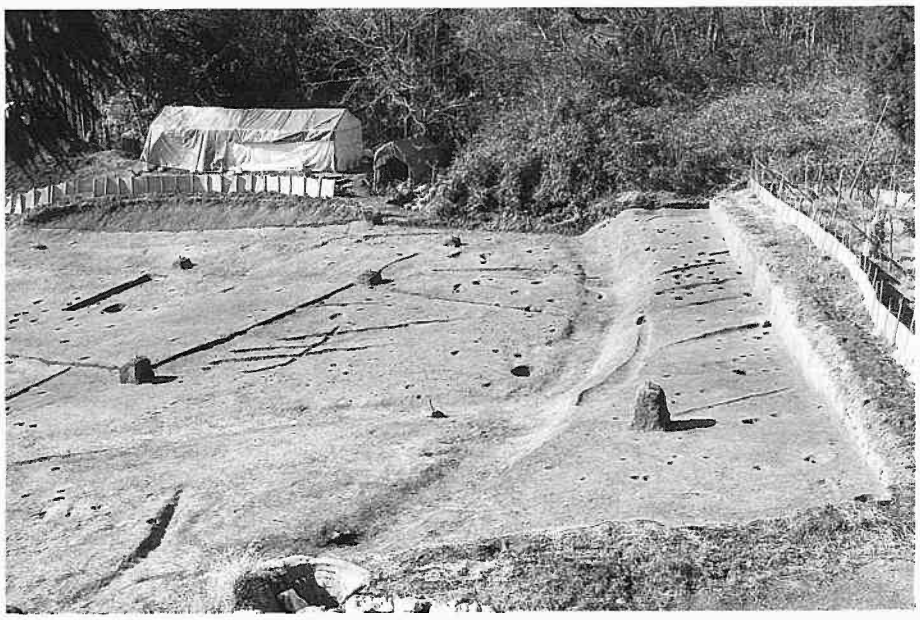
三谷国ヶ谷遺跡　谷部全景（南西から）



三谷国ヶ谷遺跡　谷部土層ベルト設定状況（北東から）

谷部土層ベルト設定状況
（南西から）

谷部C-C″（北壁）断面
（南西から）



SB-01、02遠景
（東から）

図版 4

SB-01検出状況
（西から）

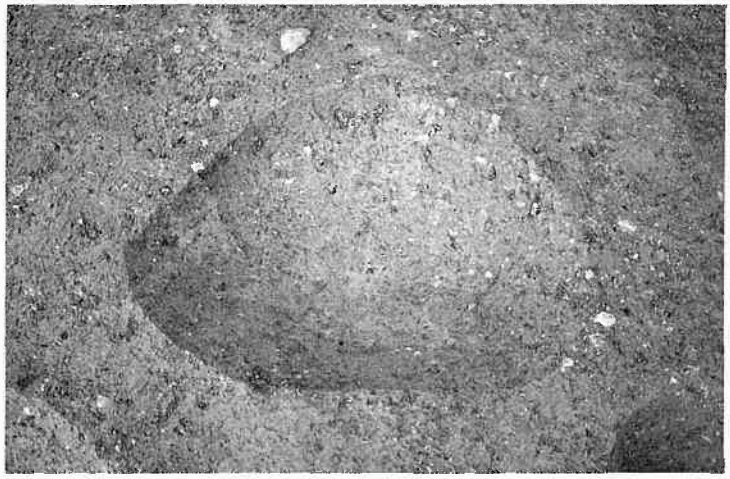
SB-02検出状況
（北東から）

SK-01検出状況
（北から）

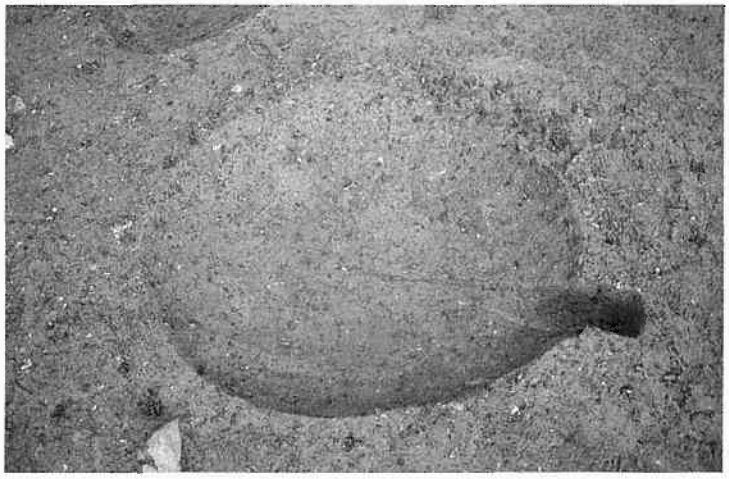
SK-02検出状況
（北西から）

SK-03検出状況
（北西から）

SK-04検出状況
（南西から）

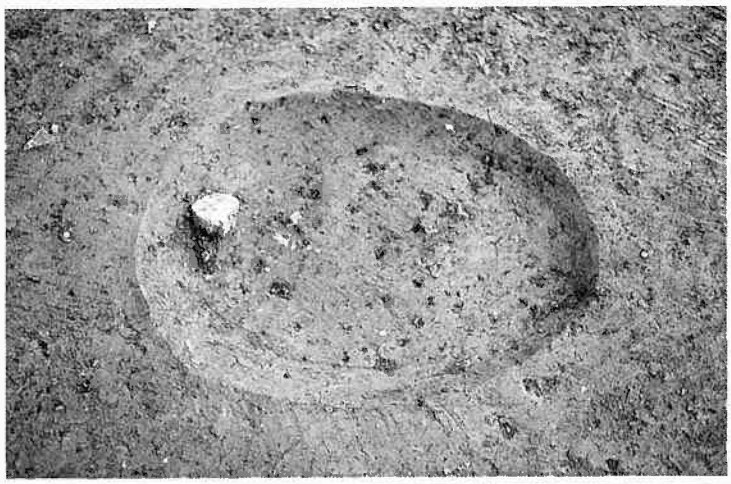


SK-05検出状況
（南から）



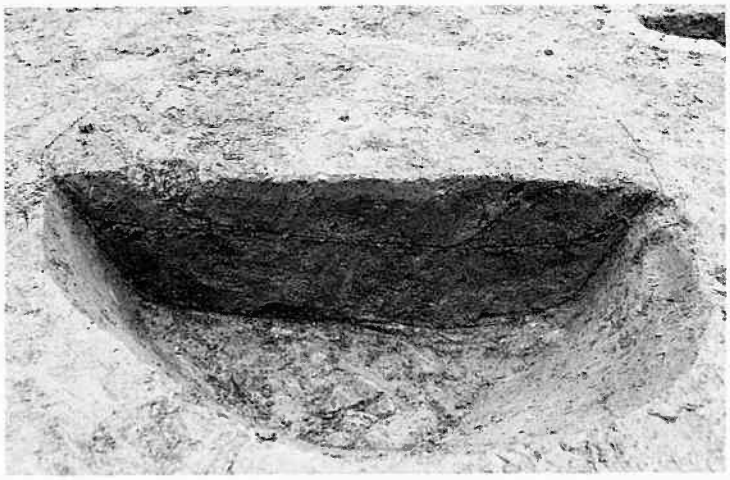
SK-06検出状況
（南西から）

図版 6



SK-07検出状況
（北西から）

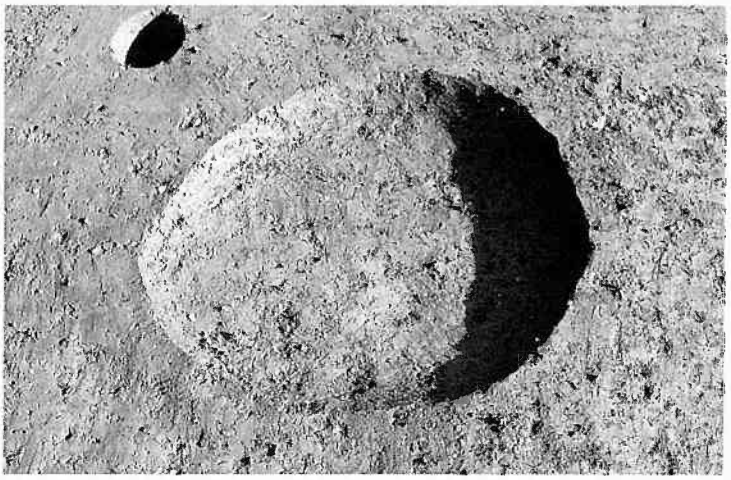
SK-08検出状況
（北西から）



SK-09土層断面
（北西から）

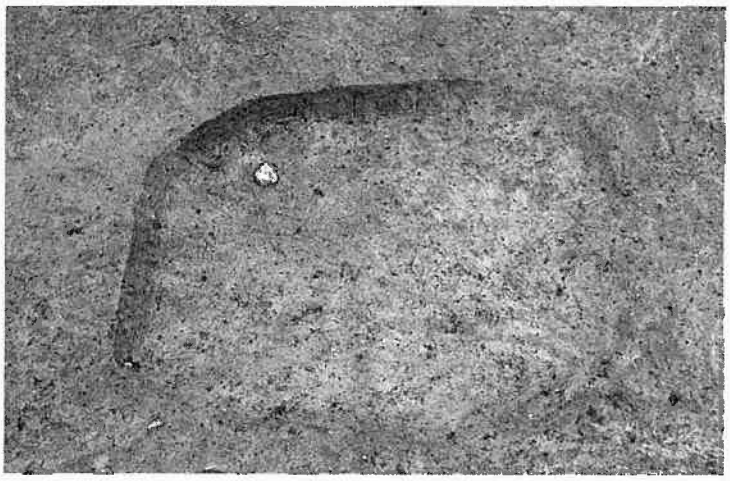
SK-09検出状況
（北西から）

SK-10検出状況
（北西から）



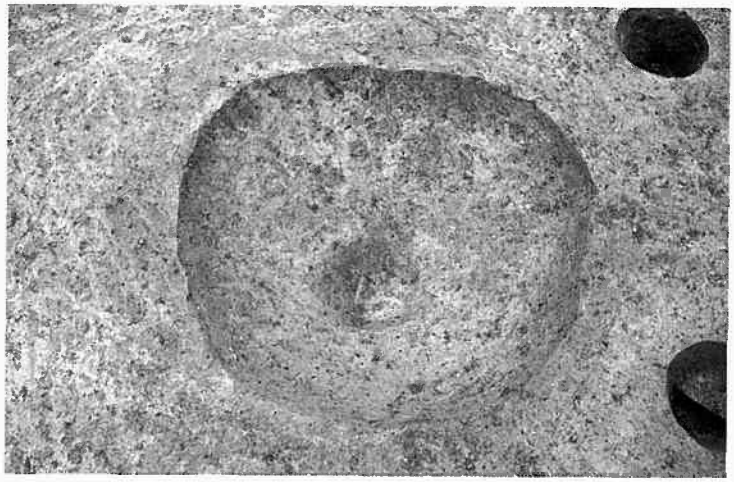
SK-11検出状況
（西から）

SK-12検出状況
（北西から）

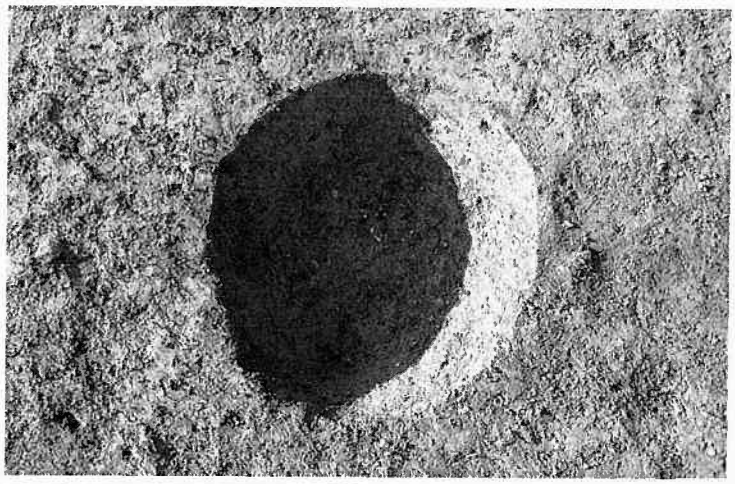


SK-13検出状況
（北西から）

図版 8

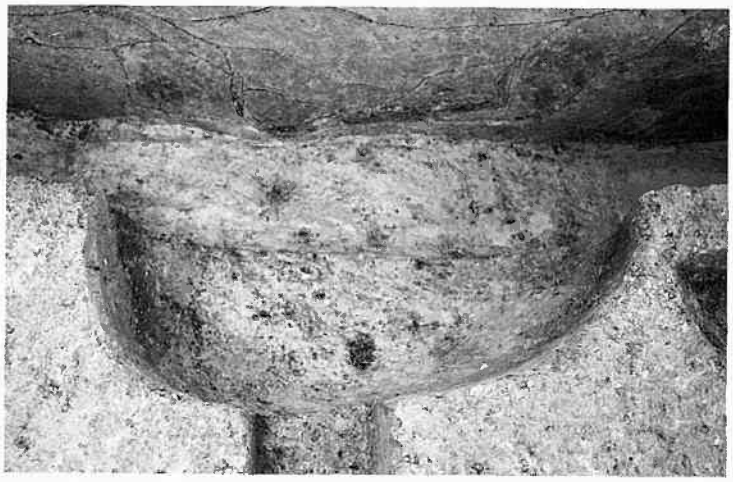


SK-14検出状況
（北から）



SK-15検出状況
（南東から）

SK-16土層断面
（北西から）

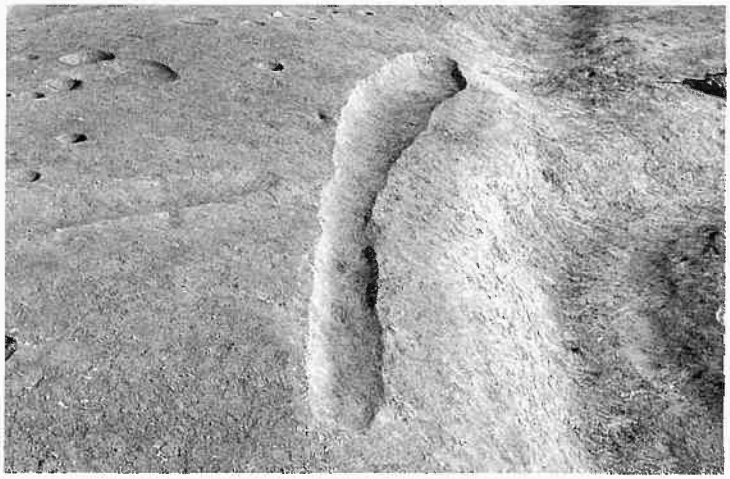


SK-16検出状況
（北西から）

SD-01～05検出状況
（南東から）

SD-06検出状況
（北西から）

SD-07検出状況
（南から）



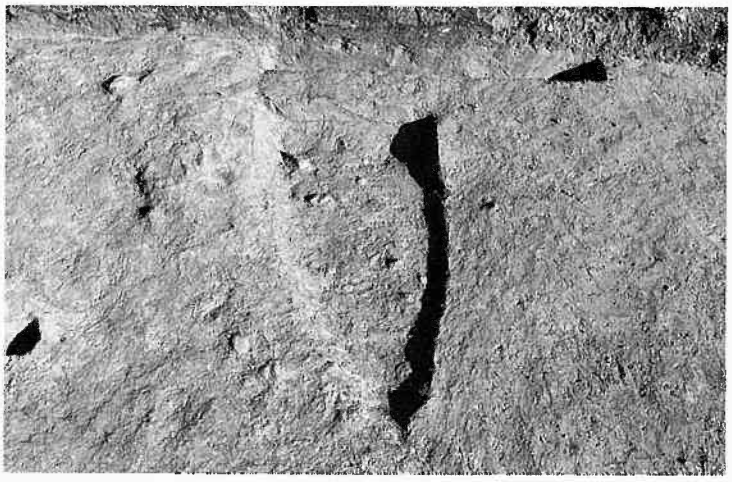
SD-08検出状況
（西から）

図版10

SD-09検出状況
（北から）

SD-10、11検出状況
（北から）

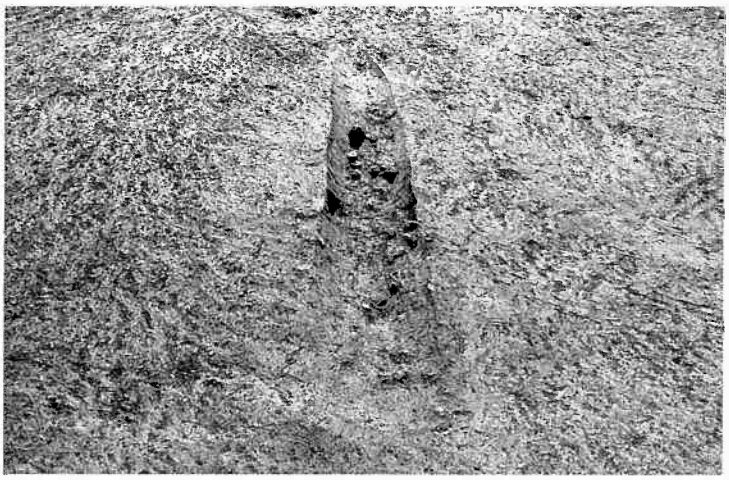
SD-12～16検出状況
（北から）



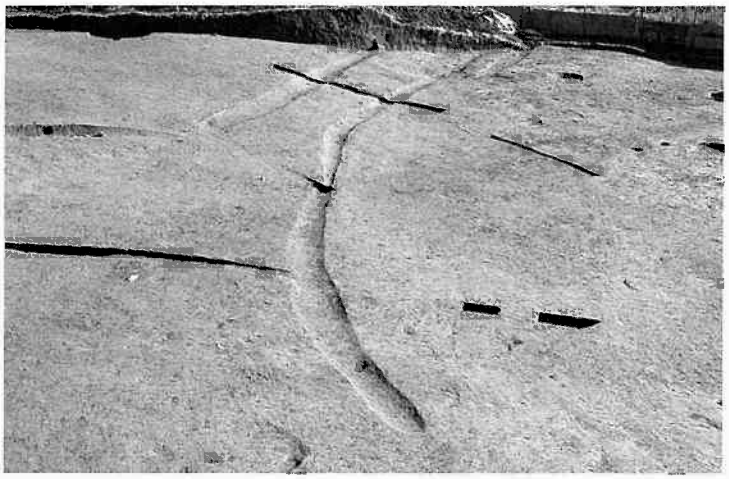
SD-17検出状況
（南西から）

SD-18～20検出状況
（北から）

SD-21～23検出状況
（西から）



SD-24検出状況
（北東から）



SD-25、26検出状況
（北西から）

図版12

SD-28検出状況
（西から）

SD-28土層断面
（西から）

SD-29検出状況
（北東から）

三谷国ヶ谷遺跡　丘陵部調査前(北から)

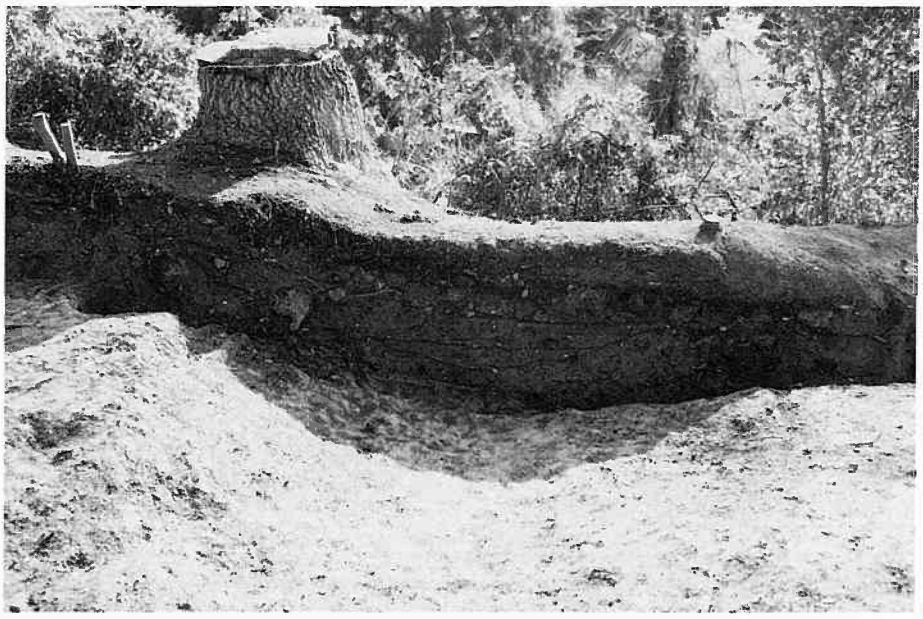
三谷国ヶ谷遺跡　丘陵部全景(北から)

図版14

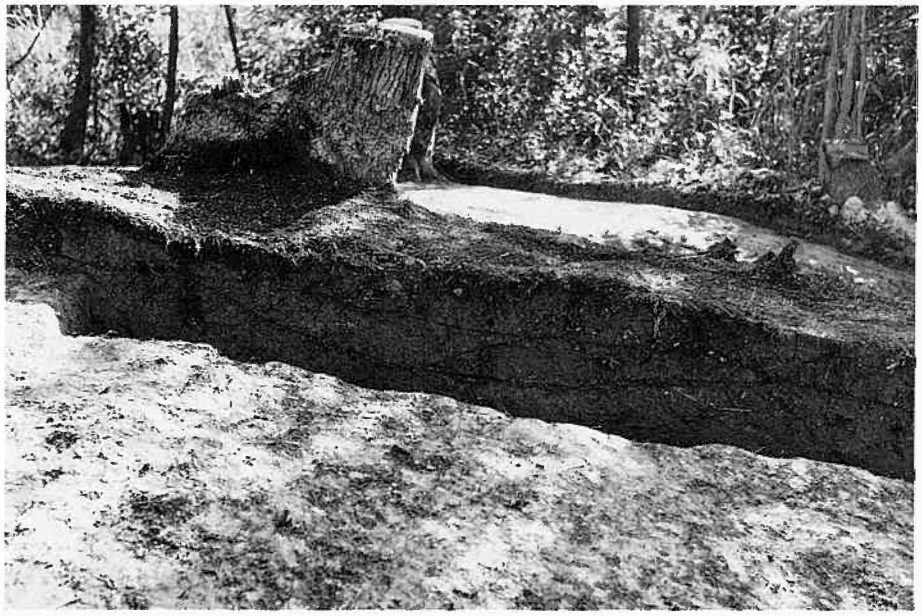
丘陵部土層ベルト
設定状況
（北から）

三谷９号墳土層ベルト
設定状況
（南西から）

三谷９号墳北西断面
（北東から）



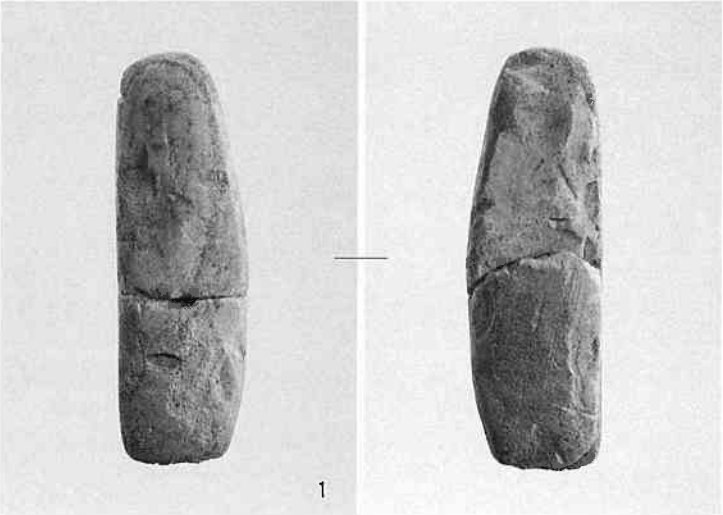
三谷９号墳
北東周溝土層断面
（北西から）



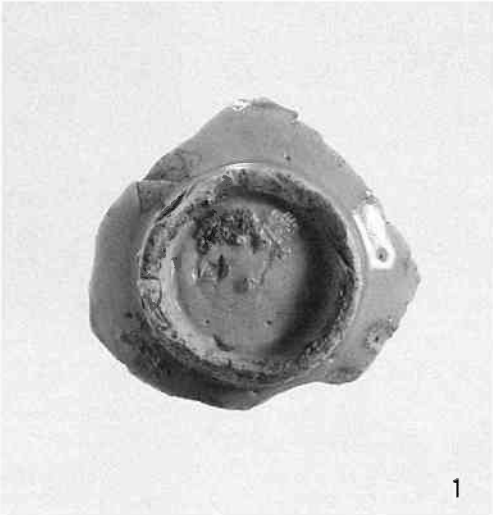
三谷９号墳
南西周溝土層断面
（北西から）

三谷９号墳全景
（南西から）

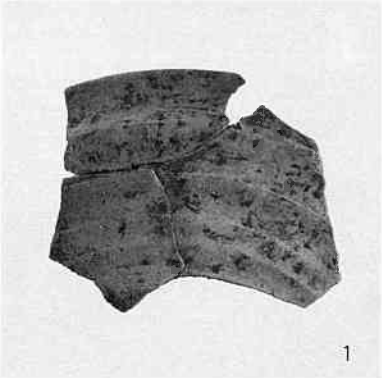
図版16



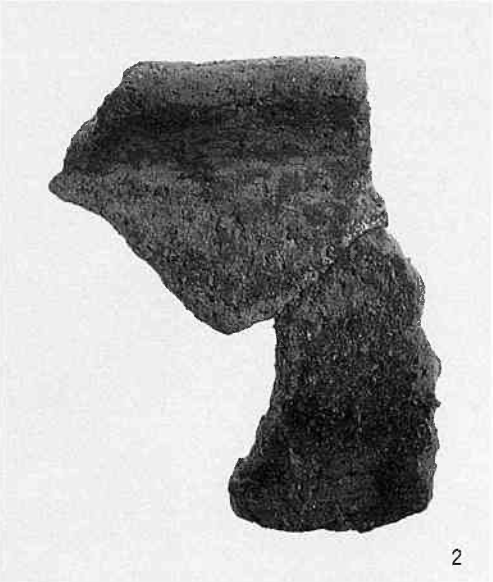
SD-18出土遺物

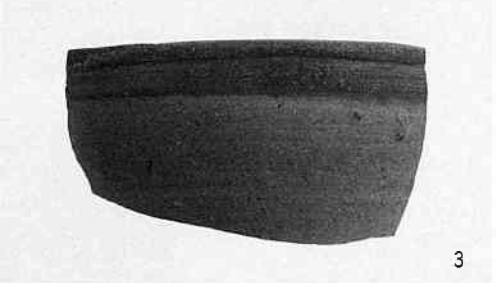


SD-24出土遺物

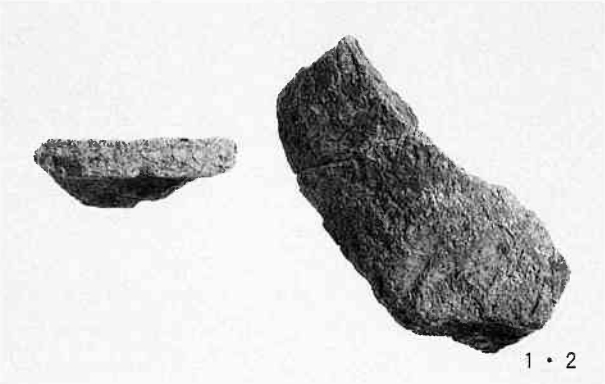


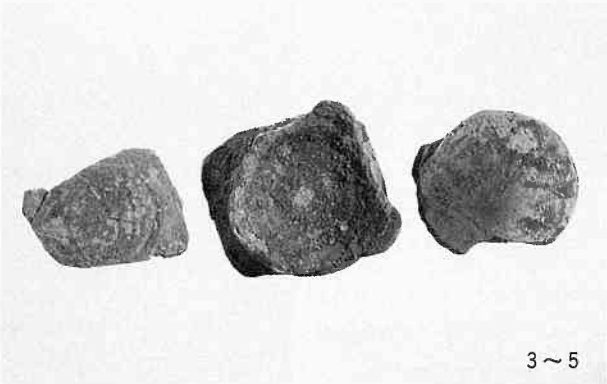
P-198出土遺物



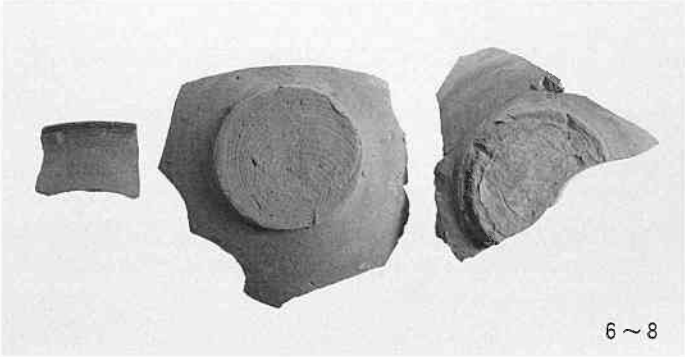


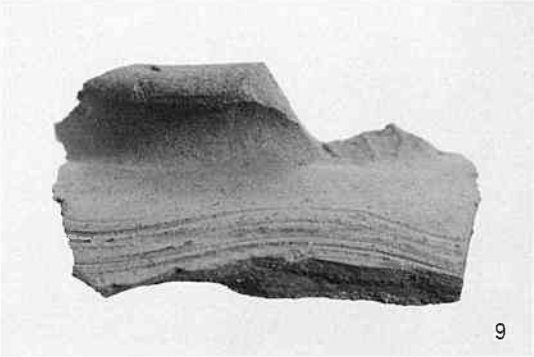
谷部上段出土遺物

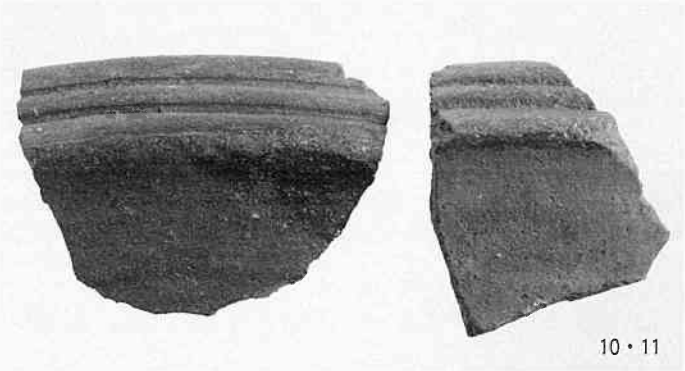




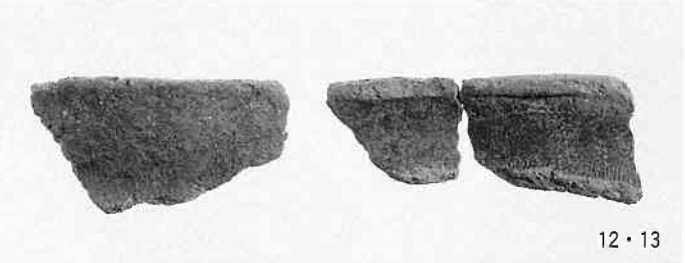
谷部下段出土遺物


6～8

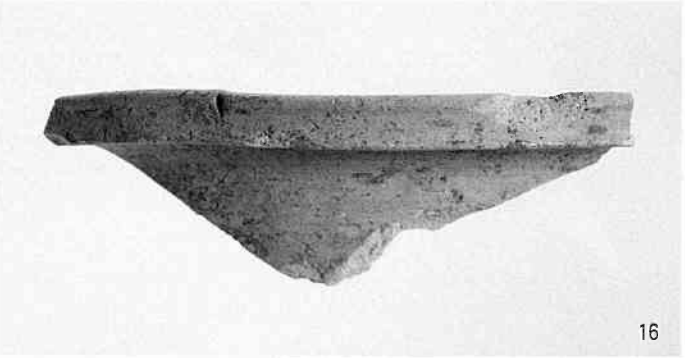

9

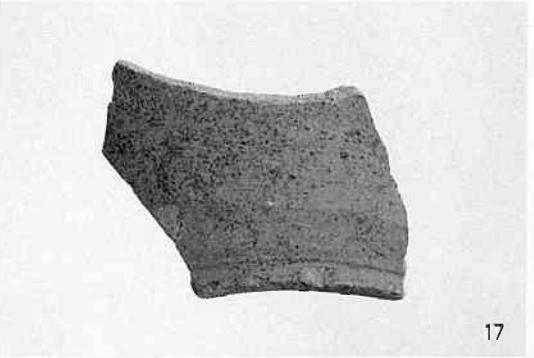

10・11

14

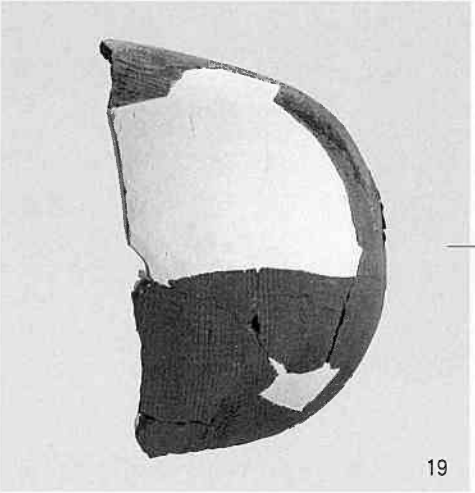

12・13

15


16


17

18

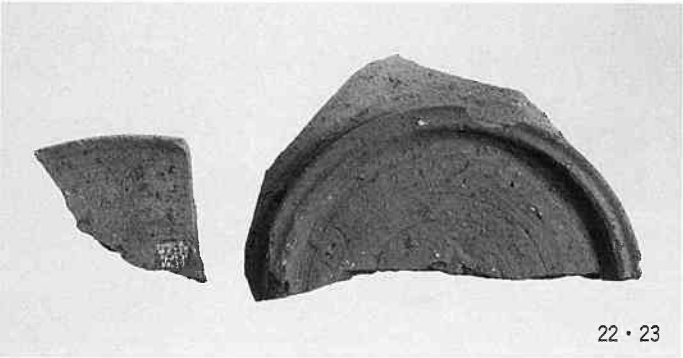

19

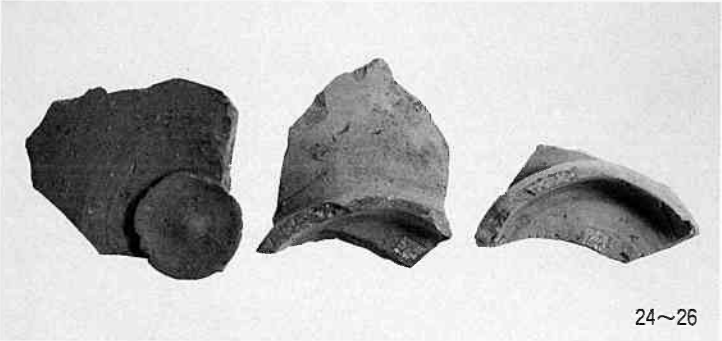
谷部下段出土遺物

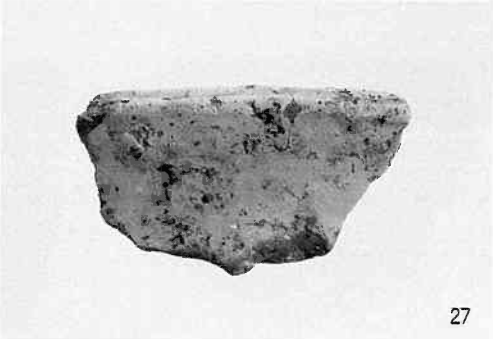
図版18

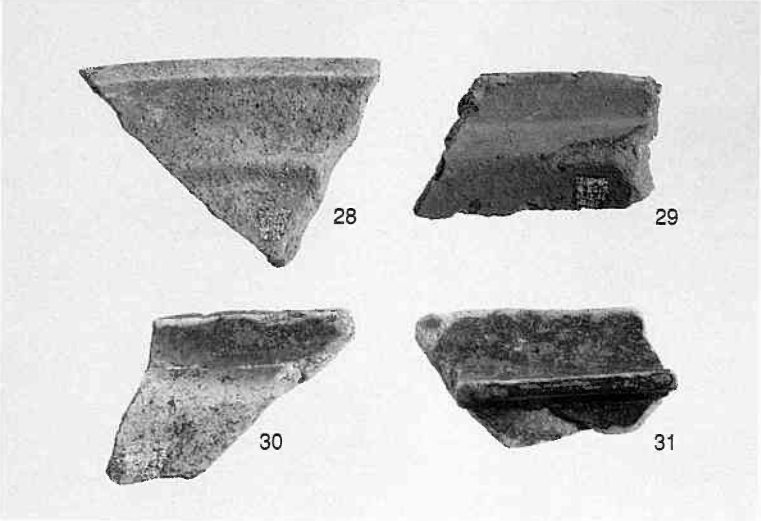
20

21

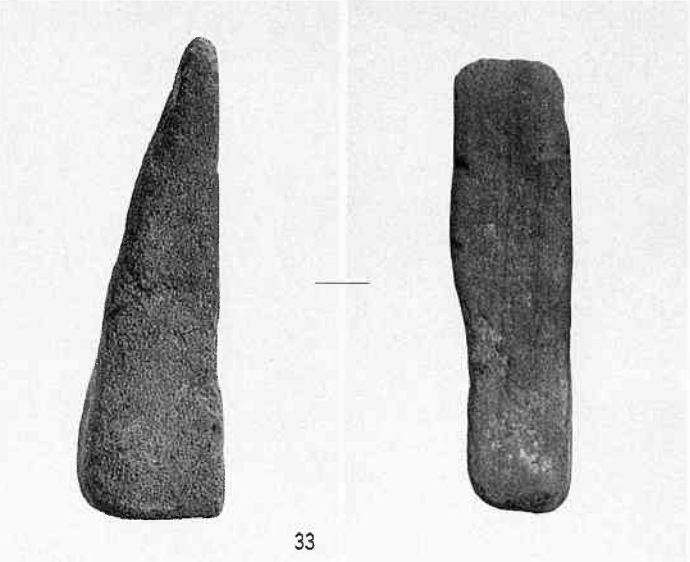

22・23


24～26

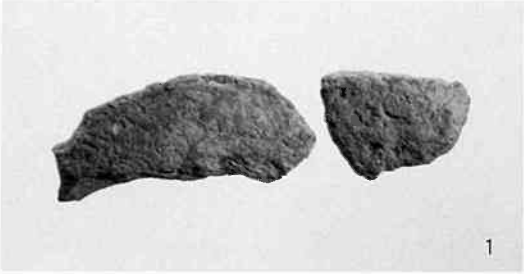

27


28 29 30 31

32


33

谷部下段出土遺物


1

丘陵部出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みたにくにがたにいせき・みたに9ごうふん
書名	三谷国ヶ谷遺跡・三谷9号墳
副書名	一般県道河原インター線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	谷口　恭子
編集機関	財団法人　鳥取市文化財団
所在地	〒680-0197　鳥取県鳥取市国府町町屋305-1　TEL(0857)23-2140
発行年月日	西暦2008年(平成20年)3月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
三谷国ヶ谷遺跡 (みたにくにがたにいせき) 三谷9号墳 (みたにごうふん)	鳥取市 (とっとりし) 河原町 (かわはらちょう) 三谷 (みたに)	31201	1-0234	35° 23′ 44″	134° 13′ 13″	H180619 ～ H190119	2,040	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三谷国ヶ谷遺跡	集落	奈良時代 ～ 室町時代 江戸時代	掘立柱建物 2棟 土坑 16基 溝状遺構 29条 ピット 260基	土師器、須恵器 瓦質土器、陶磁器 緑釉陶器、備前焼 土錘、砥石 弥生土器片	万代寺遺跡から2km南西の谷間の小集落遺跡。
三谷9号墳	古墳	古墳時代後期	円墳 (主体部流失)	須恵器壺甕体部片	径10mの円墳。郷原古墳群の支群とみられる。

三谷国ヶ谷遺跡
三　谷　9　号　墳

——一般県道河原インター線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成20年3月10日　印刷・発行
編集・発行　財団法人　鳥取市文化財団
印　刷　所　勝美印刷株式会社